

「イスラーム地域研究」研究実績報告書 (2006 年度版)

2007 年 4 月 16 日
人間文化研究機構
早 稲 田 大 学
東 京 大 学
上 智 大 学
財団法人東洋文庫
京 都 大 学

【事業全体の目的】

拠点形成の目的

21 世紀に入ると、ニューヨークとワシントンでの同時多発テロ（2001 年 9 月）をかわきりに、米英軍の空爆によるターリバーン政権の崩壊（同年 12 月）や同じ米英軍の侵攻によるフセイン政権の崩壊（2003 年 4 月）など、世界を揺るがす重大事件が相次いで発生した。これらの事件や戦争の背後には、「イスラームのグローバル化と先鋭化」という事実が存在する。21 世紀における世界の動向、石油資源の問題、地域紛争の性格などを正しく理解するためには、この新しい現実をふまえたうえで、イスラームと各地域社会との関係を多様なディシプリン研究を活用して具体的に明らかにすることが不可欠である。新研究計画の実行によって、創成的基礎研究「イスラーム地域研究」プロジェクト（1997-2002 年）を継承し、これをさらに発展させることによって、日本におけるイスラーム研究・教育の拠点形成をめざす。具体的には、以下の 3 点を主要な課題として設定する。

1. 現地の研究者を含む国際的な共同研究を実施し、「他者」と「当事者」双方の目を通して「イスラームと地域」の係わりを分析することにより、現代イスラーム世界について実証的な知の体系を築くと同時に、その理解の深化をはかる。また、この研究を積み重ねることによって、イスラーム地域研究に固有な研究手法を開発する。
2. 各研究拠点における研究の基盤となる文献資料を収集、整備し、創成的基礎研究「イスラーム地域研究」で開発されたアラビア文字による情報検索システムを整備して、蓄積された史資料のデータベース化、情報の公開、史資料利用の全国化・国際化をさらに促進する。同時に、書誌学的研究を進めることにより、イスラーム史資料学の開拓をめざす。
3. 各研究拠点の活動が、イスラーム地域研究に関する大学院教育の充実につながるよう配慮するとともに、国内・国外の若手研究者が本イスラーム地域研究へ参加することを積極的に奨励し、国際的な活動を通じて次世代のイスラーム研究を担う若手研究者を養成する。

研究対象

現代のイスラームは、地域を越える共通の問題と同時に、地域の歴史や文化と結びつく地域の個性に関わる問題を抱えている。イスラーム地域研究では、この双方の問題に取り組み、イスラームの知と文明、イスラームの宗教・思想と政治運動、イスラームの社会と文化、イスラーム関係史資料の収集と書誌的研究、イスラーム世界の国際組織などの側面から総合的に研究する。対象となる地域は、中東、北アフリカ、中央アジア、南・東南アジアばかりでなく、必要に応じてアフリカ、ヨーロッパ、中国、さらにはアメリカや日本にも及ぶことになる。

研究方法

対象となる地域の規模は、中東や中央アジアなど従来の地域概念に縛られることなく、課題に応じて中小の地域を設定し、地域を越える共通の問題と同時に、イスラームと地域の個性との関わり方を追究する。イスラーム地域研究は、宗教学、政治学、経済学、歴史学、社会学、文化人類学などのディシプリン研究を基礎とし、それらの研究成果を総合することをめざす。この総合を実現するために、(1) いくつかの地域をとりあげ、それらを比較する地域間比較の手法と、(2) 現代の問題ではあっても、歴史をさかのぼって解明する歴史的アプローチの手法とを採用する。このような研究手法を活用することによって、国際的な共同研究を実施し、現代イスラーム世界に関する実証的な知の体系を築くことがねらいである。

研究組織

イスラーム地域研究は、早稲田大学イスラーム地域研究所を中心拠点とし、東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター、上智大学アジア文化研究所、財団法人東洋文庫研究部、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に置かれる 5 拠点を結ぶネットワーク型の研究組織をつくり、人間文化研究機構との共同研究として実施される。

【2006 年度事業の目的と活動内容】

1．事業の開始

本事業は、グローバル化したイスラームとイスラーム地域を対象に、人間文化研究機構（National Institutes for the Humanities NIHU）と 5 つの大学・研究機関との共同で、研究拠点の形成とネットワークの構築を進め、総合的なイスラーム理解の深化をはかることを目的としている。この事業目的を推進するために、2006 年度には全体の事業計画を策定し、5 つの拠点を定めて研究・教育拠点の形成と研究事業の開始をはかることとした。なお、本事業の正式名称は「NIHU プログラム・イスラーム地域研究」と定められた。

2．事業計画の決定、拠点の設置

前述の拠点形成の目的に照らして、早稲田大学、東京大学、上智大学、東洋文庫、京都大学の5機関に研究拠点を定め、早稲田大学が中心拠点として事業全体の調整・とりまとめを行うこととした。これらの拠点を定めたうえで、後述の「研究組織」にあるように、早稲田大学にはイスラーム地域研究所内に現代イスラーム地域センター（2006年5月1日）、東京大学には大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センターにイスラーム地域研究部門（同年6月14日）、上智大学にはアジア文化研究所にイスラーム地域研究拠点（同年7月1日）、東洋文庫には研究部にイスラーム地域研究資料室（同年7月18日）、京都大学にはアジア・アフリカ地域研究研究科にイスラーム地域研究センター（同年12月1日）がそれぞれ設置された。

各研究拠点は、本事業全体の目的と計画にもとづいて、5年間の事業計画を策定し、同時に2006年度の事業計画を作成した。事業の中核となる研究活動については、早稲田大学が「イスラームの知と文明」、東京大学が「イスラームの思想と政治」、上智大学が「イスラームの社会と文化」、東洋文庫が「史料収集とイスラーム資料学の開拓」、京都大学が「イスラーム世界の国際組織」を主要課題に定め、それぞれ特色ある研究拠点づくりをめざすことになった。

（佐藤次高）

3．人間文化研究機構地域研究推進センター研究員の派遣

イスラーム地域研究推進事業の実施に伴い、人間文化研究機構地域研究推進センターでは、本事業の推進に必要な研究者を「地域研究推進センター研究員」として採用し、各拠点へ派遣する。派遣先の拠点においては、受け入れる研究員に相当職を兼務させることになる。研究員は、派遣先の拠点において、拠点形成のための実務及び共同研究の推進を担うものである。

今年度は、早稲田大学拠点、上智大学拠点、東洋文庫拠点の3拠点へ派遣する研究員を下表のとおり採用した。研究員はそれぞれの拠点において、拠点形成に係る事務及び研究に積極的に取り組んでいる。なお、東京大学拠点については来年度4月1日付け採用、京都大学拠点については来年度5月1日付け採用を予定している。

採用にあたっては、本事業を広く周知し、国内及び国外に分散する有望な若手のイスラーム地域研究者を採用するため、センターにおいて2回の公募（第1回：平成18年8月1日～31日、第2回：平成18年12月1日～平成19年1月31日）を実施した。各回十数名の応募があり、日本人研究者だけではなく、イランやチュニジア出身の研究者の応募もみられた。選考は、センターと各拠点が連携し、イスラーム地域部会において書類選考と、必要に応じて面接試験を行うこととして、そのとおり実施した。

（平野健一郎）

拠 点 名 称	氏 名	職 名	派遣期間
早稲田大学イスラーム地域研究所・現代イスラーム地域研究センター	佐藤 健太郎	地域研究推進センター研究員 早稲田大学客員講師	18.6.16 ～ 23.3.31
上智大学アジア文化研究所・イスラーム地域研究拠点	高橋 圭	地域研究推進センターPD 研究員 上智大学アジア文化研究所客員研究員	18.10.1 ～ 23.3.31
東洋文庫研究部・イスラーム地域研究資料室	柳谷 あゆみ	地域研究推進センターPD 研究員 東洋文庫研究員	18.10.1 ～ 23.3.31

4．事業全体としての行事

2006 年 7 月 21 日に、早稲田大学大隈タワーにおいて、NIHU プログラム・イスラーム地域研究の発足にあたり、「「イスラーム地域研究」の拠点形成をめざして」と題して第 1 回の合同集会を開催した。参加者は、各拠点代表者・研究分担者、人間文化研究機構の関係者、それに早稲田大学総合研究機構の関係者などであった。

同年 11 月 26 日には、早稲田大学小野記念講堂において、イスラーム地域研究の発足を記念する講演会が開催された（第 2 回合同集会）。統一テーマは「イスラーム地域研究の新展開」であり、アブドゥルカリーム・ラーフェク氏（ウイリアム&メアリ大学）が「シリア社会の中のムスリムとキリスト教徒」（英語）、オマール・ファルーク氏（広島市立大学）が「日本におけるイスラーム地域研究：東南アジアからの視点」（英語）、河野洋平氏（衆議院議長）が「21 世紀のイスラーム世界と日本—イスラーム地域研究への期待—」と題する講演を行い、発足記念にふさわしい充実した講演会となった。

また 2007 年 3 月 27 日には、初年度の研究事業の締めくくりとして、第 3 回合同集会が早稲田大学において開催された。第 1 部では、佐藤次高研究代表の総括につづいて、各拠点代表者、研究グループ・リーダーが 2006 年度の活動報告を行い、さらに 2007 年度へ向けての展望を語った。第 2 部では、地域の理解には音楽の理解も不可欠だとの認識にもとづき、中町信孝氏が「アラブ音楽を語る・聴く」と題してアラブの大衆音楽を紹介し、参加者に新鮮な感動を与えることができた。

（佐藤次高）

【研究組織】

中心拠点：早稲田大学イスラーム地域研究所・現代イスラーム地域研究センター

「イスラームの知と文明」 総括責任者：佐藤次高

(2006年5月1日 イスラーム地域研究に関する研究協力協定締結)

拠点 1：東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター・イスラーム地域研究部門

「イスラームの思想と政治：比較と連関」 総括責任者：小松久男

(2006年6月14日 イスラーム地域研究に関する研究協力協定締結)

拠点 2：上智大学アジア文化研究所・イスラーム地域研究拠点

「イスラームの社会と文化」 総括責任者：私市正年

(2006年7月1日 イスラーム地域研究に関する研究協力協定締結)

拠点 3：財団法人東洋文庫研究部・イスラーム地域研究資料室

「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」

総括責任者：三浦 徹

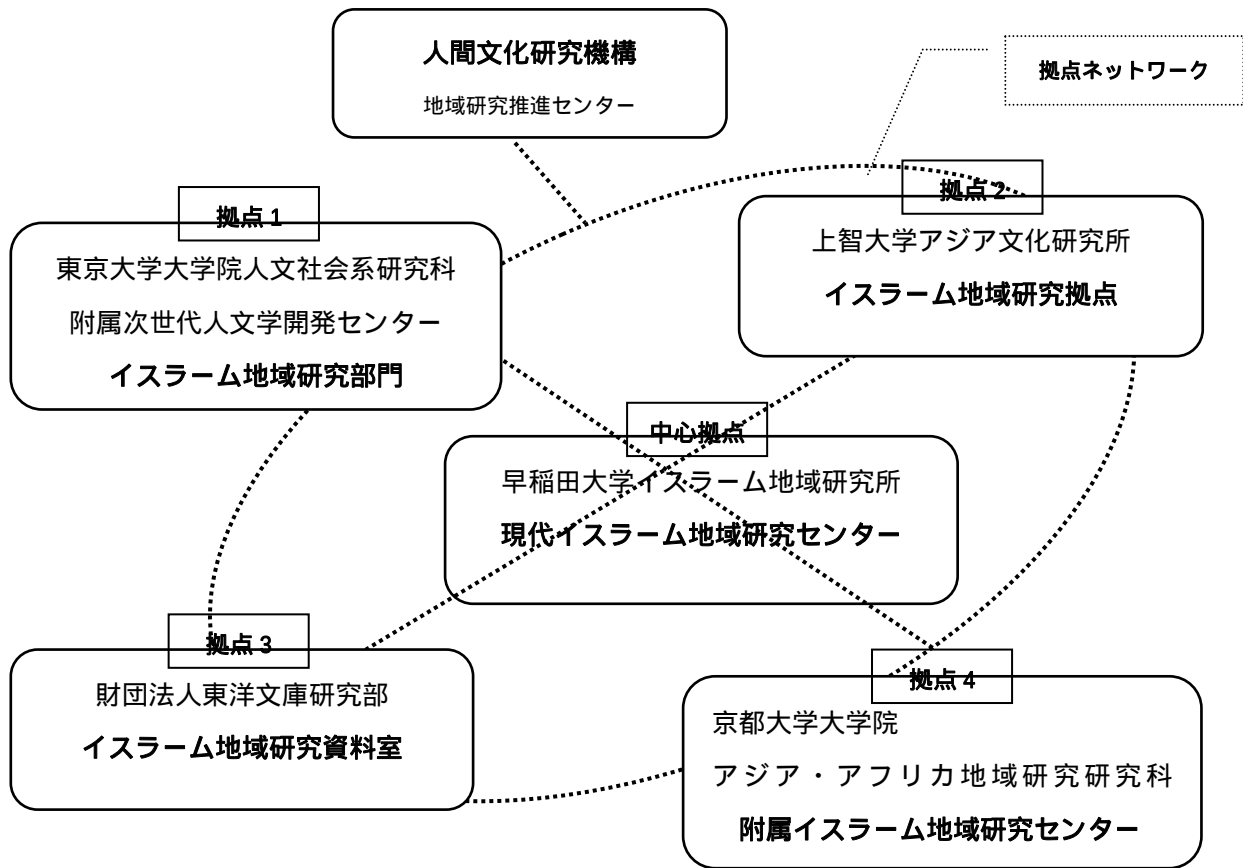
(2006年7月18日 イスラーム地域研究に関する協力協定締結)

拠点 4：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・附属イスラーム地域研究センター

「イスラーム世界の国際組織」 総括責任者：小杉 泰

(2006年12月1日 イスラーム地域研究に関する研究協力協定締結)

【組織図】



早稲田大学イスラーム地域研究所・現代イスラーム地域研究センター

代表：佐藤 次高（早稲田大学イスラーム地域研究所長・同学文学学術院教授、
人間文化研究機構客員教授）

テーマ 『イスラームの知と文明』

イスラームの長い歴史と文明を視野に入れたうえで、刻々と変容するイスラームに固有な知と権威のありかた、さらにはアジアのムスリム・ネットワークを多角的に考察することにより、現代イスラームの理解をいっそう深めることをめざす。

【研究事業名】

総括班

研究グループ1「イスラームの知と権威：動態的研究」

代表：湯川 武（慶應義塾大学商学部教授、早稲田大学客員教授）

研究グループ2「アジア・ムスリムのネットワーク」

代表：桜井 啓子（早稲田大学国際教養学術院教授）

【拠点形成の目的と意義】

当研究センターは、人間文化研究機構イスラーム地域研究推進事業に参画する5拠点（早稲田大学、東京大学、上智大学、京都大学、東洋文庫）を結んで行われる共同研究の調整・とりまとめを行うことにより、中心拠点としての役割を果たす。各拠点が特色ある研究の拠点を形成し、これらをネットワークで結ぶことにより、全体としてイスラーム地域研究の重要拠点を形成することがねらいである。

当研究センターに和文・英文のホームページを立ち上げ、5拠点全体の研究計画、研究活動、研究成果、教育カリキュラム、国際交流の企画などについて新情報を提供する。また、現地の大学・研究所と提携することにより、イスラームに関する共同研究の実施、研究・教育に関する情報の収集と発信などを通じて、国際的な共同研究、学術交流における中心拠点を形成する。

早稲田大学における研究は、研究センターのスタッフを中心に「イスラームの知と文明」に関わる2つの研究グループを編成する。具体的には(1)「イスラームの知と権威：動態的研究」と(2)「アジア・ムスリムのネットワーク」である。

【組織】

（研究拠点構成員）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 （担当研究テーマ）
佐藤 次高	早稲田大学イスラーム地域研究所長・同学文学学 術院教授、人間文化研究機構客員教授	拠点総括責任者 （総括）
湯川 武	慶應義塾大学商学部教授、 早稲田大学客員教授	研究グループ1 代表者 （ムスリム知識人問題）
佐藤健太郎	人間文化研究機構地域研究推進センター研究員、 早稲田大学客員講師	研究グループ1 研究分担者 （マグリブ・アンダルス地域）
桜井 啓子	早稲田大学国際教養学術院教授	研究グループ2 代表者 （イラン・日本のムスリム）
家島 彦一	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	
店田 廣文	早稲田大学人間科学学術院教授	研究グループ2 研究分担者 （イスラーム世界の都市）
保坂 修司	早稲田大学客員助教授	

【平成 18 年度事業の目的と活動内容】

1. 今年度事業の目的

プログラム実施初年度の今年は、早稲田大学総合研究機構に属するイスラーム地域研究所内に、人間文化研究機構との共同で現代イスラーム地域研究センターを立ち上げることを第1の目的に定めた。イスラーム地域研究所の研究員を中心に拠点メンバーを選択し、さらにこの拠点メンバーを核にして5，6名の分担者からなる2つの研究グループ（グループ1：イスラームの知と権威、グループ2：アジア・ムスリムのネットワーク）を設立した。

また、早稲田大学拠点は、プログラムの中心拠点として、和文・英文のホームページを立ち上げ、事業全体の調整ととりまとめを行う。それと同時に合同集会や記念講演会を開催し、各拠点の研究分担者・研究協力者間の意志疎通をはかることにしたいさらに現地研究者を1-2ヶ月間招聘して、共同研究を実施する予定である。

（佐藤次高）

2. 今年度事業の内容

(1)拠点整備

早稲田大学 41-31 号館 4 階の早稲田大学イスラーム地域研究所内に現代イスラーム地域研究センターを設置した。事務室、人間文化研究機構から派遣される研究員の研究室（2 部屋）、外国人研究員研究室兼会議室、資料室の 5 部屋からなり、ここにコピー機やパソコン、Web サーバ、ファイルサーバ等を設置した。メーリングリストを開設し、NIHU プログラム・イスラーム地域研究のすべての拠点代表者・研究分担者・研究協力者を登録して、自拠点だけでなく他拠点の活動についても情報を共有できるようにした。また、Web サイト（<http://www.islam.waseda.ac.jp>）を構築し、イスラーム地域研究全体、および早稲田拠点にかかわる種々の情報を発信するための基盤を整備した。

(2)研究会活動

総括版では 3 回の合同集会（7 月 21 日、11 月 26 日、3 月 27 日）を開催するとともに、アブドゥルカリム・ラーフェク教授によるアラビア語文書史料講読演習 4 回（11 月）を実施した。また、各研究グループでも、グループ 1 全体集会やグループ 2 各班の研究会などが活発におこなわれた。詳細は、総括班およびグループ 1・グループ 2 それぞれの研究会活動の項を参照されたい。

(3)海外派遣・調査

総括班では、海外の研究者とのネットワーク作りや、若手研究者の育成に主眼をおいた海外派遣を実施した（計 3 件、のべ 4 人）。グループ 1・グループ 2 ではそれぞれの研究テーマに沿った海外調査および国内調査（計 15 件、のべ 21 人）を計画・実施した。詳細は、総括班およびグループ 1・グループ 2 それぞれの海外派遣・調査の項を参照されたい。

(4)外国人研究者の招聘

今年度は、総括班において、アブドゥルカリム・ラーフェク氏（米国、ウィリアム&メアリ大学）およびアフマド・サアディー氏（イスラエル、ベン・グリオン大学）の二人を招聘した。他者と当事者双方の視点を重視する今回のイスラーム地域研究において、現地研究者の視点を知る機会を得たのは意義深いことであった。

（佐藤健太郎）

(5)資料収集

タイトル	Encyclopaedia of Islam, new edition
著者・编者	
出版地	Leiden
出版者	E.J. Brill
出版年	1960-2004
形態	
内 容	主として欧米学界において蓄積されてきたイスラームに関する知の集大成ともいべき全 12 巻の百科事典で、イスラーム研究をするうえで最も基本的な文献の一つである。
収集期間 ・ 収集方法	2007 年 1 月 10 日、ナガラ書店より購入。

(6)研究成果・発表（論文・図書）

〔論文〕計（50）件

著 者 名	論 文 標 題			
赤坂 恒明	「草原の民と山岳の民が織りなす歴史 ――北コーカサスの歴史時代――」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
北川誠一／前田弘毅／廣瀬陽子／吉村貴之編著 『コーカサスを知るための 60 章』、東京、明石書店			2006. 4	92-96

著 者 名	論 文 標 題			
赤坂 恒明	「ジョルジュ・デュメジル ――トルコ共和国でのコーカサスとの出会い――」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
北川誠一／前田弘毅／廣瀬陽子／吉村貴之編著 『コーカサスを知るための 60 章』、東京、明石書店			2006. 4	275-277

著 者 名	論 文 標 題		
赤坂 恒明	「チンギス・ハン即位八百周年を迎えて、 「キプチャク汗国」史研究の周辺」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
『歴史と地理』通巻第五九九号「世界史の研究」209、 東京、山川出版社		2006. 11	55-58

著 者 名	論 文 標 題		
赤坂 恒明	「チンギス・ハンの末裔たち その後のモンゴル帝国」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
『歴史群像シリーズ特別編集 チンギス・ハーン 大モンゴル“蒼き狼”の覇業』、東京、学習研究社		2007.3	144-149

著 者 名	論 文 標 題		
飯山 陽	「ムウタズィラ派法理論にみる公益あるいは公共善概念 の萌芽 - アブー・アルフサイン・アルバスリーの法理論 より - 」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
『東洋学報』	87-4	2006. 3	1-27

著 者 名	論 文 標 題		
大澤 広嗣	「気になる数字・データ集」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2007』平凡社		2007. 3	322-329

著 者 名	論 文 標 題		
大澤 広嗣	「宗教学研究者と「満洲国」——建国大学の松井了穂」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『佛教文化学会紀要』	15	2007. 2	34-44

著 者 名	論 文 標 題		
菊地 達也	「イスマール派教宣員とイマームの帝都カイロ」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『アジア遊学』	86	2006. 4	34-44

著 者 名	論 文 標 題		
菊地 達也	「ハムザ書簡群に見るドゥルーズ派終末論の形成過程」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『東洋文化』	87	2007. 3	

著 者 名	論 文 標 題		
小島 宏	「国際人口移動に関する国際協調は可能か ——第 39 回国連人口開発委員会に参加して」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『週刊社会保障』	60 第 2392 号	2006. 7	60-61

著 者 名	論 文 標 題		
小島 宏	「国際人口移動に関する世論と移民の社会的統合 ——ヨーロッパの経験」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
吉田良生・河野稔果（編）『国際人口移動の新時代』原書房		2006. 5	79-104

著 者 名	論 文 標 題		
小島 宏	“Stephen P. Heyneman (ed.), <i>Islam and Social Policy</i> ”		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『海外社会保障研究』	155	2006. 6	75-78

著 者 名	論 文 標 題		
小島 宏	“Déterminants environnementaux de la santé infantile et maternelle dans les pays asiatiques”		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
Association Internationale des Démographes de Langue Française (AIDELF) (éd.), <i>Enfants d'aujourd'hui: diversité des contextes, pluralité des parcours</i> , Paris: AIDELF		Juin, 2006	768-778

著 者 名	論 文 標 題		
後藤 絵美	「「預言者の風刺画」とイスラムの心 ——問題へのもう一つの視点」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『国際人流』	19(4) 通号 227	2006. 4	17-19

著 者 名	論 文 標 題		
後藤 絵美	「ヴェールを手取るまで——現代エジプトの 宗教パンフレットに見るヒジャーブ着用の理由」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『比較文学研究』(特輯 中東世界)	87	2006. 5	79-101

著 者 名	論 文 標 題		
後藤 絵美	「イスラームの女性観——聖典と日常のあいだ」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『年報 地域文化研究』	10	2007. 3	

著 者 名	論 文 標 題		
小林 春夫	「シャハラズーリーのスルラワルディー著『開示の書』 註釈—序論、テキスト校訂、邦訳訳注」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『東洋文化』	87	2007. 3	

著 者 名	論 文 標 題		
小林 寧子	「イスラーム政策と占領地支配」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
倉沢愛子他編『岩波講座 アジア・太平洋戦争 7 支配と 暴力』岩波書店		2006. 5	63-94

著 者 名	論 文 標 題		
佐藤 健太郎	「キリスト教徒征服後のグラナダと 「隠れムスリム」の翻訳者」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
『アジア遊学』	86 号	2006 年 4 月	79-91

著 者 名	論 文 標 題		
佐藤 健太郎	アブドッラー・ジビルー著、佐藤健太郎訳「モロッコから見たスペイン」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
『史資料ハブ 地域文化研究』	8 号	2006. 9	32-44

著 者 名	論 文 標 題		
佐藤 健太郎	「ヤンナイルとアンサラ ―西方イスラーム世界の祭」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
『世界史の研究』	209	2006. 11	1-17

著 者 名	論 文 標 題		
佐藤 健太郎	"Sufi Celebrations of Muḥammad's Birthday (<i>al-Mawlid al-Nabawī</i>) and the Ulama's view on it in al-Andalus and al-Maghrib, 1300-1400"		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
<i>Sophia Asian Studies</i> (『上智アジア学』)	24	2006. 2	7-15

著 者 名	論 文 標 題			
佐藤 次高	「NIHU プログラム『イスラーム地域研究』の発足」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『日本中東学会ニューズレター』		108	2006. 10	13-15

著 者 名	論 文 標 題			
佐藤 次高	研究フォーラム「イスラーム地域研究の新展開」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『世界史の研究』		210	2007. 2	52-56

著 者 名	論 文 標 題			
佐藤 次高	Editorial advisor for the special issue of Mamlūk Studies Review			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
<i>Mamlūk Studies Review</i>		10-1	2006	

著 者 名	論 文 標 題			
佐藤 次高	“Slave Traders and Karimi Merchants during the Mamluk Period: A Comparative Study”			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
<i>Mamlūk Studies Review</i>		10-1	2006	141-156

著 者 名	論 文 標 題			
佐藤 次高	“The Islamic Area Studies Project in Japan, 1997-2002: Its Achievements and Future Prospects”			
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ	
<i>Asian Research Trends, New Series</i>	1	2006	33-44	

著 者 名	論 文 標 題			
新保 敦子	「 關於回族女性教育指導者の考察—公弁教育及宗教教育的比較与探討」			
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ	
『第2次回族学国際学術研究会論文彙編』、寧夏社会科学院		2006. 9	386-391	

著 者 名	論 文 標 題			
新保 敦子	「 寧夏プロジェクトの検証 - 自発的市民活動の可能性 - 」			
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ	
『国際シンポジウム＜グローバリゼーションの下での少数民族女性のエンパワーメント＞報告集』		2007. 1	85-94	

著 者 名	論 文 標 題			
新保 敦子	「 寧夏工程的検証 - 自発性市民活動的可能性 - 」			
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ	
『国際シンポジウム＜グローバリゼーションの下での少数民族女性のエンパワーメント＞報告集』		2007. 1	265-272	

著 者 名	論 文 標 題			
新保 敦子	「グローバリゼーションの下での中国ムスリム女性指導者—公教育及び宗教教育の比較検討—」			
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ	
『学術研究』（教育・生涯教育編）早稲田大学教育学部	55	2007. 2		

著 者 名	論 文 標 題			
新保 敦子	Educational support in the areas of ethnic minority —Ningxia project; Soong Ching Ling Foundation of Japan			
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ	
『国際シンポジウム＜グローバリゼーションの下での少数民族女性のエンパワーメント＞報告書』		2007. 1	183-192	

著 者 名	論 文 標 題			
中村 妙子	「イマード・アッディーン・ザンギーの対十字軍戦略とシリア南進策--シリアとジャジーラの統一的支配--」			
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ	
『東洋学報』	88-1	2006. 6	01-026	

著 者 名	論 文 標 題			
中村 妙子	「ヨハネス2世のシリア遠征とザンギーの南進策 --12世紀前半シリアの勢力構図の変--」			
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ	
『オリエント』	49-2	2007. 3		

著 者 名	論 文 標 題			
子島 進	“From Social Development to Religious Knowledge: Transformation of the Ismailis in Northern Pakistan”			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ペー ジ
In Dudoignon, A. et al (eds.). <i>Intellectuals in the Modern Islamic World</i> , Routledge,			2006	226-240

著 者 名	論 文 標 題			
橋爪 烈	「『時代の鏡』諸写本研究序説」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ペー ジ
『オリエント』		49-1	2006. 9	60-87

著 者 名	論 文 標 題			
橋爪 烈	(書評)「清水和裕著『軍事奴隷・官僚・民衆 - アッバース朝解体期のイラク社会』」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ペー ジ
『イスラム世界』		67	2006. 9	97-105

著 者 名	論 文 標 題			
橋爪 烈	「ブワイフ朝ジバール政権の対外政策 —サーマーン朝との関わりから—」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ペー ジ
『西南アジア研究』		65	2006. 9	21-40

著 者 名	論 文 標 題			
堀井 聡江	川島緑（解説）堀井聡江（邦訳）「『新しい黎明』 —1960 年代カイロのフィリピン・ムスリム留学生論文集 邦訳・解説（１）」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『上智アジア学』		24	2006. 12	185-205

著 者 名	論 文 標 題			
堀井 聡江	「エジプト民法典における先買権の立法目的」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『東洋史研究』		65-1	2006. 6	35-60

著 者 名	論 文 標 題			
前田 弘毅	「第二章 国境と民族—コーカサスの歴史から考える」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
岩下明裕編著『国境・誰がこの線を引いたのか - 日本とユーラシア』北海道大学出版会			2006. 6	31-56

著 者 名	論 文 標 題			
前田 弘毅	“The Forced Migrations and Reorganisations of the Regional Order in the Caucasus by Safavid Iran: Preconditions and Developments Described by Fazli Khuzani”			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
IEDA Osamu and UYAMA Tomohiko (Eds.) <i>Reconstruction and Interaction of Slavic Eurasia and Its Neighboring Worlds</i> , Sapporo: Slavic Research Center			2006	237-273

著 者 名	論 文 標 題		
前田 弘毅	「忘れられた歴史と二つの系図が交差するところ —アフガニスタンのグルジア人—」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
木村崇、鈴木董、篠野志郎、早坂眞理編 『カフカース—二つの文明が交差する境界の交差—』彩流社		2006. 11	57-80

著 者 名	論 文 標 題		
松本 ますみ	「現代中国伊斯蘭与基督教の和睦共处」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
楊懷中編『鄭和与文明対話』銀川：寧夏人民出版社		2006	259-254

著 者 名	論 文 標 題		
松本 ますみ	“Rationalizing Patriotism among Muslim Chinese”		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
In Stephane Dudoignon, Komatsu Hisao, Kosugi Yasushi eds. <i>Intellectuals in the Modern Islamic World: Transformation, Transmission, Communication</i> , London: Routledge Curzon		2006	117-142

著 者 名	論 文 標 題		
吉澤 誠一郎	「五四運動における暴力と秩序」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ペー ジ
『歴史評論』	681	2007. 1	16-29

著 者 名	論 文 標 題		
吉澤 誠一郎	「東洋史学の形成と中国―桑原隲蔵の場合」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
岸本美緒編『「帝国」日本の学知[3]東洋学の磁場』岩波書店		2006. 5	55-97

著 者 名	論 文 標 題		
吉澤 誠一郎	「南京国民政府と西北建設」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『現代中国研究』	19	2006. 10	8-28

著 者 名	論 文 標 題		
吉澤 誠一郎	“State and Instituted Ethnicity in Modern China,”		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
Fumiko Oshikawa (ed.), <i>Enduring States: Considering States in the Light of Nations and Ethnic Groups</i> , Kyoto: Center for Integrated Area Studies, Kyoto University		2007	24-44

〔図書〕計（６）件

著 者 名	出 版 社		
大澤 広嗣	大正大学大学院文学研究科博士学位修得論文		
書 名	発 行 年	ページ	
「昭和前期におけるアジア諸宗教の調査研究活動に関する分析的研究」	2007. 3 (未刊行)	全 351 頁	

著 者 名	出 版 社		
西村 淳一	九州大学大学院博士学位修得論文		
書 名		発 行 年	ページ
「イスラーム世界における地域概念の研究――モンゴル侵入以前――」		2006. 12 (未刊行)	

著 者 名	出 版 社		
前田 弘毅	スラブ研究センター（北海道大学）		
書 名		発 行 年	ページ
藤森信吉・前田弘毅・宇山智彦著『「民主化革命」とは何だったのか：グルジア、ウクライナ、クルグズスタン』21世紀COE研究報告集 No. 16		2006. 8	全 87 頁

著 者 名	出 版 社		
前田 弘毅	明石書店		
書 名		発 行 年	ページ
北川誠一・前田弘毅・廣瀬陽子・吉村貴之編 『コーカサスを知るための 60 章』		2006. 4	全 336 頁

著 者 名	出 版 社		
前田 弘毅	東京大学大学院人文社会系研究科博士学位取得論文		
書 名		発 行 年	ページ
「サファヴィー朝のゴラーム：フロンティア政策と政治体制の再構築」		2006. 9 (未刊行)	

総括班

【平成18年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

初年度の研究・教育活動を開始するにあたって、2つの研究グループ間で話し合いを行い、研究会の開催、海外調査、海外からの研究者招聘について基本方針を確認した。総括班の事業としては、3回の合同集会を開催し（特に第2回の合同集会は記念講演会として開催された）、各拠点の研究分担者・研究協力者が事業の進行状況・結果を把握することができるように努めた。また、若手研究者を海外調査に派遣すると同時に、海外から2人の研究者をそれぞれ1-2ヶ月招聘し、講演会・アラビア語文書講読会などの開催によって、同じく若手研究者の育成に少なからず寄与することができた。

（佐藤次高）

2. 研究活動の記録

(1)研究会活動

「イスラーム地域研究」の拠点形成をめざして - 第1回合同集会 -

日時：2006年7月21日（金）18：00～20：00

場所：早稲田大学大隈記念タワー15階 レストラン「西北の風」

概要：

NIHU プログラム・イスラーム地域研究の発足にあたり、「「イスラーム地域研究」の拠点形成をめざして」と題して、第一回の合同集会を実施した。当日は拠点代表者・研究分担者の他、人間文化研究機構の関係者、中心拠点の活動をバックアップする早稲田大学総合研究機構の関係者など、計49名の参加者があった。

石井米雄・人間文化研究機構長、平野健一郎・人間文化研究機構地域研究推進センター長、そして各拠点の代表者からあいさつと抱負が述べられ、これから始まる新たなイスラーム地域研究の旗揚げにふさわしい会となった。その後、食事をともにしながら、イスラーム地域研究の今後について参加者の間で活発な議論がなされた。

（佐藤健太郎）

NIHU プログラム・イスラーム地域研究記念講演会「イスラーム地域研究の新展開」

- 第2回合同集会 -

日時：2006年11月26日（日）15：00～17：00

場所：早稲田大学27号館小野記念講堂

講演者・講演題目：

・ アブドゥルカリーム・ラーフェク Abdul-Karim Rafeq 氏（ウィリアム&メアリ大学）

「シリア社会の中のムスリムとキリスト教徒 Muslims & Christians in Syrian Societies」

・ オマール・ファルーク Omar Farouk 氏（広島市立大学）

「日本におけるイスラーム地域研究：東南アジアからの視点 Islamic Area Studies in Japan: A view from Southeast Asia」

・ 河野洋平氏（衆議院議長）

「21 世紀のイスラーム世界と日本—イスラーム地域研究への期待」

概要：

NIHU プログラム・イスラーム地域研究の発足を記念して、アラブ世界と東南アジア世界を代表するお二人の研究者に加え、外務大臣時代からイスラーム研究に強い関心をよせてこられた政治家という3人の講演者を迎えて講演会をおこなった。講演会は一般にも公開され、約90人の聴衆を集めた。

ラーフェク氏は、シリアという地域を対象にして、イスラームとキリスト教とが決して相容れない存在というわけではないこと、それどころかシリア社会の中ではムスリムもキリスト教徒も（さらにはユダヤ教徒も）同じセム系のアラブとして捉えることができるということを、歴史に即して論じられた。中東にはムスリム以外の住民も数多くいるということは研究者にとっては常識ではあっても、一般の聴衆にとっては新鮮な驚きだったようである。また、イスラームと他の宗教との衝突がクローズアップされがちな今日において、ムスリムとキリスト教徒の共存の側面に光を当てるラーフェク氏のアプローチは、イスラーム地域研究にとってきわめて示唆的であった。

ファルーク氏には、マレーシア出身の国際政治学者として、長年にわたって日本で研究・教育にたずさわってこられた経験をもとに、日本におけるイスラーム地域研究について論じていただいた。氏は、日本におけるイスラームやイスラーム研究の歴史を批判的な視点もまじえて概観したうえで、現在の日本のイスラーム地域研究の試みを今までイスラームの辺境と見なされてきた東南アジアにも目を向けるものであり、また日本におけるイスラーム理解を深めるものであるとして、肯定的に評価した。一方、講演の最後で投げかけられた「最終的に誰が、日本におけるイスラーム地域研究の受益者となるのか」という問いは、イスラーム地域研究に限らず地域研究一般にたずさわるものにとってきわめて重いものであり、今後我々は常にこの問いを反芻しながら研究を進めていくべきであろう。

河野洋平氏は、外務大臣時代に日本の代表的なイスラーム研究者とともに外務省において研究会を組織するなど、日本の中では特にイスラームに対する関心の深い政治家である。河野氏には、政治家としての長年のキャリアの中で経験したイスラームとのかかわりについて、豊富なエピソードとともに語っていただいた。また、我々の研究活動について、存分に学術研究をしたうえで学界の外に向けてもその成果を発信してもらいたい旨の期待も語られた。この点については、前述のファ

ルーク氏の問いを常に念頭におきつつ、我々の研究成果をどのような形で日本の社会に還元すべきなのかも考えていかなければならないだろう。

（佐藤健太郎）

アラビア語文書史料講読演習

日時：2006 年 11 月 7 日（火）15：00～17：00

2006 年 11 月 14 日（火）15：00～17：00

2006 年 11 月 24 日（火）15：00～17：00

2006 年 11 月 28 日（火）15：00～17：00

場所：早稲田大学 41-31 号館 202（11/7, 11/14, 11/28）東洋文庫 3 階会議室（11/24）

講演者：

アブドゥルカリーム・ラーフェク Abdul-Karim Rafeq 氏（ウィリアム&メアリ大学）

概要：

11 月 1 日～12 月 2 日の日程で招聘したアブドゥルカリーム・ラーフェク教授にお願いして、4 回にわたってアラビア語文書史料講読演習をしていただいた。ラーフェク教授はイスラーム法廷文書を用いた研究のパイオニア的な方で、今回、大学院生を含めた若手研究者にイスラーム法廷文書読解の手ほどきをしていただき、次世代研究者の育成をはかった。

第 1 回の演習はメッカへの巡礼団にかかわる法廷文書がテキストとなった。巡礼団の組織に際してアラブ遊牧民たちと護衛や荷物運搬について結ばれた契約をめぐるもので、ここから、メッカ巡礼が単に宗教儀礼にとどまらず政治・経済にもかかわること、そして 19 世紀以降の世界規模での物流の変化も見通せることなどが示された。

第 2 回の演習では、ワクフ物件の長期貸借をめぐる文書がテキストであった。本来公共の利益のために用いられるはずのワクフ財産が、一部の軍人・官僚たちの手に集積されていく様子が史料を通して解説された。

第 3 回の演習でもワクフ物件の貸借をめぐる文書がテキストとして使われたが、ここでは外国人が契約当事者として登場する。19 世紀のヨーロッパ列強の影響力拡大を読み取ることができる史料である。

第 4 回の演習では、オスマン朝期シリアにおける非ムスリム（キリスト教徒・ユダヤ教徒）に関する文書がテキストとなった。同業者組合（いわゆるギルド）においては、非ムスリムもムスリムと同様にメンバーシップを持っていたことが分かる史料で、ラーフェク教授はイスラーム支配下での多宗教の共存を強調された。

演習の中では、テクニカルな読解法（術語、様式など）だけでなく、一片の文書が大きな歴史的文脈の中で読み解かれていく過程が示され、若手研究者にとっては非常に有意義なものであった。

法廷文書はおろか手書きのアラビア語に本格的に取り組むのも初めてという参加者も多く、かなり難易度の高い演習となったが、それだけに参加者たちにとっては得るところの多い機会になったと思われる。

また、演習に参加した大学院生 4 名には、参加記執筆を依頼し、演習の様子や演習で得た知見について記してもらった。この参加記は、イスラーム地域研究 Web ページ上で公開している。

(佐藤健太郎)

NIHU プログラム・イスラーム地域研究 2006 年度第 3 回合同集会

日時：2007 年 3 月 27 日（火）13：00～17：00

場所：早稲田大学西早稲田キャンパス 14 号館 401

概要：

2006 年度のイスラーム地域研究事業の総まとめとして、第 3 回合同集会を開催した。各拠点の研究分担者・研究協力者など計 67 名が参加した。

第一部の事業報告では、佐藤次高研究代表を含め、各拠点の拠点代表者および研究グループのグループリーダー、計 10 名から、それぞれ 2006 年度の活動と、2007 年度の展望についての報告がなされた。これにより、普段は各拠点に分かれて活動している分担者・協力者も、イスラーム地域研究事業全体の進捗状況を確認することができた。

第二部は、「アラブ音楽を語る・聴く」と題して、中町信孝氏（日本学術振興会特別研究員）がエジプト・ポップスを中心としたアラブ音楽を題材に語った。豊富な音源・ビデオクリップにより、ここ 10 年ほどのアラブ世界の流行歌が紹介されたが、その中には、アラブ民族主義、エジプト・ナショナリズム、イスラーム意識の高揚などとも関連づけられるメッセージソングがあることが示された。大衆文化を通したイスラーム地域研究という新たな研究の可能性を感じさせる、非常に刺激的な報告であった。

なお、当日、再生された曲目リストは、以下の通りである。

1. Umm Kulthūm, *Al-Ward Jamīl*, 1947. (From movie *Fāṭimah*)
2. Umm Kulthūm, *Ha-uqābil-hu Bukrah*, 1947. (From movie *Fāṭimah*)
3. Nānsī ‘Ajram, *Yā Walad Yā Thaqīl*, 2004. (From movie *Khalli Bāla-ka min Zūzū*, 1972)
4. Shīrīn ‘Abd al-Wahhāb, *Mā fī-sh Marrah*, 2005.
5. ‘Amr Diyāb, *Al-Quds dī Arḍ-nā*, 2000.
6. Various Artists, *Al-Quds Ha-tarji ‘la-nā*, 2000.
7. Various Artists, *Waṭanī al-Akbar*, 1960?
8. Various Artists, *Al-Ḥulm al-‘Arabī*, 1998.
9. Sha‘bān ‘Abd al-Raḥīm, *Al-Ḍarb fī al-‘Irāq*, 2003.

10. Kāzīm al-Sāhir et al., *Baghdād Lā Tata'allamī*, 2003.
11. Kāzīm al-Sāhir, *Aḥibbī-nī*, 2004.
12. Nānsī 'Ajram, *Anā Miṣrī*, 2005.
13. Shīrīn 'Abd al-Wahhāb & Muḥammad Nūr, *Baladī*, 2005.
14. Various Artists, *Aḥsan Nās*, 2006. (From TV commercial *Mobinil*)
15. Sāmī Yūsuf, *Mu'allim*, 2004.
16. WAMA, *Kān Nafsī*, 2005.
17. Ḥusayn al-Jasamī, *Yā Ṣughr al-Farah fī Qalbī*, 2004.
18. Sha'bān 'Abd al-Raḥīm, *Ithnān 'Asākir*, 2006.
19. Shīrīn 'Abd al-Wahhāb, *Lubnān fī Qalbī*, 2006.
20. Nānsī 'Ajram, *Lubnān, Ḥabīb al-'Umr*, 2006.

(佐藤健太郎)

(2)海外派遣・調査

Tunisia-Japan Symposium on Science, Society & Technology 参加およびフランスにおける
イスラーム地域研究の現況調査

期間：2006年12月2日～12月10日

国名：チュニジア、フランス

参加者：佐藤次高（早稲田大学／人間文化研究機構）

佐藤健太郎（人間文化研究機構／早稲田大学）

概要：

今回の出張の目的は、日本とチュニジアとの学術交流をはかる Tunisia-Japan Symposium on Science, Society & Technology (TJASSST2006) に参加して日本におけるイスラーム地域研究の現状についてチュニジアの研究者と交流をおこなうこと、およびパリにあるアラブ世界研究所 (Institut du Monde Arabe) を訪問することであった。

TJASSST は、2000 年から毎年おこなわれている学術会議でチュニジア・日本双方の研究者が集まって、互いの研究成果を披瀝し、情報交換をおこなう場である。日本側では、筑波大学北アフリカ研究センターが主要な窓口となっている。今回の我々の参加も同センターからの申し出を受けてのものだが、始まったばかりのイスラーム地域研究について広く知ってもらいたい機会であると考え出席することにした。TJASSST は 2000 年の発足当初は非常に小規模なものだったとのことだが、7 年目の今年は報告者だけで 300 人を超えるという一大イベントになっていた。その一方でセッションのほとんどは自然科学系のもので、我々が参加した人文社会科学系のセッションはいささかさびしいものだったことは否めない。

我々は、12 月 2 日深夜にチュニスに到着した後、翌 3 日に TJASSST2006 の会場があるチュニジア

中部の港町スースへと移動した。人文社会科学系のセッションは、12月4～5日の日程でスース大学人文学部においておこなわれた。第一日（12/4）には、佐藤次高が *An Invitation to New Islamic Area Studies* と題して、前回のイスラーム地域研究（1997～2002年）の内容や成果をふまえたうえで、今回のNIHUプログラム・イスラーム地域研究の概要やそのめざすところについて講演をおこなった。会場では、1ヶ月前に完成したばかりのイスラーム地域研究のリーフレットも配布し、かなりの程度、我々のプロジェクトについて知ってもらうことができたのではないかと考えている。第二日（12/5）には、佐藤健太郎が *An introduction of the Prophet Muhammad's Nativity (al-Mawlid al-Nabawi) to the Hafsid Tunisia: From the viewpoint of diplomatic relationship with the Marinids in the 14th century* と題して、14世紀チュニジアにおける預言者生誕祭の導入を当時の国際関係と関連づけながら論じた。比較的研究者の層の薄い日本のマグリブ研究だが、その一端を現地の研究者にも知ってもらうことができたのは、さいわいであった。

二日間の会議を通してもっとも感じたのは、人文社会科学系のセッションと自然科学系のセッションのにぎわいの差だった。もちろん、人文社会科学系のセッションもそれ自体としては密度の高い議論ができ有益なものだったのは言うまでもないが、両者の参加者の差は、日本との学术交流に対して大多数のチュニジア人が何を期待しているのかを如実に物語っているように思えた。他者と当事者双方の目を通した研究というのが、今回のイスラーム地域研究の一つの柱だが、他者（日本人）の視点が当事者にとってどのようなアピールをすることができるのか、よりつきつめて考えてみる必要はあるだろう。

会議期間中にはTJASSST関係者のみなさん、特に日本側のコーディネートの労をとってくださった筑波大学北アフリカ研究センターの方々には、大変お世話になった。この場を借りて、お礼を申し上げたい。

会議終了後の6日にはスースから一旦チュニスに戻り、翌7日の飛行機でパリへと向かった。パリでは12月8日にアラブ世界研究所を訪問した。ここは1987年に開設された施設で、アラブ世界に関する非常に充実した博物館と図書館を有している。研究所では広報担当のナイーミー S. al-Neimi 氏が応対してくれた。我々の方からはイスラーム地域研究についての紹介をし、彼女の方からはアラブ世界研究所の活動内容とその意義について語ってもらった。ナイーミー氏によれば、アラブ世界研究所は研究所（institute）と名乗っているために誤解されることが多いが、常勤の研究者がいるわけではなく、むしろアラブ世界について広く知ってもらうための一種の文化センターとして機能しているとのことであった。博物館と図書館を広く一般に公開しているほか、折に触れて企画展を催したり（我々が訪問したときには「ヴェネツィアと東洋展 *Venise et l'Orient*」が開催中であった）、アラビア語講座を実施したりしているという。2005年秋の騒動のようにアラブ系移民の問題が何かとクローズアップされるフランス社会だが、そうした中でこのような文化施設がアラブ人理解に果たす役割はきわめて大きいと感じた。また、研究所の *ra'is / president*（職名はどう訳せばいいのか迷

ったので原語のまま記す) がフランス人であるのに対して、mudir / directeur にはアラブ人が配されているなど、フランス人とアラブ人双方が運営に関わる体制になっていることも感銘を受けた(我々の対応をしてくれたナイーミー氏自身もシリア出身だという)。

アラブ世界研究所訪問後、近くのパリ・モスクまで周辺を散策してみた。周囲にはアラビア語書籍の書店やアラブ料理のレストランなどが立ち並び、独特の雰囲気醸し出していた。貧しい移民地区というよりは、少しお高くとまった文化地区という感じではあったが、ヨーロッパとアラブ世界とのつながりの深さを再認識させられた。

(佐藤健太郎)

フランス国立図書館およびロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部等におけるアラブ写本絵画の調査

期間：2007年1月24日～2月23日

国名：エジプト、フランス、ロシア

参加者：木村伸子(早稲田大学文学研究科・博士後期課程)

概要：

今回の出張の目的は、カイロ、パリ、サンクトペテルブルグの各研究所に所蔵されている、マムルーク朝期の軍事指南書(「フルースィーヤの書」の一種)である Kitab al-Makhzun fi Jami al-Funun の写本挿絵を実見することであった。

Kitab al-Makhzun はマムルーク朝後期に多くの挿絵入り写本が制作されており、それらに描かれたマムルークの図像は当時のマムルークの服飾を研究する上で欠かせない史料となっている。十数点現存している Kitab al-Makhzun の挿絵入り写本のうち最も重要なものは、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部が所蔵している 1479 年に制作された写本(写本番号 C686)であり、ついでカイロのイスラム芸術博物館およびイギリスの個人コレクションにそれぞれ分割されて所蔵されている写本(通称カイロ・ロンドン写本) およびフランス国立図書館の所蔵となっている写本(写本番号 arabe 2826)が、いずれも当時のマムルークの風俗を明らかにする上で貴重な情報を含んでいる。社会史の観点から絵画を史料として扱う際には、使用されている色や描写方法などの情報も重要となってくるため、今回の調査では前述の各写本作品の現物に当たることを目的とした。

最初に訪問したカイロでは、Kitab al-Makhzun の写本(部分)を所蔵しているイスラム芸術博物館自体が約三年前から改修工事のために閉鎖されたまま再開の見通しがたっておらず、写本の実物に触れることは叶わなかった。次の訪問地であるパリでは、リシリュール通りのフランス国立図書館(旧館)を訪れた。訪問第一日目には、目的の史料(arabe 2826)はマイクロフィルムでの閲覧しか許されなかったが、翌日は写本の現物に触れることを許可された。この写本は、人物描写などにおいて

全体にトルコ絵画の影響が大きいように思われたが、描かれている衣服（特に帽子）はマムルーク朝時代のものをそのまま踏襲しており、これが当時の実際の風俗を反映したもののか否かは今後の研究の課題となりそうである。最後の訪問地であるサンクトペテルブルグでは、ネヴァ川沿いの Dvortsovaya 通り、エルミタージュ美術館の並びに建つ、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部を訪れた。この研究所で閲覧させていただいた写本（C686）の芸術的・史料価値の高さにはあらためて驚かされた。80 枚以上に及ぶ挿絵には、一部剥落があるものの、全体的な保存状態は非常に良好で、特に色彩の鮮やかさには目を奪われた。ペルシア絵画の濃密なミニアチュールと比較すると、この写本挿絵に代表されるようなマムルーク朝期のアラブ絵画は背景も少なく簡素な表現といえるが、簡潔な線で描かれた人物や馬の描写の確かさ、潔い空間表現など、ペルシアやトルコの絵画には見られない伸びやかさが感じられた。また、服飾史・社会史的観点から見ても、マムルークの衣服や人種、階級の表現など、多くの情報を含んだ興味深い史料であることを再認識した。

サンクトペテルブルグは観光地ということもあり、ロシア内でも非常に治安の悪い都市と聞いていたのであるが、今回の調査は幸い犯罪被害に会うことはなかった。しかし、滞在中の 2 月 18 日の夜に、ネフスキー通りのマクドナルドの店舗で外国人観光客を狙ったとみられる爆弾テロ事件が発生したこともあって、夜間の外出時などは緊張感のある滞在でもあった。

（木村伸子）

カイロにおける「イスラーム地域研究」への協力・共同研究の要請

期間：2007 年 3 月 3 日～3 月 12 日

国名：エジプト

参加者：佐藤次高（早稲田大学／人間文化研究機構）

概要：

3 月 3 日～12 日の期間、カイロに出張して「イスラーム地域研究」への協力者を探すとともに、何人かと具体的に相談することを試みた。まず日本学術振興会カイロセンターを訪ね、坂井定雄センター長から社会学、都市計画などを専門とする数名のエジプト人研究者を推薦していただいた。カイロ大学日本語学科のハムザ・イサーム助教授からも数名の候補者を推薦していただき、今後関係者の推薦に協力を約束していただいた。また、フランス考古学研究所でカイロ大学教授のムハンマド・アフイーフィー氏と会い、2007 年度中に来日して、1 ヶ月程度共同研究を実施することが可能であるとの回答をえた。氏は 16 世紀以降のコプト教徒問題の専門家でもあるので、「ムスリムと異教徒」の問題を扱うグループとは意義のある共同研究を行うことができるであろう。

（佐藤次高）

(3)外国人研究者の招聘

アブドゥルカリーム・ラーフェク氏招聘

所属：ウィリアム&メアリ大学（アメリカ合衆国）

期間：11月1日～12月2日

活動：

アブドゥルカリーム・ラーフェク教授は、オスマン朝期シリアに関する世界的な研究者であり、とりわけ法廷文書を用いた研究で新分野を切り開いたことで知られる。また、ダマスクス大学文学部副学部長などの要職を歴任した後、現在はアメリカ合衆国の伝統校ウィリアム&メアリ大学で教鞭をとっており、国際的な学界事情にも通じた方である。

今回、ラーフェク教授を招いたのは、新たなイスラーム地域研究のプログラムを立ち上げるに当たって、豊かな経験と知見を持つラーフェク教授からさまざまな助言をいただきたいと考えたからである。また同時に、ラーフェク教授の専門分野であるアラビア語文書史料の読解法について大学院生ら若手研究者に講じてもらい、日本の次世代研究者の育成もはかりたいと考えた。

日本滞在中には、アラビア語文書史料講読演習（11月7日、14日、24日、28日）京都での講演会（11月21日）NIHU プログラム・イスラーム地域研究記念講演会（11月26日）を開催した。詳細については、それぞれの研究会活動の項を参照されたい。

（佐藤健太郎）

アフマド・サアディー氏招聘

所属：ベン・グリオン大学（イスラエル）

期間：1月21日～3月8日

活動：

アフマド・サアディー氏は、イスラエル国籍を持つパレスティナ人社会学者で、パレスティナ問題について多くの論考を発表している気鋭の研究者である。

今回、東京大学拠点グループ2「中東政治の構造変容」と連携してサアディー氏を招聘したのは、イスラーム地域研究を進めるにあたって避けて通ることはできないパレスティナ問題の研究を促進するためであり、当事者の発言に耳を傾けたいと考えたからである。

日本滞在中には、サアディー氏は早稲田大学イスラーム地域研究所にて研究活動に従事し、貴重な助言を多くしていただいた。また、東京大学拠点グループ2「中東政治の構造変容」の主催で、「シオニズム政治とパレスチナ政治」と題する連続セミナーが5回にわたって開催された。連続セミナーの詳細については、東京大学拠点の活動の項を参照されたい。

（佐藤健太郎）

研究グループ1：「イスラームの知と権威：動態的研究」

【組織】

（研究グループ1メンバー）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 （担当研究テーマ）
湯川 武	慶應義塾大学商学部教授、 早稲田大学客員教授	研究グループ1代表者 （ムスリム知識人問題）
佐藤健太郎	人間文化研究機構地域研究推進センター研究員、 早稲田大学客員講師	研究分担者 （マグリブ・アンダルス地域）
清水 和裕	神戸大学文学部助教授	研究分担者 （中世アラブ史）
栗田 禎子	千葉大学文学部教授	研究分担者 （アラブ近現代史）
P.S. Humphreys	Professor, University of California Santa Barbara	研究分担者 （イスラーム史）

（研究グループ1研究協力者）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	担当研究テーマ
青山 弘之	アジア経済研究所	現代シリア・レバノン政治
赤坂 恒明	早稲田大学非常勤講師	モンゴル帝国史
阿久津正幸	昭和薬科大学非常勤講師	マドラサ研究
飯山 陽	東京女子大学非常勤講師	イスラーム思想史
大川 玲子	明治学院大学国際学部専任講師	イスラーム学、クルアーン （コーラン）研究
勝沼 聡	東京大学大学院総合文化研究科博士課程	近代エジプト社会史

菊池 達也	神田外国語大学外国語学部専任講師	シーア派思想史
黒田 祐我	早稲田大学大学院文学研究科博士課程	スペイン中世史
高野 太輔	大東文化大学国際関係学部常勤講師	初期イスラーム史
後藤 絵美	東京大学大学院総合文化研究科博士課程	地域研究、イスラーム文化研究
小林 春夫	東京学芸大学人文社会科学系教授	イスラーム思想史
近藤 真美	龍谷大学文学部専任講師	中世シリア史
酒井 啓子	東京外国語大学地域文化研究科教授	イラク近現代政治
杉山 雅樹	京都大学大学院文学研究科博士課程	イラン史 14～16世紀
谷口 淳一	京都女子大学文学部助教授	中世シリア史
千代崎未央	千葉大学大学院文学研究科博士課程	中東近現代史
中村 妙子	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 博士課程	中世シリア史
西村 淳一	九州大学文学部非常勤講師	モンゴル侵入前のイスラーム世界 の歴史地理
橋爪 烈	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程	アッバース朝研究
原山 隆広	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程	アッバース朝研究
堀井 聡江	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化 研究所非常勤研究員	イスラーム法、エジプト民法
前田 弘毅	北海道大学スラブ研究センター講師	コーカサス地域研究、 イラン・グルジア史

森山 央朗	日本学術振興会特別研究員	歴史(10～12世紀マシュリク地域におけるハディース学者の社会的・文化的活動)
横内 吾郎	京都大学大学院文学研究科博士課程	ウマイヤ朝史
渡部 良子	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤研究員	前近代イラン・イスラーム史、ペルシア語書記術

【平成18年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

2006年度は、研究計画に沿って共同研究を展開するための具体的な研究内容の検討と策定、およびその内容にふさわしい研究協力者の選定などの組織作りに多くの時間を費やした。研究会活動については研究分担者の打合会を数次にわたって開き、それぞれの具体的なテーマを検討するとともに、グループ全体の研究方針を次のように決定した。本グループは三つのテーマを掲げ、それぞれの研究に参加する研究者の専門とするディシプリンや、取り扱う地域や時代も異なるが、そのような個々の専門上の差異を超えて、イスラーム社会の「知」のあり方という巨視的な視点で見ることにした。

そのような検討に基づいて、研究協力者の選定と依頼を行い、本グループとしては、しばらくの期間、別表のような研究者とともに共同研究を進めていくことになった。

また、研究会活動としては、グループの全体研究会を開催(2006年1月28日)したが(研究会報告は別添)、研究発表のテーマと内容においても、またその後の意見交換においても、今後の研究の発展の可能性と方向性が示された。

海外調査活動は、本グループのテーマに合致する研究テーマを持つ5名の若手研究者を選び、現地における調査・資料収集を依頼した(調査報告は別添)。その成果は2007年度以降の本グループの研究会において発表されることになっている。

読書会活動は今年度は一つだけ開催したが、大学院生・若手研究者の育成のみならず、それそのものが共同研究として意義があるので、今後はさらにこの種の活動も広げていくことにした。

(湯川武)

2. 研究活動の記録

(1) 研究会活動

早稲田拠点グループ1 研究会「イスラームの知と権威：動態的研究」

日時：2007 年 1 月 28 日（日） 13:30-17:00

場所：早稲田大学 41-31 号館 2 階 202 会議室

発表者：中町信孝（日本学術振興会特別研究員）

発表題目：「中世アラブにおける歴史叙述行為と社会的実践——アイニーの経歴から——」

概要：

「ムスリムの知識人は、歴史をどう見て、それをどのように、何のために書いたのか？」

本発表は、グループリーダー湯川武氏によって投げかけられたこのような問いかけに、応答する形で始められた。発表者はこの問いに対し、思想史的観点からではなく、社会史的観点から答えようとした。すなわち、歴史書の執筆をはじめ、他の歴史書の参照、君主への献呈、聴衆の前での読みあげ、写本の作成・流布といった一連の「歴史叙述行為」を、歴史家による「社会的実践」としてとらえることで、彼らが歴史を書く（語る）ことの効用を考察したのである。

具体例として取り上げるのは、マムルーク朝後期の歴史家アイニー（1360-1451）である。アイニーは大年代記『真珠の首飾り』をはじめとする数多くの歴史書の著者であると同時に、ハナフィー派大カーディーや市場監督官（ムフタスィブ）、ワクフ監督官などの国家の要職を歴任した高位のウラマーのひとりでもあった。彼の社会的達成、権力の獲得には、君主の御前での歴史書の読み上げと解説、および君主への伝記の献呈などの歴史叙述行為が大きく関わっていたと考えられる。このことは、彼の著書中に見られる自伝的な記述から得られる、彼の学問的・政治的キャリアの詳細な情報によって裏付けられる。

その一方で、アイニーは史書執筆の際に先行する歴史書を頻繁に参照・引用し、また彼の著した諸年代記は同時代・後代の歴史家たちにより参照・引用されていた。彼が『真珠』の前書きにおいて、その執筆意図を「配列においてそれ（旧著である小年代記『満月の歴史』）よりも美しく、構成においてより明白にすべく」と語っている点からは、彼が歴史書執筆を純粋な学問的営為ととらえていた側面もうかがえる。そして彼を中心としてマクリーズィー、イブン・ハジャールなど、同時代の歴史家たちの間には、互いの著作を参照・引用しあう「エジプト学派」とも呼びうるサークルが形成されていたのである。

ところで、アイニー著書中の自伝的記述の精査から、付随的に、彼の弟であり共同執筆者でもあったアフマドという人物の経歴が浮かび上がる。アフマドは兄アイニーとほぼ同様な文化的環境に育ちながら、その後の学問的・政治的キャリアにおいてはアイニーとは異なり、ほとんど無名のウラマーのひとりに留まった。しかし、彼が兄アイニーの小年代記『満月』の書写・改訂に関わり、それを要約して自らの年代記『流星の歴史』を執筆したこと、また近隣の者を集めて預言者伝や征

服譚を「説教」したことは、高名な歴史家であるアイニーと表裏をなす、無名歴史家の歴史叙述行為として位置づけられよう。

これらの分析で明らかになったアイニーおよび弟アフマドの経歴は、歴史家が自らの有する文化資本を歴史叙述行為を通じて政治権力に転換するという、顕著な実例を提示しているが、いくつかの点で研究上の大きな課題をも示している。ひとつには、アイニーにとっての「歴史学」の師の存在が、その学問的キャリアの精査によっても明らかにならない点である。このことは、「伝承的学」と「自然的学」の区分が存在するイスラーム世界の学問において、歴史学がどのような地位を占めていたかという思想史的問題に直結している。もう一点は、『真珠』という著作がその執筆意図にもかかわらず、著者と同時代にはほとんど他者に参照された形跡が無く、写本としても流布していないという点である。ここには当時の歴史叙述における政治性と学問的意図とのせめぎ合いが見て取れよう。

本発表では、知の担い手である歴史家と社会的権威との関わりを、アイニーおよびその弟による歴史叙述というミクロな事例から考察した。今後の本グループの活動において扱われるであろう「知と権威」にかんするさまざまな事例と比較することで、本発表のテーマにもより深い分析が可能となると考えている。

(中町信孝)

(2)海外派遣・調査

モロッコにおける古文書調査

期間：2007年2月18日～3月10日

国名：モロッコ

参加者：飯山陽（東京女子大学・非常勤講師）

概要：

当該調査の主たる目的は、モロッコに複数存在する文書館のうち二箇所を訪れ、古文書所蔵及び利用の現状を確認すること、並びに調査者が必要とする文書を入手することにあった。以下、順を追って概要を報告する。

(1)モロッコ国立図書館

ラバトに存在する同館の一環である古文書部門は、モロッコで最大の古文書所蔵数を誇り、同館所蔵の文書の原本の他、別の文書館に帰属する文書のマイクロフィルムを閲覧することもできる。閲覧室には様々な文書館のカタログも存在するが網羅的ではなく、モロッコ国内の文書ですら悉皆調査ができない状況は以前と変わっていない。特にモロッコではここ10年ほど新しいカタログの出版が相次いでいるにも関わらず、それらが備えられていない点は不便である。同館の所蔵文書に関するカタログも不完全かつ見難いもので、特定の文書の整理番号を確定し閲覧を申請するにはカー

ドを一枚ずつめくって確認する必要がある。

マイクロフィルムリーダーも旧式かつ数が少なく、フィルムを書き写す紙を置くスペースが併設されているものは3台しかない。概して同館の状況は、調査者が初めて訪れた1997年当時から殆ど変わっていない。

文書の複写に関しては、同館所蔵の文書であればフィルムでの複製も紙ベースでの複写も依頼することができる。ただしそれ以外のマイクロフィルムに関しては、閲覧は許可されるが複製は認められていないため書写する必要がある。今回調査者は、2つの法学文書のフィルムでの複製を依頼した他、1つのフィルムの必要箇所を書写してきた。

尚ラバトでは今年7月に新しい国立図書館がオープンすることになっているらしい。施設や設備は同館のものより大幅に改善されることになるそうで、今から楽しみである。

(2) ハムザウィーヤ文書館

既述のように近年モロッコでは新たな文書カタログの出版が続いており、中でも2001年に出版されたワクフ文書館のカタログは調査者の興味を大いにひきつけた。同カタログに掲載されていた文書のうち、調査者の研究にとって非常に有益と思われるものを所蔵しているのがハムザウィーヤ文書館である。

同館はモロッコの南東部オート・アトラス山脈中の村ザーウィヤ・シディ・ハムザに存在する、という情報のみを手がかりに当地に赴いた。岩山と土漠に囲まれた盆地に位置する小さな農村で、電気・ガス・上下水道いずれもなく、電話もなければ携帯電話の電波も入らないという状況に加え、人々が日常話しているのはベルベル語、という調査者にとっての悪条件が重なったが、訪れた成果は大きかった。

同村の起源は、同村で聖者とされるアブー・サーリム・アルアイヤーシーが当地に集落を作って定住した西暦18世紀初頭前後までさかのぼる。同者の父と叔父が所有する写本を息子たちへのワクフとして寄進したのを契機に写本の集積が開始され、現在1201巻の写本が所蔵されている。現状で130人程度いる村の住民の殆どが同者の子孫であり、代々本家の長男が文書の管理人を務めている。現在の管理人スレイマーンは同者を初代とすると9代目にあたる。

日干しレンガで造られたカスル内に位置する書庫に存する1201巻の写本の多くがマーリク派法学に関するものであるが、他法学派の法学書その他、クルアーン・タフスィール・ハディース・神学・哲学・医学・歴史・言語学・文学などの文書も含まれている。

調査者は当初より目的としていた文書に無事めぐり合うことができ、必要箇所を書写した上デジタルカメラでの撮影も許可してもらった。管理人一家は突然訪れた見知らぬ外国人である調査者を自宅に泊めて下さっただけでなく、聖者廟やカスルや畑など村を隅々まで案内して下さった。この場をかりて厚謝したい。村の人々にも家に招待していただいて何度もお茶や食事をごちそうになり、普段縁のないベルベル農村の日常生活を満喫することができた。

調査概要は以上である。調査者のモロッコ滞在中、隣国アルジェリアでは3月4日に二箇所爆弾テロがおこり翌日「イスラム・マグリブの地のアルカイダ機構」を名乗る組織が犯行声明を出した。同組織の成員にはアルジェリアの他、モロッコやモーリタニア、チュニジア国籍の人間も含まれ、モロッコではそれらの人物の捜索協力が国民に向けて呼びかけられていた。他方モロッコでは2月28日に国王ムハンマド六世の長女ハディージャが誕生し、一週間以上にわたり国をあげてのお祭り騒ぎが続くという状況もあり、テロに対する危機意識の高まりは一般レベルでは殆ど感じられなかった。モロッコがテロ事件の頻発する国にならないことを、今さらながら祈らずにはいられない。

(飯山陽)

アサド図書館(シリア・ダマスカス)とアラブ写本研究所(エジプト・カイロ)における、
イスラーム諸学の写本を対象とした、ウラマーの学術活動の実態調査

期間：2007年2月19日～3月10日

国名：シリア、エジプト

参加者：阿久津正幸(昭和薬科大学・非常勤講師)

概要：

イスラームの宗教諸学の写本がもつ、学術活動の実態を示す「文書側面」に注目し、ウラマー(宗教諸学にかかわる学者)がどのような学術・教育活動を行ってきたのか、分析の継続を試みた。調査を継続することで、ウラマー自らが語る理想論のみに依存せず、社会や政治的環境に左右される学者集団としての実態を把握し、その理想論を、たとえば過去のある時点における社会の現状とともに分析していくためである。

ダマスカス(2月20日～25日)のアサド図書館では、設備修復のために写本部門が全面閉鎖され、調査できなかった。同図書館にはウェブサイトがあるが、そうした注意は喚起されていない。結果論だが、フランス・アラブ学研究所等で事前に問い合わせおくべきだった。再開予定の時期は、関係者からも明確な回答を得ることはできず、調査を予定している者は事前の確認が必要である。やむを得ず、フランス・アラブ学研究所で、研究書などの関連二次史料の調査と閲覧を行うにとどまった。

カイロ(2月25日～3月9日)では、アラブ写本研究所に収蔵されている写本の目録を利用して、「いつ、どこで、誰(どの師弟間)が、どのようなイスラーム諸学を学んだのか」、コーラン学、法学、アダブに絞って、文書的情報の有無を調査し、多くの有益な情報をマイクロ化された写本で確認することができた。

それらの情報によると、師弟間のつながりという学問伝達上(あるいは教育上)無視することのできない重要な慣行(イスナード)を、ある特定の科目(分野)などに偏ることなく確認することができた。時間的制限のために調査対象を限定したが、その他の科目(注目されていない文法学的な

ど)も対象とすることの有益さが十分に確認できた。

また、ときに文学と訳されてしまうアダブのなかには、言語や民衆文化、政治にかかわる情報なども含まれる写本(あるいは写本中に含まれる断片的情報)があり、さまざまな研究テーマに利用できる可能性があることも確認できた。さらに、同様の調査が行えるかどうか、ダール・アルクトゥブ(国立図書館)の写本室でも確認をしたところ(写本研究所が休日となる金土のうちの土曜日を利用)、サウジアラビアやモロッコなど地域に限定されず、アラブ世界各地の写本目録にも、今後調査対象とすべき必要情報が含まれていることを確認した。

蛇足になるが、カイロの写本研究所では、サウジアラビアからやってきたウラマーに声を掛けられた。見慣れぬ東洋人がイスラーム諸学のマイクロを閲覧していたために、関心を持ったのだろう。その際、次の質問をしてみた。「イスラーム諸学を志す学生にとって、一番大切なことはイスナードだと思うのですが?」。これに対して、「書物を使った勉学は、先生に教えを受けてから(これが本来のイスナード)、あるいは平行して行うべきものである」との説明が続いた。「あるハディースの著作は、伝承の本文と経路(従来強調されてきた狭義のイスナード)から構成され...」と、このウラマーの説明を否定すべきだろうか、イスラーム諸学を修めてきた当事者に対して?

イスラーム諸学について、ハディース学や法学、哲学など、個別のジャンルの特性は何かが追求されてきた。ウラマー研究も、政治的に重要なポストを占めた、いわば官僚的存在が研究対象として分析されてきた。知識人あるいは学識階層として、政治や社会に対して理想的価値観を与えるとともに、彼ら自身もそれら外的要因に影響を受け、その結果理想論にどのような変化がみられるのか。そうした変化を受け入れる過程で、重視されてきた伝統的との整合性を、彼ら自身どう意識していたのか、今後踏み込んで検討していきたい。

(阿久津正幸)

エジプト・カイロにおける中東・イスラーム近代史研究に関する史料調査

期間: 2007年2月19日(月)~3月17日(土)

国名: エジプト・アラブ共和国

参加者: 勝沼聡(東京大学大学院総合文化研究科・博士後期課程)

概要:

今回の出張の目的は、エジプトに関する史資料を所蔵している主要な施設であるカイロの国立図書館 Dār al-Wathā'iq および国立図書館 Dār al-Kutub において史料調査、具体的には19世紀後半以降の近代法体系への移行期におけるエジプトの監獄制度に関する史料の調査を行なうことであった。

国立文書館の利用に際してはパスポートに加え、同館より発行された利用証の提示が不可欠だが(国立図書館はパスポートの提示のみで入館が可能)、発行時期の古い利用証に対しては再発行の手続きが求められるとの情報を出発前に得ていた。申請してから許可が下りるまで早くとも一ヶ月ほ

どかかるため、もし再発行を求められた場合は滞在期間中に利用許可を得ることはほぼ不可能に近く、はたして利用できるか懸念されたが、結果として無事に利用することができた。

文書館の開館時間は以前と一部変わっており、閉館日は金曜日のままだが、二年ほど前は木曜日であった半日開館の日が土曜日に変更されていた。さらに、閲覧室には各机に以前には無かった端末が一台ずつ設置されていた。館員の話ではそれらの端末から文書目録の閲覧が可能になる予定とのことであった。結局、今回の滞在期間中には利用することができなかったが、かなり以前に目録のデジタル化が開始された国立図書館に続いて、今後は国立文書館においても同様の流れが徐々に進展していくことが期待される。

国立文書館では、現在目録が作成されている中ではイギリスによる軍事占領（1882年）以降の主要な文書群である閣僚会議文書（Maḥāfiẓ Majlis al-Wuzarā'）とアブディーン文書（Maḥāfiẓ 'Ābdīn）に関して調査を行なった。前者に関しては文書群の性格上、監獄に関する予算や人事の認可といった制度面の状況を示す公文書が多かったが、後者に関しては囚人やその家族などから君主に対して恩赦を求める嘆願状が数多く含まれており、その内容を分析することにより王権に対する民衆の認識や、エジプトにおける近代法体系への移行期にあたる当時の民衆の法に対する意識の一端が明らかにできるのではないかと考えられる。それが可能となれば、早稲田拠点がまさにその目標とする、知と権威の動態的研究に貢献することができるだろう。

国立図書館においては、残念ながら新たな発見をするにはいたらなかったが、図書室と雑誌室を訪れ、関係する史資料の調査にあたった。なお、国立図書館は、現在カイロ新市街の中心部からほど近いナイル河畔にあるが（国立文書館も同所に併設されている）それ以前は旧市街に近い場所に設置されていた。最近まで博物館として利用されていたその建物は長らく修復・改装工事が行なわれていたが、今回の滞在中に国立図書館新館として新たにオープンした。今回はこの新館を訪れることはできなかったが、国立図書館所蔵の写本史料がここに移されるとの情報もあり、写本史料の閲覧・利用体制がどうなるか気になるところではある。

その他、長澤榮治氏（東京大学東洋文化研究所教授・東大拠点研究グループ2代表）の紹介でハサネイン・キシク Hassanein Kishk 氏と面談する機会を得、同氏の助言に従い彼が所属している国立社会・犯罪研究所 al-Markaz al-Qawmī lil-Buḥūth al-Ijtimā'īya wa al-Jinā'īya も訪問し、数回にわたってこの所蔵になる史資料も調査した。同研究所の訪問は今回が初めてだが、図書・雑誌とも開架式のうえ、所蔵数はそれほど多くないものの、特に図書が良く管理され、利用の簡便さに感銘を受けた。また、国立図書館も所蔵していない52年革命以前の警察・監獄関係の政府資料を同研究所で確認し、閲覧・複写できたのは大きな収穫であった。

（勝沼聡）

イギリス・ロンドン（大英図書館、ロンドン大学東洋アフリカ研究所図書館）

エジプト・カイロ（国立図書館、教育省図書館、公文書出版協会）における文献・資料調査

期間：2007年3月4日～22日

国名：イギリス、エジプト

参加者：後藤絵美（東京大学大学院総合文化研究科・博士後期課程）

概要：

今回の調査では以下二つのテーマに沿って文献・資料の閲覧・収集を行なった。

（ ）イスラームの知と権威の形成と女性

イスラームに関する言説は、これまで、主に男性の手による著述をもとに論じられてきた。そこで今回の調査では、(A) 女性がいかなる形でイスラームの知や権威に関わってきたのか、(B) 男性による言説と女性による言説に違いはあるのか、という二点を考察するための調査を行なった。具体的には、エジプト国立図書館にて二人のムスリム女性知識人ザイナブ・アル＝ガザーリー（1917-2005）とアーイシャ・アブドゥッラフマーン（1913-98）さらに比較として同時代の男性知識人三名ハサン・バンナー（1906-49）サイイド・クトゥブ（1906-49）ムハンマド・アル＝ガザーリー（1917-96）による、イスラームにおける女性の地位を論じた著述を閲覧・収集した。

（ ）「ヒジャーブ」とエジプト

「ヒジャーブ」とは、ムスリム女性がある種の宗教思想に基づいて着用するヴェールや衣服の総称である。今回の調査では、このヒジャーブという言葉に何が含まれ、何が含まれないかを、誰が、どのような方法で決定するのか考察するための文献・資料の調査を行なった。具体的には「ニカーブ」（顔を覆うヴェール）に関する論争を取り上げた。

ニカーブがヒジャーブに含まれるか否かという議論は、2006年10月に宗教相らがニカーブ着用は義務ではないと発言して以来、エジプトにおいて大きく取り上げられており、現代のイスラームの知と権威、そして女性に関わる重要な問題を示唆するものである。2006年の論争はまだ議論が尽きていないため、今回の調査では1994年に教育大臣によって発布された、小中高等学校でのニカーブ着用を禁止する法令、いわゆる「制服令」に関する同様の論争に焦点をあて、資料収集を行なった。

経過：2007年3月4日夜ロンドンに到着、5日は大英図書館にて2006年10月イギリスのジャック・ストロー元外相（1946-）によるニカーブへの否定的発言に関する新聞各紙の記事を閲覧した。これは、エジプトの政治家や知識人らを巻き込んだその後の論争のきっかけとなったものである。翌5日はロンドン大学東洋アフリカ研究所図書館にて、*Journal of Islam and Christian-Muslim Relations* 等欧文雑誌や、*Majallat al-Azhar* などアラビア語雑誌を閲覧した。後者は、1994年の「制服令」に関するアズハル宗教裁定委員会の見解を掲載したものである。

2007年3月6日午後ロンドンを出発、7日深夜（8日早朝）カイロに到着した。8日より「制服令」に関する資料収集を開始した。「制服令」を定めた教育省の文書（Qarar no. 113, 1994）「制服

令」がシャリーア（イスラーム法）を法源とするエジプト憲法と合致しているかどうかを判断した最高憲法裁判所の記録（Al-Jaridat al-Rasmiyat no. 21, 1996/5/30）を求めて関連する公的機関、図書館などを訪れた。については結果的にインバーバにある公文書出版協会（Al-hayī'at al-‘ammat li-shu’un al-matabi‘ al-amiriyyat）にて比較的簡単に入手することができたが、は早稲田大学イスラーム地域研究所の紹介状（英語）と在エジプト日本大使館の紹介状（アラビア語）に加え、自らの研究について簡略に記したレター（アラビア語）を教育省に持参し、ようやく閲覧することができた（複写は不可、ただし写真撮影は可）。

3月11日より20日まで、エジプト国立図書館とカイロ市内の書店・古書店にて文献の閲覧・収集を行なった。とくにザイナブ・アル＝ガザーリーとアーイシャ・アブドゥッラフマーンに関しては、すべての著述の閲覧を希望していたが、両者は半世紀以上にわたって著作を多数出版している上、新聞・雑誌上でも精力的に執筆活動を行ってきたため著述量が多く、また国立図書館に所蔵されているものが限られ、閲覧・複写に予想以上に時間がかかったため、すべての著述を閲覧することができなかった。同図書館では、閲覧の申し込みは一回に二冊まで、複写は一日一冊につき40頁までと定められており、閲覧・複写とも受け取りまでに通常30分～1時間を要する。さらに、閲覧・複写とも係員が不在のため、事実上サービスを利用できない状態のときもあった。それでも、これら二人の女性をはじめ、上記の知識人らが「イスラームの女性観」について、どのように論じてきたのかを理解するための一助となるであろう文献を閲覧・収集することができた。

（後藤絵美）

エジプト・カイロにおける史料調査

期間：2007年3月12日～3月26日

国名：エジプト

参加者：横内吾郎（京都大学大学院文学研究科・博士後期課程）

概要：

今回の出張の目的は、エジプト・カイロにある国立図書館およびアラブ写本研究所において、ウマイヤ朝史研究に有効と思われる諸史料の写本を閲覧・収集することにあった。

まず、アラブ写本研究所では写本の目録を用い、また国立図書館では写本閲覧室の端末を用いて、それぞれの施設でいかなる著作が収蔵されているのかを調べた。その結果、いくつか報告者の見聞きしたことのない題や著者の著作を知ることができた。また、国立図書館に初期イスラーム史の基本史料のひとつである、パラズリーの『貴顕の系譜 *Ansāb al-Ashrāf*』の写本が二種類あることを知り、それらの閲覧・複写を試みた。

この『貴顕の系譜』の写本のうち片方は、古くからその存在が知られ、ヘブライ大学版や Bibliotheca Islamica 版の校訂に使用されている、イスタンブル・スレイマニエ図書館所蔵の Ms. ‘Āshir Efendi nos.

597-8 の複写とのことである。またもう一方の写本については、上述の二種の版には使用されておらず、言及されてもないが、写本研究所の目録によれば、当写本は前述の Ms. ‘Āshir Efendi nos. 597-8 から 1352 (西暦 1933-4) 年に筆写されたものとのことで、おそらく史料価値がないと判じられているのであろう。いずれにせよ、報告者としては現物を確認して判断したいところである。

このように言うのは、結局、今回は報告者の要領の悪さが災いして上述の写本の複写がかなわず、その他の著作を含めて十分に閲覧することもかなわなかったからである。言い訳をするならば、今回のカイロ訪問が報告者にとって初海外・初中東体験であったために、様々な局面で問題に遭遇したからだと言えるのだが、いずれにせよ本人の責任の埒外ではない。しかし今回複写し得なかった写本であるが、幸いにしてカイロに留学中の諸氏の好意から、その入手についての協力の内諾を得ており、ありがたくも入手がかないそうである。

今回のカイロ訪問では、このほか書店を巡って、刊行されている歴史史料に関しても入手を試みた。こちらは、報告者の財力や体力からすれば適度な量を購入することができた。しかし、今回、報告者にとっての最大の成果は、カイロという街に慣れ、写本研究所と国立図書館の両施設における写本閲覧にまでいたる手続きをようやく覚えられたというところではないかと思われる。

カイロ滞在中は留学中の諸氏を含め、色々な方にお世話いただいた。この場を借りて、お礼申し上げたい。

(横内吾郎)

研究グループ2：「アジア・ムスリムのネットワーク」

【組織】

（研究グループ2メンバー）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 （担当研究テーマ）
桜井 啓子	早稲田大学国際教養学術院教授	研究グループ2代表者 （イラン・日本のムスリム）
店田 廣文	早稲田大学人間科学学術院教授	研究分担者 （イスラーム世界の都市）
子島 進	東洋大学国際地域学部助教授	研究分担者 （イスラーム世界のNGO）
黒岩 高	武蔵大学人文学部助教授	研究分担者 （中国のムスリム）
オマール・ ファルーク	広島市立大学国際学部教授	研究分担者 （比較政治）

（研究グループ2研究協力者）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	担当研究テーマ
青木 隆	日本大学文理学部助教授	中国哲学
石川 基樹	早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程	高齢社会論・社会調査論
大澤 広嗣	國學院大学日本文化研究所調査員	宗教学、日本近現代宗教史
岡井 宏文	早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程	日本のイスラーム
金光 淳	財団法人政治経済研究所主任研究員	社会ネットワーク分析
カビール・モハ マド・フマユン	広島大学大学院国際協力研究科博士課程	文化人類学

北爪 秀紀	早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程修了	日本のモスク研究
木村 友香	桜美林大学大学院国際学研究科博士課程	社会開発
日下部達哉	日本学術振興会特別研究員	比較教育学
小島 宏	国立社会保障・人口問題研究所国際関係部長	人口学
小林 寧子	南山大学外国語学部教授	インドネシア近現代史
佐藤 規子	ラホール経済大学客員研究員	シーア派女性マドラサ研究（地域研究、南アジアのシーア派研究）
佐藤 実	関西大学非常勤講師	中国イスラーム思想
清水 直美	テヘラン大学外国語学部日本語学科非常勤講師	イスラーム倫理学
シーリーン・ジュルディー	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究生	レバノン史、ジェンダー論、平和学
新保 敦子	早稲田大学教育学部教授	中国教育史、中国ムスリム研究
杉山 隆一	慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程	サファヴィー朝史
細谷 幸子	東京大学大学院総合文化研究科博士課程	イラン地域研究、文化人類学、看護学
松本ますみ	敬和学園大学人文学部教授	中国近現代史、近代中国イスラーム史、中国の国民統合論
吉澤誠一郎	東京大学人文社会系研究科助教授	中国近代史

【平成 18 年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

グループ 2 は、アジアを中心に、市民社会レベルで展開されている国境を超えたムスリム間の多層的なネットワークの実態とダイナミズムを明らかにするために、1. マドラサ、2. 移住（滞日ムスリム）、3. イスラーム的 NGO、4. 中国における知識人・芸術家という 4 つのテーマを設定し、テーマごとに研究班を設けた。マドラサ班では、90 年代以降、アジア一帯でマドラサが急増した要因とその背景、マドラサ教育が与える影響などを調べるために、パキスタン、バングラデシュ、イランでフィールド調査を実施した。移住班は、イスラーム圏から移住した滞日ムスリムの現状調査や滞日ムスリムの出身地の一つ、マレーシアでの調査を実施した。イスラーム的 NGO 班は、イランにおける福祉活動を重点的に調査した。知識人・芸術家班は、中国にて、ムスリム書法及び経堂教育についての資料・情報収集を実施した。

このように本年度は、研究体制の立ち上げの年であったことから、班ごとに研究対象とする地域でフィールド調査を行い、研究テーマの妥当性を確認するとともに、資料の可能性や調査地域・機関の妥当性などを検討するという研究方法を採用した。その結果、短期間に、それぞれのテーマに関する情報を有効に収集することができたと思う。次年度は、マドラサ、NGO、移住、知識人・芸術家という 4 つのネットワークの相互比較や関連性などにも目を向けたい。

2. 研究活動の記録

(1) 研究会活動

滞日ムスリム調査班研究会 および 打ち合わせ

日時：2006 年 12 月 17 日（日）11：00～15：30

場所：早稲田大学人間総合研究センター分室（高田牧舎 2 階）

発表者・発表題目（1）：

・金光淳（政治経済研究所主任研究員および情報通信研究機構）

「東アジアイスラム諸国の複合交流ネットワーク分析＋イスラム・ネットワークをどう調査するか？」

発表者は、早稲田大学 21 世紀 COE『東アジア学の創生』で東アジア 19 カ国間の機能の異なる 12 の複合社会交流（貿易、与信、条約締結、首脳外交、軍人交流、武器移転、人の移動、電話、郵便、留学、科学、サッカー交流）ネットワーク・データ・セットを使って、各社会交流ネットワークの間の偏相関関係の時系列的解析を行った。

このデータ・セットの中から、イスラム国であるインドネシア、マレーシア、ブルネイの 3 カ国を抜き出し、この 3 カ国と他の東アジア関係諸国 16 カ国との交流関係のデータ分析を行い、東アジア諸国一般のパターンとの違いを探った。

グラフィカル・モデリングという因果解析モデルを利用し、ネットワーク変数をノードとするネットワーク図によって社会交流間の関係構造をネットワーク解析した。偏相関係数 0.3 でグラフ化する。その結果、その結果、東アジア一般の複雑化する社会交流関係の相互関連とは若干異なるイスラム諸国の社会交流ネットワーク関係構造のパターンを見出した。具体的には冷静構造の欠如と貿易の中心性の急速な高まりと急速な後退である。

これらの結果自体は興味深い知見であるが、国レベルのデータから個人の結果を推論するエコロジカルファラシーの危険性があるので、国レベルの調査ではなく、集団レベル、イスラム教徒個人レベルのネットワーク調査が必要であることが指摘された。

最後に、イスラムの社会ネットワーク調査する際の留意点についても、意見が述べられた。

発表者・発表題目(2):

・店田廣文(早稲田大学人間科学学術院)

「2005 / 2006 関東大都市圏・在日ムスリム調査」

概要:

本報告は、日本学術振興会科学研究費助成による調査研究プロジェクトの中間報告である。本研究では、関東大都市圏、具体的には在日ムスリム(イスラーム教徒)居住者の多い、東京都、神奈川県などを対象地域として、彼らの社会的ネットワークと適応に関する調査と分析の中間報告を行った。生活実態調査の焦点は、特にムスリムたちが形成している社会的ネットワークとし、同国人との社会的ネットワーク、さらには日本人とのネットワーク、および、日本社会への適応については、日常の地域生活における近隣関係における適応、仕事や住居問題など広義の適応問題を取り上げた。

以上に関する項目からなる調査票をもとにして、平成17年の10月から平成18年5月にかけて調査票を使用した自記式の社会調査を実施した。調査対象地域は、モスク(イスラーム寺院)やムサッラー(小規模礼拝所)周辺であり、対象者は有意抽出法によってサンプリングし190票近い回答を得たが、今回の報告では有効回収数149について分析結果を報告し、日本における生活満足度の高さや、適応度の高さが見られることが指摘された。一方で、今後の研究課題として、宗教的ネットワークの内容や、子どもの教育問題や経済生活が提議された。

以上の2つの研究発表のほか、今後の研究計画についても資料をもとに討議した。

(店田廣文)

②イスラーム的 NGO 研究会

日時: 2007 年 2 月 24 日(土) 11:00-19:00

場所: 桜美林大学新宿サテライトキャンパス D 教室

出席者: 子島進、鷹木恵子、澤江史子、細谷幸子、木村由香

概要：

今回は、下記の文献を取り上げ、各人が章ごとに担当して内容を発表した。

Janine A. Clark, Indiana University Press (2004)

Islam, Charity, and Activism: Middle-Class Networks and Social Welfare in Egypt, Jordan, and Yemen
(Indiana Series in Middle East Studies)

中東におけるイスラーム的な NGO 活動（本書では、Islamic Social Institutions と呼ばれている）について、貴重な知見を与えてくれる文献である。ただし、全体を通読すると、用語の定義（middle class）、理論の用い方（社会運動論とイスラーム）などにおいて、問題があることがわかった。ただし、これらの点は、この研究会の今後の課題ともなるものであり、きわめて生産的な読書会であった。

（子島進）

③マドラサ班第 1 回研究合宿

日時：12 月 25 日（月）～26 日（火）

場所：クロス・ウェーブ東中野

概要：

メンバーの自己紹介、研究計画立案、役割分担などを協議した後に、桜井が、マドラサに関する先行研究のレビューを、松本、日下部、フマユンの 3 名が、マドラサに関する各自のこれまでの研究を紹介した。

発表者・発表題目（1）：

・桜井啓子（早稲田大学国際教養学院教授）

「マドラサ関連書籍・論文のレビュー」

概要：

アフガニスタンを実効支配したターリバーンが、パキスタンのマドラサ出身者であったことから、パキスタンにおけるマドラサに注目が集まるようになった。2001 年の米国同時多発テロ事件以後、米国からの圧力もあり、パキスタン政府は、助成を通じてマドラサへの監視を強化するとともに、マドラサ数の把握や実態解明に乗り出した。しかし、マドラサは公教育の枠外にあるために、パキスタン政府のマドラサ管理は遅々として進まないことから、行政担当者、ジャーナリスト、研究者などの間で、マドラサの数や実態をめぐるさまざまな議論が交わされている。これにともなったパキスタンのマドラサ関連のレポート、研究論文、書籍なども増えている。今回の発表では、先行研究の特徴を明らかにするために、収集したマドラサ関連の論文、書籍 22 点（一部、インド、中国、バングラデシュのマドラサに関する文献も含む）において論じられているテーマを紹介し、その傾向を明らかにしようと試みた。

紹介した論文、書籍では、セクト別のマドラサ数と地域的な分布、マドラサ急増の原因、イスラーム運動とマドラサの関係、マドラサの増加とセクト間対立の激化の関係、マドラサの制度やカリキュラムといったテーマが主流をしめている。

最後に、先行研究の大半が、政治的な関心に基づく研究であることを確認するとともに、今後、マドラサ班では、どのような視点や方法を取り入れていくべきかについてディスカッションをした。

その結果、社会的、教育的な視点からマドラサの増加現象を考察すること、個人史的な手法を取り入れること、さまざまな地域やセクトのマドラサを相互に比較すること、アジアのマドラサから中東のマドラサへの留学と帰国者の役割に着目することなどの視点を取り入れることが望ましいのではないかという意見がでた。

発表者・発表題目(2):

・松本ますみ(敬和学園大学人文学部教授)

「宗教教育、公教育と中国ムスリム女性：イスラーム復興、グローバリズムの中のジェンダー」
概要:

中国の西北の回族をはじめとしたムスリムマイノリティを事例に、イスラームのジェンダー観と公教育が普及させようとしている(男並)ジェンダー平等観との間で生じている葛藤を取り上げ、詳細に論じるとともに、公教育からの挑戦に対して、ムスリム女性のための女学(女子マドラサ)がどのように対抗しようとしているのかについて、フィールド調査をもとに明らかにした。以下、主な報告内容である。

文化革命収束後、西北農村でも公立学校が普及し、回族をはじめとしたムスリム女性の就学率と義務教育修了率が向上し、政府が掲げるジェンダー平等観が広められていったが、義務教育が普及しても、ムスリム女性の社会的地位が向上する可能性が限られている。貧困かつマイノリティーである回族をはじめとしたムスリム女性の多くは、漢族社会の最底辺に組み込まれ、搾取の対象となっている。

こうした現状に対抗するかたちで、西北一帯で80年代半からムスリム女性のための「女学」が増えている。女学では、イスラームのジェンダー観にもとづく宗教教育が行われていることや卒業後に女学の教師や宗教者、アラビア語通訳などの進路が開けるなどの理由から、特に貧困層出身のムスリム女性の間で女学の人気が高まっている。報告者は、4校の女学で実施したアンケート調査をもとに、女学で学ぶ回族をはじめとしたムスリム女性の生の声を紹介し、女学の可能性や限界について、さまざまな角度から論じた。

発表者・発表題目(3):

・日下部達哉(日本学術振興会特別研究員)

「バングラデシュ・マドラサ研究の経緯」

概要：

バングラデシュ農村部の初等教育普及に関する研究を行う過程で、「マドラサ」という民間の宗教教育機関と出会ったいきさつなどを説明したのちに、バングラデシュ東部でのマドラサの実情に関するフィールド調査の結果を紹介した。[詳細は、「バングラデシュのイスラーム教育：ブラフモンバリア県コジバ郡ソイバッド村の事例」(国際教育文化研究 vol. 3, 2003. 6)] 以下がその要旨である。

バングラデシュでは、宗教省の管理下にあるアリアマドラサと民間のカリジマドラサがあり、ともに 90 年以降急増している。アリアマドラサは、カリキュラムの 30% が宗教教育に充てられており、普通学校への編入も可能であるのに対して、カリジマドラサは、宗教教育がカリキュラムの 80% を占めていることや民間であることから、普通学校への編入は不可能であり、卒業生の多くは聖職者となる。現在、政府のマドラサ教育局はアリアマドラサにおける普通教育の割合を増加させており、アリアマドラサでは通常の学校教育と遜色ない普通教育が行われている。

報告で紹介されたソイバッド村では、1990 年代にカリジマドラサが 30 校から 60 校へと倍増し、現在も増加を続けている。その理由は、この地域は、もともとイスラーム信仰の根強い地域であり、マドラサに子どもを送った親は宗教的義務を果たしたとみなされる傾向があることや、1990 年の「万人のための教育 (Education for all)」世界宣言以降、ユネスコ、ユニセフなどの国際機関が、公教育普及のために大規模な資金投入を行ったことに対して、世俗教育や国際的な NGO に対して不信感を抱く人々が、カリジマドラサへの寄付を増やしたからだという。また、多くのカリジマドラサは無償の寄宿舎を有しており、貧困世帯が子どもを送ることで生活費が軽減されることも背景の一つであり、さらにバングラデシュの農村出身者の限られた職業選択のなかでも、カリジマドラサを卒業して聖職者になるという選択が、「堅実で安定的」である点も指摘された。

発表者・発表題目 (4)：

・カビール・モハマド・フマユン (広島大学大学院国際協力研究科博士課程)

“Madrassa Education in Bangladesh:

A case Study of the Municipality Area in Brahmanbaria District”

概要：

バングラデシュのブラフモンバリア県で実施したフィールド調査をもとにした修士論文の要旨を紹介しながら、バングラデシュのマドラサの状況について説明した。

報告者は、バングラデシュにおけるイスラームの維持と形成において決定的な役割を果たしてきた宗教者 (ウラマー) が、どのような制度・環境のもとで養成されているのかという関心からマドラサというテーマを選択したいきさつについて紹介した後、バングラデシュのマドラサの歴史と制

度、マドラサのカリキュラム、マドラサで養成されたウラマーが、バングラデシュ社会のなかでどのような活動をし、人々にどのような影響を与えているのかという 3 点から考察することの意義について、自身の研究をもとに説明した。ブラフモンバリア県は、バングラデシュのなかでも特に、多数のカリジマドラサが存在し、それらを統括するマドラサ委員会が設置されている地域である。フィールド調査を通じて、マドラサの教育は、単にイスラーム伝統の保護者、維持者を育成しているだけでなく、現代のバングラデシュ社会が抱える問題にイスラーム的な観点から解答し、さらにはさまざまなタイプのイスラーム運動へと人々の導くという重要な役割を果たしていることを具体的に明らかにした。

早稲田拠点グループ2 滞日ムスリム調査班研究会 および 打ち合わせ

日時：2007年2月24日（土）16：00～20：00

場所：早稲田大学 41-31 号館 2 階会議室（201）

発表者・発表題目（1）：

・大澤広嗣（大正大学大学院）

「戦前日本のイスラーム関係者の人脈——国家主義団体を例に」

概要：

大澤広嗣の発表は、戦前における滞日外国人ムスリムおよび日本人ムスリムたちとの接点があった、国家主義団体や国家主義者について報告した。

そもそも戦前日本のイスラーム史について振り返ると、極めて複数の国家主義者たちが登場する。しかしながら戦後以降は彼らを「右翼」として単純に評価されてきた傾向もあり、これまで断片的に記述されていたに過ぎず、総合的には検証されていなかった。そこで本調査班における報告者の役割として、戦前日本のムスリムを取り巻いたネットワークについて、国家主義運動史の視点から明らかにすることを課題として設定した。国家主義運動の歴史については、様々な団体が分離と統合を繰り返して系譜が複雑なため、運動の全体像を捉えることは難しいが、今回の報告は基礎作業として位置付け、国家主義運動とムスリムとの接点を整理した。

報告では、最初に国家主義や右翼の定義、戦前日本の国家主義運動史を確認した。

続いて、戦前日本のイスラーム史のなかの国家主義団体および国家主義者に関する諸事例を報告した。本報告ではムスリムを支援し、関係のあった次の団体や組織を取り上げた。

すなわち、玄洋社——黒龍会——大日本生産党系、老壮会——猶存社——行地社系、愛国社とその関連団体である興亜協会と興亜専門学校（現、亜細亜大学）、大東文化協会と大東文化学院（現、大東文化大学）、大亜細亜協会、興亜団体連合会とその後身である大日本興亜同盟などである。また大日本回教協会に関与した国家主義者たちも取り上げた。滞日外国人ムスリムおよび日本人ムスリムをめぐる国家主義者など、各組織に関係した人物たちの氏名については、紙幅の関係で省略し、別の機会に取り上げたい。

以上、簡単ではあるが報告の概要を述べた。国家主義運動史に関する先行研究は多数あるが、戦前日本のイスラーム史を踏まえた国家主義運動史研究は少ないため、本研究の意義は大いにあろう。今後の課題として、国家主義とアジア主義の思想を分析して、戦前日本のイスラーム史についてより実証的に明らかにしたい。

（大澤広嗣）

発表者・発表題目（２）：

小林寧子（南山大学）

「日本=インドネシア・ムスリム交流史序説」

日本人が実際に接触したことの多いムスリムは東南アジア出身であろう。地理的な近さもあり、政治・経済・文化の交流は歴史的にも古い。

江戸時代の記録、『紅毛雑話』（森島中良、1787年）にはスラウェシ島のブギス人ムスリムがオランダ商船で長崎に到来したことがわかる。逆に、博多の蘭学者青木興勝が筑前の漁民孫七の漂流体験（1764-1770/1771）を記した『南海紀聞』には、カリマンタン島南部のバンジャルマシンでタリーカの修行をするムスリムの様子が伺える。

開国後の日本の東南アジアに対する関心は高くはないが、それでも日本で初めてイスラームに関して体系的に記した『回教』（瀬川亀、1918年）が南洋協会から出版されたことは実際の接触が多かったことを物語っている。

東南アジアからのムスリムの来日は1930年代初頭のインドネシア（当時は蘭領東インド）からの留学生に始まる。また、1930年代後半には日本の対ムスリム宣撫工作がインドネシアのムスリムの関心を引いたこともあった。日本軍の東南アジア侵攻の折りに水先案内的な役割を負わされた留学生もあった。さらに、日本軍の占領地から「南方特別留学生」が2期総計81名来日し、戦後まで日本に滞在した。

ただ、戦前の日本で東南アジアからのムスリムを中心にネットワークが構築されるにはいたらなかった。当時はナショナリズムが優勢の時代であり、この地域のムスリムは、植民地支配下にある住民として、民族独立問題に大きな関心があったからである。

（小林 寧子）

以上２つの研究発表の後、来年度以降の研究方針について、改めて確認した（店田廣文）。

(2)海外派遣・調査

パキスタンにおけるシーア派女子神学生の社会的属性ならびに意識に関するアンケート調査

期間：2006 年 9 月 11 日～9 月 15 日

国名：パキスタン

参加者：桜井啓子（早稲田大学国際教養学部）

概要：

イスラーム地域研究所の研究グループ2「アジア・ムスリムのネットワーク」の「マドラサ」研究班の調査研究を推進するために、パキスタンのラホールにおいて、シーア派の女子マドラサ(Al Zahra, Jamia Narjesie, Minhaj al Hussain 女子部, Sakina bintul Hussain) 4校で、教師と生徒を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの目的は、女子マドラサで学ぶ学生の年齢、学齢、社会的背景、女子マドラサに入学した動機、そこでの学習が彼女たちに与える影響などを明らかにすることである。

アンケート調査を実施するに当たって、まずパキスタン全土のシーア派マドラサを統括するシーア派マドラサ委員会（Shia Madrasa Board）を訪問し、アンケート実施承諾ならびにアンケート内容に関する承認を得た。出身地に関する質問など、いくつかの点で変更を求められたものの、主要な部分での修正要求はなかった。

アンケートでは、女子マドラサに寄宿している生徒たちの年齢、出身地域のタイプ（村、町、都会）、マドラサ入学以前の学歴、親の職種、マドラサへの入学が叶わなかった場合の進路選択、マドラサ入学の動機、マドラサ入学を勧めた人物、マドラサでの教育がもたらした価値観の変化、卒業後の職業などに関する質問をした。さらに自由解答欄を設けて、マドラサでの学習経験、マドラサを通じて学んだイスラーム女性の権利やあり方と現実のパキスタン社会の状況に関する見解などについて記してもらった。一部、回答選択肢が不十分であったなど、やや反省点もあるが、マドラサ教育の実情を把握する上で、極めて有効な調査であったとおもわれる。（回収したアンケートは、生徒 165 名、教師 17 名、合計 182）

（桜井啓子）

パキスタンの男女シーア派マドラサに関する調査（カラチ及びラホール）

期間：1)カラチでの調査 2007年1月15日 - 27日、2月1日 - 9日、2月15日 - 18日

2)ラホールでの調査 2007年2月22日 - 2月28日

国名：パキスタン

参加者：佐藤規子（ラホール経済大学客員研究員）

概要：

今回の調査は、パキスタンにおけるシーア派マドラサに関する実情把握・関連情報集を目的とするもので、パキスタンの2大都市、カラチとラホールにて現地調査を実施した。

パキスタンのシーア派マドラサ研究に関しては、パキスタンにおけるシーア派ムスリム・ネットワーク解明の観点から、桜井啓子早稲田大学教授によりすでに研究の先鞭がつけられており、ラホールの女子マドラサでのアンケート調査も同教授により実施されている。今回の調査では、こうした先行の調査研究の成果を踏まえつつ、マドラサの教師・学生たちにインタビューを実施することにより、彼女たちのイラン留学の経験やパキスタンでのシーア派女子宗教教育に関する考え方等を収集した。調査地に関しては、佐藤の滞在するカラチ市でより詳しい調査を実施した。

カラチは、パキスタン建国後、インドからの避難民が定住したことにより急速に発展した都市である。このためラホールに比較し、都市そのものの歴史はきわめて浅いが、現在の推定人口は1千5百万ともいわれ、パキスタン最大の人口を擁するメガ都市である。したがって、同市のシーア派人口も、パキスタンのシーア人口比10 - 15%から換算した場合、150万人相当の規模と推定されるが、大多数のシーア派の人々は市内に一市民として分散して生活しており、シーア派ムスリムのみが固まって居住する地区は特に存在しない。

パキスタンのマドラサのカリキュラム及び資格試験を統括しているパキスタン・シーア派宗教学院協会（本部：ラホール）発行の全国マドラサ台帳には、カラチ市のマドラサとして、24の男子マドラサ（全パキスタンで532の男子マドラサ）及び4つの女子マドラサ（全パキスタンで100の女子マドラサ）が登録されている。このうち、上記宗教学院協会のカラチ支部が、同市南部ディフェンス地区の「ホーゼ・イルミエ・イマーム・ジャミニー」に置かれていることがわかったため、同マドラサの責任者、Syed Fayaz Hussain Naqvi 師を数回にわたり訪問し、聞き取りを行ったところ、以下の点が判明した。

- マドラサ教育の資格試験の実施に関し、Naqvi 師がカラチ地区の責任者として、管轄のマドラサを統括している。その管理実施を男女マドラサ実施している。ただし、試験内容の決

定や合否判定は全てラホールにあるシーア派宗教学院本部が行っており、同師はこれには関わっていない。

- マドラサ教育のカリキュラムもラホールの本部が全国共通のものを規定している。
- 資格試験以外の事柄については、マドラサの運営、学生募集、教科書選定も含め、すべて各マドラサの裁量に任されており、各マドラサは基本的に自立した組織という認識である。
- Naqvi 師のマドラサには、同師も含め 6 名の専任教師と 60 名の学生がいる。選任教師はすべてウラマーで、同じ敷地内にある宿舎に家族とともに暮らしている。学生は基本的に全員、同敷地内の学生寮で寄宿している。
- 学生は、授業の合間に外部のコンピュータークラスや英語クラスに通うこともできる。
- Naqvi 師のマドラサに隣接して立てられているシーア派モスク及びイマームバルガーに関しては、この地区のシーア派アンジョマンが管轄しており、Naqvi 師は公的にはモスク及びイマームバルガーの行事には責任関係がないが、マドラサの教師の一人が、モスクの金曜礼拝導師としてアンジョマンにより任命されており、地区のシーア派コミュニティと密接な関係を保っている。

女子マドラサに関しては、上記 Naqvi 師により、マリール地区にある「マドラサ・ハディージャトルコブラ」と、伝統的な寄宿スタイルのマドラサではなく、昼間の授業のみ提供する宗教学校として「アルゼフラ・アカデミー」を紹介されたため連絡を取り、訪問したいとの希望を伝えたが、マドラサをめぐるパキスタン国内の状況が不安定との理由から、今回は視察を受け入れてもらえなかった。この背景には、昨年末より、米軍とパキスタン軍によるアフガニスタン国境地帯への軍事行動が一層激しくなり、また、パキスタン国内では米国の圧力により、強制閉鎖も含めたスンニー派マドラサへの締め付け政策がさらに厳しくなったことから、シーア派マドラサも外部からのインタビューや訪問に対し、強い警戒心を示すようになったという事情がある。したがって、今回の調査では、シーア派コミュニティを訪ねる過程で、女子マドラサの教師や学生を探し当てるという方法を取らざるを得なかったが、結果としては何人かの女性マドラサ教師学生に会うことができ、こうした女性たちにインタビューを行うことができたが、そのうちの一人の女性の話は大変興味深いものであり、以下にその要点をまとめた。

- 両親はインドのデリー近郊の出身で両親ともセイエドの家系である。自分はカラチで 1968 年に生まれた。宗教の勉強に関心があり、イラン革命後のコムの子マドラサに 17 歳で留学した。自分もイランでの勉強にあこがれたが、母親が強く留学を勧めてくれた。その後、親類の取り持つ縁で、同じパキスタンからコムに留学していた現在の夫と結婚し、そのまま夫婦でコムに滞在し、2 年前に帰国した。イランには、約 20 年間滞在したことになる。夫の家族

もセイエドである。

- コムでの生活は、最初から最後まで快適そのもの、まさに夫婦で学業に集中できる環境であった。住居も生活費も基本的には全て所属するマドラサから支給され、子供たちも現地の学校に通ったため、心配事は何もなかった。
- イランにはできればもっといたかったが、イランで学んだことをパキスタンの人々に伝え、シーア派の人々を教育し正しい方向に導くことが自分たちの使命と考え、夫婦そろって故郷のカラチに戻った。自分は現在、女子マドラサを開くことを計画しており、そのための準備に忙しい。夫はホジャットルエスラムの称号を得ており、現在は当地のマドラサのひとつ、イマーム・ホメイニー宗教学院で教鞭をとっている。また、今年は、アーシューラーの追悼行事の際の集団礼拝の礼拝導師の大役を依頼されるなど、シーア派コミュニティからの評価も高い。将来は夫も自分自身のマドラサを開きたいとの希望をもっている。
- 宗教を学問として学んだことにより、自分の日常の行動すべてに自信を感じている。また、こうした自信により、自分に与えられたどのような環境の中でも、人生を積極的に考えることができるようになったと思う。自分と同じような体験とそこから来る自信を、一人でも多くの女性に伝えたい。

ラホールでの調査では、前述のパキスタンシーア派宗教学院協会を訪問し、本調査の目的を説明し、カラチでの調査に必要なコンタクト・パーソン等の情報収集を行った。上述 Naqvi 師も同協会より正式に紹介された。

今回の調査では、カラチ及びラホールにて富裕なシーア派ビジネスマンへの聞き取りも実施し、シーア派コミュニティとマドラサとの関係等についての情報収集を試みた。この結果、シーア派富裕ビジネスマンからホームスがウラマーやマドラサに定期的に提供されていることはわかったが、その額や、提供先のウラマーやマドラサをどのように決めているのかというような具体的情報については明確にはわからなかった。マドラサとコミュニティとの関係を探る上で、このホームスの実態解明を行うことは今後の重要な課題でもある。

(佐藤規子)

女子マドラサ、マドラサを所有する宗教関連事務所、女子マドラサ卒業生の訪問調査

期間：2007年2月1日～2月8日

国名：イラン

参加者：清水直美（テヘラン大学外国語学部日本語学科・非常勤講師）

概要：

イランにおけるシーア派学問の中心地コムにある International Center for Islamic Studies を通じて、

その傘下にある女性問題研究所、女子マドラサ、宗教系大学などの諸機関を訪問し、パンフレットや出版物を収集するとともに、女子マドラサの卒業生であり、かつ現在、女子マドラサに勤務する教師たちから、女子マドラサのカリキュラム、教科書、試験制度、女子マドラサが急増した背景などに関する情報収集を行った。

(清水直美)

Islamic education in Bangladesh and its genealogical relation to Deobandian School of Thought: The case of a local district town

期間：2007 年 2 月 13 日～3 月 27 日

国名：バングラデシュ（ブラフモンバリア、ダッカ）

参加者：カビール・モハマド・フマユン（広島大学大学院国際協力研究科・博士後期課程）

概要：

The central objective of the research is to understand the diversified systems of Islamic education in Bangladesh based on the case of a local district town—Brahmanbaria. This study also investigates how and in what extent the system of Islamic education is influenced by the Deobandian School of Thought—*Ahle Sunnat wal Jammaat*—promoted and maintained by a nineteenth century school of Islamic education—Deoband which was established in the Province of Uttar Pradesh in India. This study presumes that Deoband had and has a profound influence on the genre of Islamic education in South Asian countries including Bangladesh.

For such inquests in the context of Bangladesh the fieldwork of the study has been conducted in the east-central district town of Brahmanbaria. In addition with primary field-research done in Brahmanbaria town some other fieldworks have also been conducted in some government and non-government offices and organizations concerned for Islamic education in Bangladesh. Methodologically the study depends on ethnographic field-method employing several data collection procedures such as open-ended interviews, participant observation, key-cultural conversation and textual method. The entire period of the fieldwork was nearly for one and half month, from February 13 to March 27, 2007.

Primarily, the findings of the fieldwork suggest that there are two kinds of *madrasas*, schools for imparting Islamic education, in Bangladesh: *Ali'a* and *Quawmi* or *Kharizi'a madrasa*. The first type of *madrasa* is being accommodated in government's mainstream system of education and managed, operated and funded by government while the *Quawmi madrasa* functions independently and managed by public charity, religious alms and by endowments. According to Bangladesh Madrasa Education Board, the institution that is responsible for supervising and controlling the *Ali'a madrasas* in all over the country, established in 1978, the number of *Ali'a madrasas* is 15,941 in 2006. On the other hand, regarding the number of *Quawmi madrasas* Bangladesh government has no data available at its hand. In Brahmanbaria district town (that is called Upazilla, a sub-district

administrative tier of government) there are 17 *Ali'a madrasas* while the number of *Quawmi madrasas* is higher than that. There is a private board of *Quawmi madrasa* namely *edara-e talimi'a* functioning under a big *Quawmi madrasa*—Jamia Islamia Yunusia Madrasa at the center place of Brahmanbaria district town. A number of 69 *Quawmi madrasas* from all over Bangladesh are affiliated with the private board of which 29 *madrasas* are located in Brahmanbaria town area. Moreover, there are some other *madrasas*, which are functioning independently beyond the private board of *Quawmi madrasa* in Brahmanbaria. The number of such *Quawmi madrasas* could not be confirmed because of unavailable sources of information. But according to some personal contact with the teachers of *madrasas* the number of such *madrasas* could range from 50 to 70 in Brahmanbaria district town and its contiguous areas i.e. Upazilla.

Though the nature of *madrasa* education in South Asia is diversified in nature in terms of their different schools of thought and of their different sectarian split such as Deobandian, Ahl-i-Hadith, Barelwi, Jamaate Islami and the Shias but the *Quawmi madrasas* in Brahmanbaria are predominantly Deobandian in nature. During the fieldwork not a single *madrasa* was found that is morally and principally maintain other school of thought except Deobandian tradition. Like Deoband Madrasa these *Quawmi madrasas* maintain the principal Islamic thought—*Ahle sunnat wal jammaat*, which is based on the Koran, the tradition of the Prophet and on the Hanafi *madhhab*, Islamic school. The influence of Deobandian thought on such *madrasas* is manifested through their curriculum and in other Islamic activities. Like Deoband these *madrasas* prioritize on teaching the Koran and its exegesis; *fiqh*—Islamic law and jurisprudence; and *hadith*, the tradition of the Prophet. For instance, it was found that the curriculum of Jamia Islamia Yunusia Madrasa is almost identical with the curriculum of Deoband Madrasa. It is said that Jamia Islamia Yunusia Madrasa is the oldest *madrasa* in Brahmanbaria established in 1914 by a Deobandian follower in the then who came from India namely Mawlana Abu Taher Muhammad Yunus, after whom the Madrasa was named. Then Yunusia Madrasa was headed by another Deobandian—Fakhre Bangal Allama Tazul Islam, who followed by Deobandian graduate Mawlana Sirajul Islam and at present continued by another Deobandian *alim*, Islamic learned person—Mufti Nurullah. Though currently there is no direct relation with Deoband Madrasa Yunusia Madrasa is still maintaining the tradition of Deobandian school of thought and the graduates of the Madrasa are spreading in different parts of Bangladesh some of whom launch new *Quawmi madrasa* based on Deobandian principal—*Ahle sunnat wal jammaat*.

On the contrary, in this research it was found that the *Ali'a madrasas* in Bangladesh are less influenced by Deobandian school of thought since it is a hybrid system of education comprising both modern and Islamic education. Interestingly enough, the Deobandian follower i.e. graduates of *Quawmi madrasas* consider *Ali'a madrasa's* system of Islamic education as “corrupted” version, as I was told by an interviewee, of Islam since its schooling was first patronized by the British colonizer (the first *Ali'a madrasa* was established in Calcutta by the British government in 1780) and since it reduces the “important” content of Islamic education. But socially the

graduates of *Ali'a madrasas* are more privileged as compared to the graduates of *Quawmi madrasa* because the certification of two major degrees—*Dakhil*, secondary level; and *Alim*, higher secondary level—are recognized by government system of education. According to an officer of Madrasa Education Board, government is taking necessary steps for recognizing other two major degrees—*Fazil*, bachelor level; and *Kamil*, Master level—of *Ali'a madrasa*. Government is also planning to establish a separate Quwami Madrasa Board responsible for supervising all such *madrasas*. If it is implemented the principal degree of *Quawmi madrasa*—*Daora hadith*, expertise on the tradition of the Prophet would be equivalent to Master level of education. Long before such plan a non-government Quawmi Madrasa Board named by *Befaqul Madaris* has been functioning independently. The Secretary General of the Board, Mawlana Abdul Jabbar expressed that at present there are two hundred *Quawmi madrasas* affiliated with the Board from all over the country, all of which Deobandian in nature. According to him if government formally recognize the *Quawmi* system of education they would not prefer to change their principal nature and its curriculum. Thus, how the system of *Quawmi madrasa* education will be accommodated in the modern education system is a question of further research.

(Kabir Muhammad Humayun)

バングラデシュのコウミマドラサに関する調査

期間：2007 年 2 月 15 日～2 月 23 日

国名：バングラデシュ

参加者：日下部達哉（日本学術振興会特別研究員）

概要：

現在、バングラデシュのマドラサは二種類に大別できる。一つは、教育省のマドラサ教育委員会（Madrasa Education Board）の管轄下であり、宗教教育と共に初等・中等レベルまでは普通教育も行うアリアマドラサである。もう一つは、政府の管理を受けず、独立的に運営され、教育内容も普通教育は英語と数学が初等レベルの 3 年ほど教えられる以外は、ほとんどがアラビア語、ウルドゥー語、ペルシャ語のテキストを用いたイスラーム教育を施すコウミマドラサ（*Qawmi Madrasa*）あるいはカリジマドラサ（*Khalizi Madrasa*）とよばれるものである。このコウミマドラサは、政府の管轄外にあり、正確な数は現在のところ不明で、内部における具体的な教授内容についてもよくわかっていない。また運営についても政府登録がなされるアリアマドラサでは教員給与の 90%が政府に保証されるが、コウミマドラサでは独立採算であり、村人の寄付、あるいは中東からの資金提供などによって運営を成り立たせていたりするが、その詳細は明らかではない。

これらのことから、今回の調査では、バングラデシュのコウミマドラサの実態について首都ダッカのマドラサ教育委員会や有識者へのインタビューによって、実際のマドラサ教育の現場とその受け手としての子どもや地域住民へのインタビューについては、東部ブラフモンバリア県をフィールド

ドとし、調査を行った。

コウミマドラサの歴史については、アリアマドラサ同様 1780 年コルカタにおけるデーオバンドマドラサに端を発するが、現在ではそのデーオバンド、バーレヴィー、アウラハディス、ジャマテ・イスラミア、アハマディアといった 5 つの系譜が存在しそれぞれが独自の路線をとりつつもダッカにあるコウミマドラサ委員会に属している。80-90 年代から、このコウミマドラサ委員会と教育省マドラサ教育委員会との間に、学位の読替えを前提としてコウミマドラサに普通教育を導入させるための協議があり、結局は物別れに終わった経緯が明らかになった。政府の意図としては 97 年からの第 5 次 5 カ年計画に「マドラサの近代化」を入れていることから、普通教育をも施す教育機関として取り扱うことを望んでいる。コウミマドラサ側も学位読替えが実現するとマドラサ学生の就職に有利になるが、教育内容が変更されることは受け入れなかったという。

ブラフモンバリア県は、コウミマドラサの数がここ 10 年で急速に増加しているといわれ、最大派閥のデーオバンド系マドラサが現在 70 以上あるといわれる。中心部であるブラフモンバリア市内で最も大きな建築物はマドラサであり、運営のほとんどが寄付や中東に渡ったバングラデシュ人が集めた寄付金などで支えられている。農村部でも、充実した施設をもつのは常にマドラサであり、ウラマーやモオラナ養成のため高等教育段階まで整備されている。マドラサ就学者のほとんどは貧困家庭の子どもであり、多くはダキルすなわち初等教育段階を終えて農業に従事するため、ダウラハディスと呼ばれる高等教育段階まで進むのは少数派であるという。教育課程は、アラビア語、ウルドゥー語、ペルシャ語などのテキストによってハディース、ムハンマドの人生、ムスリムのとるべき態度などを学ぶ。調査中は試験も行われていたが、解答のための言語はアラビア語、ウルドゥー語、ベンガル語から選ぶことができる。マドラサの教師曰く、8 割がウルドゥー語を選ぶという。理由は、独立以前の東パキスタン時代から使用するウルドゥー語で書かれたテキストを多用しているからだという。地域内では、マドラサのプリンシパルであるフズールは、ピール（聖者）という位置づけであり、地域住民から尊敬の念を集める。これはヒンドゥー文化の影響が濃い西部バングラデシュとはかなり異なっており、コウミマドラサの正統性がかなり強いといえるだろう。ただし、マドラサの高等教育段階に入る全ての人々が聖職者になるわけではなく、中にはダウラハディスを修了した後に別の仕事に就いたり、理工系の大学を出た後からマドラサに入ったりする事例もあった。

今回の調査では、以上のようにコウミマドラサに関する情報を収集することに終始したが、今後検討すべきは、他国、特に同じ南アジアのパキスタンのマドラサとの比較検討を行い、南アジアイスラームの全体的な動きの中に位置づけていくことであろう。また、そうしたイスラームからのインパクトとグローバルな要請である普通教育普遍化を住民がいかに受け止めているのかについても、調査していく必要がある。

（日下部達哉）

イランにおける聖職者との面談調査およびマドラサ関連資料収集

期間：2007 年 2 月 20 日～3 月 7 日

国名：イラン

参加者：杉山 隆一（慶應義塾大学大学院文学研究科・後期博士課程）

概要：

イランの高等教育のシステムにおいては、モッラー（イスラーム法学者、聖職者）を専門に養成するハウゼと呼ばれるイスラーム神学校と大学という二種の高等教育機関が存在する。前者は主として伝統的なイスラーム諸学の教育によって聖職者を養成する場であるのに対し、後者は名称から想起できるように、政府の管理下におかれ、イスラーム的学問のみならず世俗の学問の教育も行う、いわば西欧的な教育の場である。近年、特に上記のような二種の高等教育機関の並存が常態化して以降の顕著な傾向として注目すべき事象は、ハウゼ・大学双方で教育を受ける学生の増加である。特にハウゼである程度学問を修めた学生が、大学に移って勉学を続けるという傾向が非常に強く見られる。伝統的なイスラーム諸学を専門に修め、モッラー養成に特化した場であるハウゼで学ぶ学生たちが、モッラーになることを意識しながらどうして大学にて学問を修める必要があるのか、そしてハウゼから大学へという学生の「流れ」を生み出した社会的要請とはいったい何なのか、という問いに解答を与えることは、現代イランの高等教育の特殊性を語る上で重要なだけでなく、現代イラン社会における高等教育と社会の相関関係を見てゆく上でも不可欠であろう。

出張者は上記のような問題意識に基づき、テヘラン、マシュハドにてハウゼ・大学双方で学習経験のある学生、聖職者、社会人に対して聞き取り調査を行った。聞き取り調査で問題にしたのは、ハウゼと大学での教育方法の違い、ハウゼ出身者が大学で学ぶことの意義、大学卒業・修了後の進路およびハウゼのみで学問を修めた場合とのキャリアパターンの差異、などである。出張者にとっては短期間の滞在であり、かつ面談相手の予定変更もあったため、あまり多くの人々に会って話を聞くことは残念ながらできなかったが、中には長時間に渡って聞き取りに応じてくれた方もおり、密度の濃い情報収集が行えたと考えている。

また、マドラサ関連の資料収集も本出張中にあわせて行った。Markaz-e Modiriyat-e Houze-ye 'elmiye-ye Qom で発行されているマドラサ関連の情報誌である *Payam-e houze*、その他マドラサ教育の問題を扱った図書などを入手することができた。

（杉山隆一）

イラン・イスラーム共和国における NGO 活動と福祉に関する現地調査

期間：2007 年 2 月 26 日～3 月 12 日

国名：イラン

参加者：細谷幸子（東京大学大学院総合文化研究科・博士課程）

概要：

今回の海外出張の目的は、イラン・イスラーム共和国において、近年活発化している福祉領域における NGO の活動を調査することであった。具体的には、以下の二つの NGO 活動に関する調査を行うことを目的としていた。

- ()これまで私が調査対象としてきたテヘランにある慈善財団が運営する NGO であり、入所型高齢者・障害者介護福祉施設でもあるキャフリーザク介護福祉施設を訪ね、前回、集中的に調査をおこなった 2003 年から、施設の規模や活動の内容がどのように変化しているかに関する情報を収集する。
- () 2003 年末に起こった地震によって 6 万人以上の犠牲者を出したバムを訪れ、震災によって家計維持者（夫あるいは父親）と家屋を失い、生活に困窮している女性の支援を、縫製工場の設立を通しておこなっている NGO、バム女性共同縫製所の活動内容や活動方法に関する情報を収集する。

テヘラン到着後、キャフリーザク介護福祉施設の関係者や、これまで関わってきた他の NGO 関係者を訪問したところ、上記の 2 つの NGO に加えて、脊髄損傷を負った障害者自身が設立した NGO、テヘラン脊髄損傷協会での調査・情報収集が可能になった。また、この NGO からの紹介もあり、バムでは、 の女性被災者支援の NGO だけでなく、脊髄損傷を負ったバム地震被災者の NGO での調査が可能になった。

日程としては、2 月 27 日から 3 月 6 日まではテヘランでの調査に従事し、3 月 7 日から 3 月 10 日朝までは、バムにおいて調査をおこなった。バムからテヘランに戻った 3 月 10 日昼から日本に帰国する 3 月 11 日夕までは、各団体の関係者への挨拶回りにあてた。

() テヘラン・キャフリーザク介護福祉施設

キャフリーザク介護福祉施設は、3 年前と比較して、施設の規模が大きくなり、寄付金も増加した様子であった。施設が毎月刊行している雑誌を見る限り、これまでは控えめであった政府要人の視察招待が活発化し、前々大統領・前大統領・現大統領の施設視察場面や理事との会談場面がカラー写真で紹介された号が目をついた。

当介護施設は、イスラームの信仰心を基盤とした一般からの寄付金によって運営費用がまかなわれているが、規模の拡大によって、これまで慎重な態度をとっているように思われた政府との関連を強調するような動きがあったことは、イランの NGO 活動の特徴を分析する上で、興味深い状況のひとつであった。

() テヘラン脊髄損傷協会

3 年前の調査時から活動が拡大し、現在はテヘランの中心部に事務局が設けられ、ここで週に一度、脊損者の生活において最も大きな問題である床ずれの処置を行っていることがわか

った。障害者たちは、NGO が所有する車椅子移動用のワゴン車でテヘラン各所から集まり、ボランティア医師の診察と処置を受け、お互い情報交換をして帰宅する。この NGO も慈善家が集める一般からの寄付金で活動しているが、障害者自身が設立したという点で、他の福祉・医療系の NGO と活動の性質を異にしている。

() バム女性共同縫製所

この NGO の設立者は、ケルマーン出身の女性慈善家であるが、現在、彼女は役職から身を引き、被災者である女性たち自身が運営にかかわっていけるよう、方針転換をおこなっているということであった。運営会議に参加する機会を得たが、一時、所長になった男性が寄付金を搾取していたことが発覚し、被災者女性たち自身が訴えて、彼を役職からはずした経緯があることがわかった。

() バム脊髄損傷協会

バム脊髄損傷協会は、震災で脊損となった若い男性が中心となって設立された。この NGO もまた、女性の慈善家が深く関わり、一般からの寄付金で運営費用やメンバーの生活支援金がまかなわれている。私が調査で訪れていた期間に、ちょうど一人の女性慈善家がテヘランから脊髄損傷専門医を招待し、バムにあるホテルのロビーで近郊に住む脊髄損傷患者の診察をおこなうという出来事があったため、この機会を利用して、寄付金集めの交渉をする慈善家の行動や、地方に住む脊髄損傷患者たちが抱える問題について、直接インタビューをすることができた。

今回のイラン滞在中は、予想以上に内容が濃い調査をおこなうことができた。特に、それぞれの NGO が理想とする援助のあり方や、寄付金集めの戦略・交渉術などに関しては、イラン国内やイスラーム圏の NGO というテーマにおいてだけでなく、福祉サービスを提供する NGO に関する普遍的で根本的な問題であると考える。この点に関して、さらに研究を深めていきたい。

(細谷幸子)

中国ムスリム書法及び経堂教育についての資料・情報収集

期間：2007 年 2 月 27 日～3 月 13 日（青木、黒岩、佐藤）

2007 年 3 月 2 日～3 月 13 日（吉澤）

参加者：黒岩 高（武蔵大学人文学部助教授：分担者）

青木隆（日本大学文理学部・助教授）

佐藤実（関西大学・非常勤講師）

吉澤誠一郎（東京大学人文社会系研究科・助教授）

概要：

日程：

2/27 成田—上海： 出国

2/28 上海—蘭州（国内線）：イスラーム經書店における資料収集・ムスリム書法関連の資料・情報収集。

3/1 蘭州—臨夏（チャーター車）：イスラーム經書店における資料収集・ムスリム書法関連の資料・情報収集

3/3 蘭州—西寧（チャーター車）：現地ムスリム書家・馬国鋒氏との情報交換。吉澤と合流（3/2 成田—上海 3/3 上海—西寧）。

3/6 西寧—西安（国内線）：イスラーム經書店・清真寺における資料収集。ムスリム書法関連の資料・情報収集。陝西師範大学の研究者との学術交流。

3/9 西安—上海（国内線）— 鎮江（鉄道）：江南地域における書道・清真寺蔵書調査。

3/12 鎮江 - 上海（鉄道）

3/13 上海—成田：帰国。

甘肅省蘭州、臨夏では、イスラーム經書店においてムスリム書法・經堂教育関連の資料を収集したほか、明清代のイスラーム知識人の著作及び現地ムスリムの教育について聞き取り調査を行った。

西寧において吉澤と合流、現地ムスリム書法家馬国鋒氏（青海河湟穆斯林書画研究所副所長）と会談し、現地ムスリム書法家のネットワークについての情報を得た。また、馬氏からは2008年秋季における日本招聘と中国ムスリム書法のデモンストレーションの依頼に対する快諾を得た。加えて、イスラーム經書店において經堂教育関連の資料収集を行った。

西安においては、城内数箇所の清真寺（モスク）及びイスラーム經書店において中国ムスリム書法・經堂教育関連の資料・情報収集を行ったのに加え、我々一行を迎えての座談会が陝西師範大学西北環境中心主宰で行われた。概容は以下の通りである。

（ ）日時：2007年3月8日10：00～12：00

（ ）場所：陝西師範大学文化科研棟三階報告室

（ ）陝西師範大学側の主たる参加者：侯甬坚（西北環境中心主任教授）、阎东凯（陝西師範大学歴史文化学院講師）、王欣（同西北民族研究中心副主任教授）、李琪（同西北民族研究中心教授）、韩中义（同西北民族研究中心研究员）、王晓如（西安文理学院歴史系主任教授）、李喜霞（西安文理学院歴史系助教）。

（ ）内容：侯教授の司会で行われ、吉澤がNIHUイスラーム地域研究の紹介と日本における西北近代史の研究状況についての報告を行った後、黒岩が「小経」について、青木・佐藤は「回儒」及び「回儒の著作研究会」の活動についての報告を行った。吉澤の報告に対しては日本の歴史学の方法論に対する質問がよせられ、黒岩の報告に対しては別の視覚からの反論・補足が韓研究員からあったのに加え、青木、佐藤の報告に対しては学際的研究の方法論についての質問が寄せられた。大学院生を含め50人近くが集ったこともあり、活発に議論が交わされた。

侯教授からの我々の研究活動に対する協力申し出で締めくくられたことを含め、極めて有意義な座談会であったと考えられる。貴重な機会を与えてくださったコーディネーター役の侯教授、及びご参加いただいた陝西師範大学・西安文理学院の先生方にこの場をかりてお礼申し上げたい。

鎮江では、鎮江城西清真寺において中国ムスリム書法と経堂教育についての聞き取り調査を行った。また、滞在中に江南四大清真寺の一つである揚州仙鶴寺訪問した。

総括：

中国ムスリム書法関連の情報・資料収集については、期間に比して十分な成果をあげられたものと考えられる。ただし、独自の中国三一体（スルス体に独特の改変を加えたもの）一つをとっても、流派・作家により風合い、使用道具などが異なることが確認され、より多くの作家に対するインタビューの必要が実感された。一方、経堂教育・清真寺蔵書調査については、個々の訪問地おける滞在日数が少なかったこともあり、準備調査にとどまった。今後は、個々の地区に腰を据えて、インタビュー・資料収集を行っていきたい。

なお、西北各省では再開発の中でムスリム集住区がかなりの度合いで再現されている（もちろん例外も確認される）のに対し、江南の再開発ではそうした配慮は希薄であり、ムスリム・コミュニティ維持が難しく、経堂教育の継続が危ぶまれる現状が再確認された。

（黒岩 高）

在日経験を有するムスリムを対象とした質問紙調査のオブザーブ、およびパハン州都

クアンタンにおけるモスク、イスラーム団体・組織を対象とした聞き取り調査

日時：2007年3月2日（金）～2007年3月10日（土）

国名：マレーシア

調査地：クアンタン、クアラルンプール

概要：

本調査の目的は、在日経験を有するムスリムを対象とした質問紙調査の実施に関する打ち合わせ、およびマレーシア半島東部に位置するパハン州都クアンタンにおけるモスク、イスラーム団体・組織を対象とした聞き取り調査を行うことであった。

3月2日夜にクアラルンプール到着の後、翌日マレーシア半島東部にあるパハン州の都市クアンタンへと空路にて移動した。調査はクアンタン到着の翌日から2日間に渡って行われた。調査モスク（およびスラウ）はあらかじめクアラルンプールで入手した地図を元に選定されたが、クアンタンでのモスクに関連した聞き取りの結果を考慮し、地域の拠点となっており多くの人々が訪れるモスクを重点的に調査した。調査モスクは以下の通り。

調査モスク及びムサッラー：

3月4日 Masjid Tanjung Mahkota

Masjid Tengku Ampuan Afzan

Masjid Tanjung Lumpur

Masjid Al-Falah

Masjid Al-Fattah

Masjid Al-Hidayah

Masjid Kariah Perkampungan Tanjung Api

Masjid Saidina Ali Bin Abi Talib

Masjid Saiyidina Othman Ibnu Affan

Masjid KIPSUS

Surau 1

3月5日 Masjid Saidina Umer Al-Khatab

Masjid Negeri Sultan Ahmad 1

Surau 2

クアンタンにはパハン州立モスク（Masjid Negeri Sultan Ahmad 1）があり、それに隣接する形で PUSAT KUTIPAN ZAKAT が位置する。PUSAT KUTIPAN ZAKAT では、Haji Halidan Bin Md Daud 氏と面会し、日本のムスリム社会の現状を報告するとともに、クアンタンにおけるモスクおよびイスラーム団体・組織に関する現状について話を伺った。とりわけ、日本においても活動の盛んなタブリーギー・ジャマーアトの活動について、各国から当地への来訪の状況などについて話を伺うことができた。同時に、Malaysia Chinese Muslim Association の副会長である Azizi Robbaani Goh Abdullah 氏に話を伺った。とりわけ、日本のムスリム社会の状況を考察する上で有意な情報となる、他民族からの改宗の現状と Malaysia Chinese Muslim Association の活動、および改宗したムスリムの家庭におけるイスラーム教育に関して話を伺った。

3月6日以降は、再びクアラルンプールに戻り、昨年から継続中の下記のような活動について、補足調査などを行った。

タブリーギー・ジャマーアトの活動が盛んなモスクを訪問した。具体的には、クアラルンプール近郊の Sri Petaring に位置するマルカズ（以下 Sri Petaring マルカズ）である。本モスクの選定理由は、マレーシアにおけるタブリーギー・ジャマーアトの活動の拠点となっているマルカズであること、および、留学・研修などによって在日経験を有するムスリムが少なからず本マルカズを訪れるということによる。本マルカズでは、付随する施設の説明を受けモスクの概要を伺うとともに、在日経験を有するムスリムを対象として、彼らの在日経験とイスラーム活動、帰国後の活動について、話を伺った。彼らの語りにおいて、日本滞在中に初めて活動にコミットし、帰国後も活動を継続するというケースが見られるという点は非常に興味深いものであった。

マラヤ大学の Hj. Zaid Hj. Mohd Zin 氏と面会し、マラヤ大学から日本への留学生の派遣状況と、

帰国後のネットワークについて話を伺った。また、質問紙調査への協力を依頼している ALEPS (東方政策留学生同窓会) 理事長の Zaba Hj Youn と面会し、質問紙調査の進捗状況について連絡を行った。本調査は、郵送調査法によって実施されており、ALEPS からは質問紙を送付する住所の提供を受けている。マラヤ大学において、本調査の共同研究者である Ng Sor Tho 氏から、調査の実施状況について連絡を受けた。質問紙の回収状況などを鑑み、今後の作業の進め方について意見交換を行った。

(石川基樹・岡井宏文)

北陸地方に位置する 2 つのモスクを対象とし、(1) モスクの現状および活動の実態、
(2) イスラームのネットワークと中古車業のネットワークの関連性を調査すること。

日時 : 2007 年 3 月 19 日 (月) ~ 2007 年 3 月 23 日 (金)

調査地 : 富山 新潟

3 月 19 日 富山モスク

3 月 20 日 富山のパキスタン人中古車業者のオフィス、富山モスク

3 月 21 日 新潟モスク

3 月 22 日 新潟モスク

3 月 23 日 帰京

概要 :

本調査の目的は、北陸地方に位置する 2 つのモスクを対象とし、() モスクの現状および活動の実態、() イスラームのネットワークと中古車業のネットワークの関連性を調査することであった。具体的な調査地は、富山県小杉町に位置する富山モスクと、新潟県太郎代に位置する新潟モスクである。現在、日本には約 40 のモスクが分布しており、それらは各地のムスリムが中心となって設立されてきた。設立活動の中心的役割を担うメンバーの属性は、地域によって異なるが、本調査が対象とする上記のモスクは、とりわけ当地で中古車輸出業に携わるムスリムが中心となって設立されたものである。富山では、モスクの位置する国道 8 号線沿いに約 250 社の中古車業者のオフィスが存在し、約 500 名のパキスタン人が業務に携わっている。同様に新潟モスクも中古車業者のオフィスが多い地域にモスクが設立されている。両モスクとも、オフィスからのアクセシビリティを考慮して設立された経緯があり、かつ住宅地域には位置していない。富山の例から見て取れるように、比較的狭い地域に、オフィスが集中し、かつそこで働く人々にとっての利用しやすさを考慮した立地条件となっている。そのため、モスクに礼拝に訪れる人々の多くは中古車業者で占められている。本調査では、このような両モスクの特性に注目したうえで、上記のような目的を設定した。

実際の聞き取り調査における主な質問項目は、以下のとおりである。

1. 目的 () に主に関連する項目

モスクに集う人員の流動性、日本人・日本社会との交流の有無、新しい活動の有無、他地域のムスリムのモスク設立活動への援助活動の有無

2. 目的（ ）に主に関連する項目

地域内における同業者コミュニティとムスリムコミュニティの関連性について、新規従業員の獲得経路、同国人あるいはムスリムを対象とした起業サポートとその論理について

1. の質問項目に関しては、およそ2年前に今回の質問項目と部分的に重複する基礎的な調査を行っている。今回の質問項目は、対象をモスクのみに限定せず、モスクとそれを構成するムスリム、および日本社会との関わりなど、事象を総合的に捉える手がかりを得ることに重点をおいている。なお、以上のような質問項目のほか、数名の中古車業の経営者を対象として、彼らのライフヒストリーの語りからも上記の問題に迫った。各地域での詳細な活動内容は以下を参照されたい。

3月19日

昼に富山モスクに訪れる。地元の中古車業者 K 氏の事務所に招かれる。夕方に再びモスクを訪れ、マグリブの後に富山モスクのイマームの自宅でインタビューを行う。氏は中古車を、地方を回り個人から買い取っている。来日当時は現場労働のアルバイトをしていたが、3年前から始めた中古車ビジネスで今ではマンションを買い、先日さらにもう一室マンションを買ったという。しかし日本では外国人の社会的信用が低いという。またお花茶屋モスクの設立に際して、バングラデシュ人を中心に建設資金を用意するため、収入の8割を皆が寄付していた事を聞く。イスラームでは、神は信仰にどれだけ犠牲を払ったかを見ているという。また氏が以前、バングラデシュ人の男性に中古車ビジネスの開店資金やノウハウまで準備した話を聞く。氏は困った人であれば同国人でなくとも、ムスリムでなくとも、関係なく助けるという。

3月20日

昼に地元の中古車業者 S 氏の事務所に招かれ、インタビューを行う。氏の会社はロシアを中心に中古車を販売しており、昨年の売り上げは33億円である。銀行からの信用もあるが、オークションの登録に際しても外国人は日本人の保証人を立てなければならないこともあり、会社の実績から保証人が不要と認めてもらったうえで取引先を開拓しているという。氏はパキスタンのカレッジ(2年制の学校)を卒業後、来日して、結婚を期に就職、しかし信仰上の信条と日本的文化の対立から、退社を余儀なくされた。退社後にふとしたきっかけから中古のトラックを友人に売った事から中古車業に携わるようになった。その後順調に会社の規模を大きくして現在に至るという。これまで沢山の偶然から成功したが、それらを氏は神の助けという(その際には携帯電話やモスクでの出会いによってビジネスに発展したケースがあり、それを氏は神の助けと表現していた)。また困っている人を助けるイスラームの助け合いの意識に関して話を聞いた所、困っているひとがいたら助けると、神からご褒美がくいるというイスラームの考え方を教えてくれた。氏は先日も、事故を起こしたマレーシアの留学生に代わって、被害者の日本人と加害者のマレーシア人両方の面倒を見たという。

氏は、「貯金を返す気持ち」で、神が自分にしてもらったことを忘れないという。また富山コーラン事件に関しても、本来は犯人個人との問題なのに、国や外国人批判にまでつながる恐れがあるといい、実際に騒いでいるムスリムの中には信仰に不熱心な信者もいるという。現在、警察、地域の自治会と中古車業者の間では特定の関係を有しているが、それ以上の域を出ておらず、一般の日本人社会との関係の構築はこれからの課題だという。氏が繰り返し、日本に良くしてもらったから、自分もお返ししたいと言っていたのが印象的だった。

その後夜に、イマームの自宅で再びインタビューを行う。氏は、先日のバングラデシュ人の男性以外にも困っている人を中古車業に引き入れ世話する事で助けているが、相手に裏切られることもあるという。また先日、自身が外国人であるという理由で日本人業者から販売を拒否された事や、それでも富山は東京よりも外国人に対する差別感情が少ない事を聞いた。氏はビジネスのノウハウを助ける相手に教えるが、一般的に、自分の商売の秘密は相手に教えないのが普通であるといい、ビジネスはビジネス、イスラームはイスラームで割り切るドライさを持ち合わせながらも、困った人がいると助けることもあるという。

3月21日

マグリブの後に新潟モスクを訪れる。2年前に訪れた際のアミールは4月にパキスタンに帰国してしまうとの事でアミールを辞め、現アミールを紹介される。前イマームは急用があったため、十分な時間は取れずインタビューは翌日に持ち越した。

3月22日

昼に新潟モスクを訪れる。前アミールと現アミールの両氏にインタビューを行う。イスラームでは金銭や社会的地位よりも、性格や他者との関係、またイーマーン（信仰）のレベルで、相手を信用するという。金銭の貸し借りにおいて利子を取る事は許されないが、資金を提供する事で損得両方を受け持つ事は許されるという。イスラームの考え方では、誰にも知られずに寄付することが望ましいとされ、モスク設立資金の調達に関しても、振込時に名前を出さずに入金するという。モスク設立資金が期日の前日に不足分を誰かが出資するケースがあるが、最後に出資する人は、資金が間に合わなかったら自分が残りを出すと決めているという。

また将来的に、新潟モスクでイスラミック・コンプレックスを設立する計画であるという。全て計画済みだが、まだ正式には発表できないという。1階を駐車スペース、2階を男性用、3階を女性用礼拝スペースと図書館にして、基本的な教育も受けられる様にしたいという。北陸エリアをカバーするものにしたいという。

（岡井宏文・北爪秀紀）

東京大学大学院人文社会系研究科・次世代人文学開発センター・

イスラーム地域研究部門

代表：小松 久男（東京大学大学院人文社会系研究科・センター流動教員）

テーマ 『イスラームの思想と政治：比較と連関』

本拠点は、中央ユーラシアと中東を主要な研究対象とし、18世紀以降の近現代における思想と政治の動態にみちた相互関係を比較と連関の視点から実証的に研究する。研究部門は、相互に連携する二つの研究グループからなる。研究グループ1「中央ユーラシアのイスラームと政治」は、1991年のソ連解体後により研究が可能となった「新しい」イスラーム地域（中央アジア、コーカサス、ヴォルガ・ウラル地方）と中国新疆に注目し、この地域の構造と動態に関する基礎研究を蓄積するとともに、中央ユーラシア地域研究の手法を開発することを目標とする。研究グループ2「中東政治の構造変容」は、中東政治の複雑な動態を考察するために、パレスチナ問題という地域全体の安定に関わる問題、民主化のような各国の体制変革に関わる問題、そしてこのような政治変動の底流を形成する基層社会の変容の問題、以上3つの視点から中東政治の重層的な構造を総合的に把握することを目的とする。

【研究事業名】

研究グループ1「中央ユーラシアのイスラームと政治」

小松久男（東京大学人文社会系研究科・センター流動教員）

研究グループ2「中東政治の構造変容」

長沢栄治（東洋文化研究所教授・センター流動教員）

【拠点形成の目的と意義】

本研究科は、これまでアジア文化研究専攻を中心として西アジア・中央アジア地域の歴史およびイスラームの思想と文化を研究する大学院生を育成し、日本のイスラーム研究を支える多くの若手研究者を送り出してきた。当該分野に関する博士論文も質量ともに確実に向上している。また、東洋文化研究所の蔵書などを合わせると、学内には日本でも有数の、相当量の関係文献資料が蓄積されている。今回の拠点形成は、このような実績をふまえた上で、これまでになかった現代性を意識したイスラーム地域研究を立ち上げることにより、新しい研究領域の開拓をめざすとともに、従来の歴史、思想、文化研究に新しい展望を開くことを目的としている。そのために付属次世代人文学開発センター（以下、センターと略）内に創設されるイスラーム地域研究部門に研究科の内外から専門研究者を招き、具体的な研究プロジェクトを実践・展開する中で若手研究者の育成をめざしたい。また、プロジェクト研究の成果を大学院教育に還元することを計画している。

【組織】

(研究拠点構成員)

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 (担当研究テーマ)
小松 久男	東京大学大学院人文社会系研究科・教授 次世代人文学開発センター(以下センターと略)・流動教員	研究拠点および研究グループ1代表(研究の総括)
新免 康	中央大学・文学部・教授 センター・客員教員	研究グループ1研究分担者(ウイグル・ナショナリストの思想)
Timur Dadabaev	筑波大学大学院・人文社会科学研究科・助教授 センター・客員教員	研究グループ1研究分担者 (ソ連時代の記憶プロジェクト)
長沢 栄治	東京大学東洋文化研究所・教授 センター流動教員	研究グループ2代表者 (研究の総括)
臼杵 陽	日本女子大学文学部・教授 センター客員教員	研究グループ2研究分担者 (パレスチナ問題の総合的研究)
大稔 哲也	東京大学大学院人文社会系研究科・助教授 センター流動教員	研究グループ2研究分担者 (中東における基層社会の変容)

【平成18年度事業の目的と活動内容】

1.今年度事業の目的

初年度の今年度は、まず次世代人文学開発センター内にイスラーム地域研究部門を創設し、ここに研究科の内外から専門研究者を拠点構成員として招き、具体的な研究プロジェクトを実践・展開する中で若手研究者の育成をめざすこととした。上記の「センター流動教員」とは東京大学の専任教員であって一定期間センターの研究に従う教員であり、この3名の流動教員に教授会の承認を得た3名の客員教員が加わって、拠点構成員メンバーを確定した。さらに人間文化研究機構から本拠点に派遣される研究員については、2006年12月～2007年1月に公募を行い、選考の結果、濱本真実氏(日本学術振興会特別研究員・東京大学)を平成19年4月1日からセンター研究員として迎えることになった。なお、2007年度からセンターには客員研究員を受け入れることが可能となったので、今後はこの制度を活用して若手研究者の参加を促すことにしたい。

2.今年度事業の内容

(1)拠点整備

イスラーム地域研究部門のスペースとしては、研究科の許可を得て、かつて文部科学省科学研究費創成的基礎研究による「現代イスラーム世界の動態的研究」(1997年4月～2002年3月)の中心拠点となった文学部アネックス内のスペースを設備備品とともにほぼ継承することができた。これは、拠点および研究グループ1の事務室兼研究室、研究グループ2の同じく事務室兼研究室、そしてセンター研究員室の3室からなり、ここに最新のコンピュータをはじめとする研究事務機器を備えた。また、本拠点における研究状況と成果を公開するウェブサイト <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/>は、2006年10月に立ち上げ、以来コンテンツの充実と更新に努めている。英語版については来年度以降の課題としたい。以上により、本拠点における今後の研究事業を行うにふさわしい体制を整えることができたと考えている。

(2)研究会活動

拠点としては、2006年10月8日に法文1号館内で初年度の全体集会を開催し、イスラーム地域研究に関する全体的な説明に続いて、2006年度の研究計画を解説し、研究分担者と研究協力者の紹介を行った。その後、研究グループごとの分科会を開き、研究計画の細部について協議を行った。この全体集会は基本計画の確認と研究協力者の確定の両面で有益であった。研究グループ1としては、5回の中央ユーラシア研究会を開催したほか、2006年11月には国際ワークショップ「新疆・中央アジアにおけるウイグル人の社会・文化と民族アイデンティティ」を共催した。研究グループ2としては、海外から招聘した専門家アフマド・サアディー氏(中心拠点による招聘)による連続セミナーをはじめとし、パレスチナ班、中東社会班あわせて、合計17回の研究会を開催した。

(3)海外派遣・調査

研究グループ1としては、2006年9月ミシガン大学で開催された中央ユーラシア学会 Central Eurasian Studies Society 第7回年次大会への参加の他、ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、ロシア、中国新疆などに、研究分担者および協力者を調査などのために派遣した。研究グループ2としては、トルコ共和国、エジプト・アラブ共和国に、3名の協力者を、資料収集やインタビューなどのために派遣した。

(4)外国人研究者の招聘

今年度は、拠点としての外国人研究者の招聘は実施しなかった。

(5)資料収集

研究グループ 1 では、ロシア帝政末期から 1918 年にかけて出版されたロシア・ムスリムに関する新聞・雑誌を 11 点収集し、そのほとんどをデジタル化して保存と利用の便をはかった。研究グループ 2 では、*Journal of Palestine Studies* の収集を行うとともに、オックスフォード大学セント・アントニー校中東研究センターが所蔵している英国教会によるエルサレム・東方ミッションの覚書、報告、通信、財務記録などのマイクロ資料を CD-ROM 化した。

(6)研究成果・発表（論文・図書）

研究成果の詳細は、各グループの項を参照されたい。

研究グループ1：「中央ユーラシアのイスラームと政治」

【組織】

（研究グループ1メンバー）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 (担当研究テーマ)
小松 久男	東京大学大学院人文社会系研究科・教授 センター・流動教員	研究拠点および研究グループ1 代表（研究の総括）
新免 康	中央大学・文学部・教授 センター・客員教員	研究グループ1 研究分担者（ウイ グル・ナショナリストの思想）
Stéphane A. Dudoignon	CNRS 研究員	研究グループ1 研究分担者 (再イスラーム化の展開)
Timur Dadabaev	筑波大学大学院・人文社会科学研究科・助教授 センター・客員教員	研究グループ1 研究分担者 (ソ連時代の記憶プロジェクト)

（研究グループ1 研究協力者）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	担当研究テーマ
Bakhtiyar Babadjanov	ウズベキスタン東洋学研究所・主任研究員	再イスラーム化の展開
宇山 智彦	北海道大学・スラブ研究センター・教授	ソ連時代の記憶プロジェクト
岡 奈津子	アジア経済研究所・研究員	ソ連時代の記憶プロジェクト
小沼 孝博	日本学術振興会・特別研究員（東京大学）	再イスラーム化の展開
河原 弥生	日本学術振興会・特別研究員（東洋文庫）	近現代フェルガナ地方の動態
後藤 寛	横浜市立大学国際総合科学部・助教授	近現代フェルガナ地方の動態
清水由里子	中央大学大学院・博士課程	ウイグル・ナショナリストの思 想
野田 仁	東京大学大学院・博士課程	再イスラーム化の展開

濱本 真実	日本学術振興会・特別研究員（東京大学）	再イスラーム化の展開
-------	---------------------	------------

【平成18年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

初年度は、まず中央ユーラシア研究会を指導する一方、2006年10月8日に拠点としての全体集会を開催して第一次研究計画を確認するとともに、研究協力者をほぼ確定した。その後、拠点メンバーと研究協力者の協議を重ねて具体的な研究計画の練り上げを進めた。その結果は、2007年度の研究計画に反映されている。海外の研究者に対しては、中央アジアでの現地調査や9月末にミシガン大学で開催された第7回 Central Eurasian Studies Society 年次大会などの機会を利用して、本プロジェクトへの参加と協力をよびかけた。5つの研究テーマごとの事業概要は、以下のとおりである。

研究テーマ1「近現代中央アジアにおける再イスラーム化の展開」に関しては、この分野の第一人者、ウズベキスタン東洋学研究所のB.パバジャノフ研究員とともに研究・出版計画を策定し、これに従って資料と情報の調査・収集に着手した。また、18世紀帝政治下のタタール・ムスリムの動向に関する史料調査のために研究協力者をモスクワの文書館・図書館に派遣した。

研究テーマ2「20世紀初頭中央ユーラシアにおける定期刊行物の総合的研究」に関しては、「資料収集」の項目に挙げた新聞・雑誌（マイクロフィルムとマイクロフィッシュ）の収集とデジタル化を行ったほか、国内に所在する定期刊行物の調査・確認を行った。とりわけ、島根県立大学には1935-1945年間に満州国の奉天で刊行されたタタール語の週刊新聞『民族旗 *Milli Bayraq*』のほぼ完全なコレクションが存在している。これは、ロシア革命後ここに成立した亡命タタール・ムスリム・コミュニティの動向のみならず、彼らのナショナリズムとイスラームとの関係、あるいは日本の対ムスリム政策を検討する上でも貴重な第一次史料であり、その保存のためにデジタル化を行った。また、この新聞を用いた最新の研究成果については、後述の第5回中央ユーラシア研究会で報告を受け、幅広い質疑応答が行われた。

研究テーマ3「ウイグル人ナショナリストの思想と活動に関する総合的研究」については、まず国際ワークショップ「新疆・中央アジアにおけるウイグル人の社会・文化と民族アイデンティティ」を共催し、ウイグル・アイデンティティについてカザフスタン、中国、米国などの専門研究者と討議を行った。この成果は、英文論文集として刊行を予定している。次に、ウイグル近代史に関する重要な写本史料、ホージャ・ムハンマド・シャリーフ著『ターリーヒ・ラシーディー』附編の研究を進め、解題を付したテキストの刊行を準備した。これも近刊を予定している。また、新疆で新たに公開された関連文書史料を調査するために研究協力者を現地に派遣した。

研究テーマ4「近現代フェルガナ地方の動態に関する総合的研究」については、地理情報システム（GIS）による19-20世紀のフェルガナ地方の人口動態と民族分布の解析を行うためのデータ整理と

解析方法の吟味を行った。予備的な考察は来年度に公刊を予定している。また、フェルガナ地方とその周縁地域の民間所蔵文書を活用する「18-19 世紀東西トルキスタンのイスラーム指導者とムスリム住民の広域的活動に関する基礎研究」と題する研究計画を策定した。これは来年度から 3 年間の予定で実行する予定である。

研究テーマ 5「ソ連時代の記憶プロジェクト」については、とくに現地の研究者との緊密な協力と連携を必要とするため、初年度から現地で共同研究の打ち合わせを行うとともに聞き取り調査に着手した。具体的には、ウズベキスタン（タシュケント）の世界経済外交大学に所属する研究者と共同して、インタビューの内容と方法を含む具体的な計画を吟味し、予備調査の一環としてサマルカンドおよびブハラ地方で現地調査を行った。タジキスタンとキルギス両国については、今回は相手先研究者の特定を第一の課題とし、ドゥシャンベとビシケクにおいて研究者と面談するとともに、キルギス-トルコ・マナス大学では共同研究の可能性について協議を行うことができた（詳しくは海外派遣の項を参照）。

2. 研究活動の記録

(1)研究会活動

第 1 回中央ユーラシア研究会

日時：2006 年 7 月 26 日

場所：東京大学法文 1 号館 217 教室）

報告者・報告題目：

Munisa Bakhronova（東京大学大学院総合文化研究科修士課程）

「ウズベキスタンの言語政策と民族意識：学校教育現場の実態から」

第 2 回中央ユーラシア研究会

日時：2006 年 9 月 16 日

場所：東京大学山上会館中会議室

報告者・報告題目：

1) Sebastien Peyrouse（北海道大学スラブ研究センター研究員）

"Managing religion in Central Asia: the continuity of the Soviet conceptual framework"

2) Marlene Laruelle（北海道大学スラブ研究センター研究員）

"The return of the Aryan myth: Soviet and Post-Soviet Tajikistan in search for a national ideology"

第3回中央ユーラシア研究会

日時：2006年10月8日

場所：東京大学山上会館中会議室

報告者・報告題目：

Muzaffar Olimov (Director, Research Center Sharq, Tajikistan)

"Islam in current Tajikistan: religion and education"

概要：タジキスタンの民間研究センター「シャルク」を率いるオリモフ氏は、現代タジキスタンの政治とイスラームに関して多数の論考を発表しているが、東大拠点の全体集会に合わせて行われた公開講演では、内戦終結（1997年）後の宗教教育の現状について、シャルクによる最近の社会調査の結果を含めて概括的な説明をされた。

第4回中央ユーラシア研究会

日時：2006年12月9日

場所：東京大学法文1号館217教室

報告者・報告題目：

立花優（北海道大学大学院博士課程）

「アゼルバイジャンの政治体制：新アゼルバイジャン党を中心として」

概要：立花氏の発表は二部構成で、第一部は「新アゼルバイジャン党と政治体制」と題して、与党新アゼルバイジャン党の成立と組織を概説したうえでヘイダル・アリエフの強権的な大統領体制を解析した。また、第二部は「政治エリートの変遷を検証する」と題して、1991年以降に発生した政権交代と共和国の党、行政府ならびに有力国営企業の人事交代との関係からアゼルバイジャンにおける人脈政治の特徴を考察した。

第5回中央ユーラシア研究会

日時：2007年2月17日

場所：東京大学法文1号館214教室

報告者・報告題目：

1) バフティヤール・イスマーイール（京都大学文学研究科博士後期課程）

「中国社会科学院民族研究所に所蔵されるチャガタイ語、ペルシア語写本について」

2) ウスマノヴァ・ラリサ（島根県立大学北東アジア研究科博士後期課程）

「日本におけるチュルク・タタール移民コミュニティの生活：Milli Bayraq紙を資料として」

概要：第一の報告者バフティヤール氏の報告は、氏が2006年夏に実施した調査にもとづき、中国社会科学院民族学・文化人類学研究所（旧民族研究所）所蔵のチャガタイ語・ペルシア語写

本の規模と内容を網羅的かつ具体的に紹介するものであり、極めて価値の高い報告であった。第二の報告者は昨秋、島根県立大学で博士号を取得されたばかりのウスマノヴァ氏であり、今回の報告は、氏の博士論文 "An Historical Account to the Process of Turk-Tatar Diaspora Consciousness in North East Asia between 1898 and the 1950s"に基づいている。報告の内容は、地方都市も含めた在日テュルク・タタール・コミュニティの歴史を、彼らの活動が最も盛んだった1920-30年代を中心に通観するものであった。

(2)海外派遣・調査

「ソ連時代の記憶プロジェクト」聞き取り調査

期間：2006年8月4日～19日

国名：ウズベキスタン（タシュケント）、タジキスタン（ドゥシャンベ）、キルギス（ビシュケク）

参加者：ティムール・ダダバエフ（筑波大学大学院人文社会科学系研究科・助教授）

概要：

中央アジア地域におけるソ連時代の記憶プロジェクトの一環として、中央アジア諸国において、聞き取り調査および現地の研究者との意見交換を行った。ウズベキスタンでの調査は、第一段階で50人の回答者へのインタビューに基づいて日常生活を分析し、第二段階では特に興味深い人生を送った一般人15人へのインタビューをもとに彼らのライフストーリーを作成することにした。この調査は、ウズベキスタン外務省付属世界経済外交大学のラフモノフ教授とジュラエフ助教授との共同研究として行われた。タジキスタンのドゥシャンベでは、現地滞在中の研究分担者、S.ドウドワニョンと協議した後、民間研究機関シャルク研究所所長のM.オリモフおよびS.オリモワ研究員と、本プロジェクトのタジキスタンにおける実行可能性について話し合った。キルギスのビシュケクでは、キルギス・トルコ・マナス大学を訪ね、セビンチ副学長と今後の共同研究の可能性について意見交換を行った。

モスクワにおける文献調査

期間：2006年9月17日～10月5日

国名：ロシア（モスクワ）

参加者：濱本真実

概要：

調査の目的は、18世紀ロシアの正教化政策と東方政策の狭間にあったタタール人に関する史料と文献の収集であった。ロシア国立古文書館においては、おもにF. 248 Senat i ego uchrezhdeniia（セナートとその諸機関）Op. 14, Kniga 803を閲覧・筆写した。この資料は、1720年代後半から1750年代まで、ロシアにおいてムスリムに対する弾圧が最も激しかった時期に、ムスリムに関する諸問

題についてロシア政府が作成した史料である。ロシア国立図書館、歴史図書館においては、*Materialy po istorii Bashkirskoi ASSR*. Moskva-Leningrad. Ch. 1 (1936), T. 3 (1949), T. 4. Ch. 1-2 (1956), また、*Polnoe sobranie postanovlenii i rasporyazhenii po vedomstvu pravoslavnogo ispovedaniia Rossiiskoi imperii*. T. 3 (1746-1752 gg.) SPb. 1912 などの公刊史料や、Vitevskii, V. N. *Nepliuev i Orenburgskii krai v prezhnem ego sostave po 1758 g. Istoricheskaia monografiia*. Vyp. 1-4 (1889-1897) 等、重要研究文献を閲覧・複写した。

中央ユーラシア学会 Central Eurasian Studies Society (CESS) 第7回年次大会への参加

期間：2006年9月28日～10月1日

国名：アメリカ合衆国

参加者：小松久男（東京大学）、小沼孝博（日本学術振興会特別研究員・東京大学）

概要：

今回の出張の目的は、小松がセッションの司会、小沼が研究報告を行うほか、海外の中央ユーラシア研究者と情報を交換し、あわせてイスラーム地域研究における共同研究の可能性を探ることになった。その結果、日本の中央アジア研究に対する海外での関心は高いことがあらためて確認され、Adeeb Khalid 助教授 (Carleton College)からは、Social Science Research Council のために日本における中央ユーラシア・ムスリム地域に関する研究動向のレポート作成の依頼、また Ron Sela 助教授 (Indiana University)からは日本における中央アジア史研究の成果を英語で刊行するプロジェクトの提案を受け、いずれも2007年度の研究計画に盛り込むことになった。

ウズベキスタンにおける研究打ち合わせ・資料収集

期間：2007年3月16日～21日

国名：ウズベキスタン（タシュケント）

参加者：小松久男（東京大学）、ティムール・ダダバエフ（筑波大学）

概要：

この出張では、まず第1に研究テーマ5「ソ連時代の記憶プロジェクト」について、これまでに行ったウズベキスタンにおける聞き取り調査の結果をふまえて、回答に見られる主要な傾向と方法上の問題点について現地の研究協力者と議論を交わし、今後のとりまとめについて協議を行った。第2に、研究テーマ1「近現代中央アジアにおける再イスラーム化の展開」について、研究協力者のB.ババジャノフ氏（ウズベキスタン東洋学研究所）から研究進捗状況の説明を受けるとともに、収集資料の提供を受けた。とりわけ、1920年に無神論・反イスラーム宣伝を目的に刊行された『ムシュトゥム』などのソビエト雑誌は、資料的な価値のきわめて高いことを確認した。また、Central Asian Research Series の刊行についても計画を立案した。以上に加えて、近刊の研究書を中心に資料

を収集した。

新疆ウイグル自治区档案馆における資料調査

期間：3月11日～24日

国名：中国（ウルムチ）

参加者：清水由里子（中央大学博士課程）

概要：

今回の調査の目的は、中国、ウルムチ市の新疆ウイグル自治区档案馆において、資料調査を行うことであった。自治区档案馆のアーカイブは、新疆の特殊な政治状況から、従来外国人の閲覧が不可能であったが、昨年夏、内陸アジア史学会との取り決めに従って、その会員に限り、資料の利用が可能になったという経緯がある。調査者は昨夏の予備調査に続いて、今回も資料の調査・閲覧を行い、档案馆所蔵資料のなかに、中華民国時期の新疆政府の教育に関する政策や、当時の各地における少数民族の教育・文化的状況をうかがい知ることができる档案が少なからず存在していることを確認するとともに、その重要なものについては筆写を行った。

(3)国際ワークショップの開催

International Workshop: Uyghur Society, Culture and Ethnic Identity in Xinjiang and Central Asia

（「新疆・中央アジアにおけるウイグル人の社会・文化と民族アイデンティティ」）

日時：2006年11月25日～26日

会場：LMJ ジャパン東京研修センター・3F 大会議室

報告者・報告題目：

- 1) アブレト・カマロフ（カザフスタン共和国教育科学省東洋学研究所）“The Uyghur national history in the beginning of the 20th century: Nazarghoja Abdusemiatov (Uyghur balisi) and his historical works”
- 2) ショーン・ロバーツ(ジョージタウン大学) “Imagining Uyghurstan: The Bolshevik Revolution and the making of the modern Uyghur nation”
- 3) 清水由里子(中央大学大学院博士後期課程) “On the new educational movement of the Uyghurs in Kashghar in the 1930's”
- 4) 王建新(中国中山大学) “Islamic education in the Republican Turpan”
- 5) 藤山正二郎(福岡県立大学) “Medical pluralism in the Uyghur, Hotan, China”
- 6) 新免康(中央大学) “Uyghur cultural movements in 1980s and 1990s in Xinjiang”
- 7) 岡奈津子(日本貿易振興機構・アジア経済研究所) “Control of Ethnic Movements in Kazakhstan: A case of Uyghurs”

概要：本会議は、当グループと、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 A「中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究」を共同主催者として開催された。2 日間にわたった会議は 4 セッションから構成され、発表者は全体で 9 名(うちペーパーによる発表が 2 名)であった。出席者数からいえば規模の小さい会議であったが、本会議では、新疆とカザフスタンのウイグル人の歴史・社会・文化について考究している第一線の研究者達が場を同じくし、最新の研究成果の提示を行い、情報交換と議論を進めることができたといえる。本会議の成果として、2007 年度に英語論文集の刊行を予定している。

(4)資料収集

研究グループ 1 では、ロシア帝政末期から 1918 年にかけて出版されたロシア・ムスリムに関する新聞・雑誌を 11 点収集し、そのほとんどをデジタル化して保存と利用の便をはかった。

	タイトル	編者	出版地	出版年
	<i>Molla Nəsrəddin</i>		チフリス	1906
	<i>Musul'manin</i>	Magomet-Bek Khajetlashe	パリ	1908
	<i>Mir Islama</i>	V. Bartol'd	ペテルブルク	1912-1914
	<i>Inorodcheskoe obozrenie</i>	N. Katanov	カザン	1912-1916
	<i>Musul'manskaia gazeta</i>	S. Gabiev & I. Shagiakhmetov	ペテルブルク	1912-1914
	<i>Izvestiia Vremennogo tsentral'nogo Biuro rossiiskikh musul'man</i>	ロシア・ムスリム 臨時中央ビューロー	ペテルブルク	1917
	<i>V mire musul'manstva</i>	Magomet Bek Khajetlashe	ペテルブルク	1911-12
	<i>Golos tatar</i>	クリミア・ムスリム 臨時執行委員会	シムフェローポリ	1917
	<i>Izvestiia vserossiiskogo musul'manskogo voennogo Shuro</i>	軍協議会 Voennoe Shuro	カザン	1917-1918
	<i>Musul'manskii mir</i>	ロシア科学アカデミー	ペトログラード	1917
	<i>Turkestarskii krai</i>		コーカンド	1916

(5)研究成果・発表(論文・図書)

〔論文〕計(14)件

著 者 名	論 文 標 題		
宇山 智彦	「クルグズスタン(キルギス)の革命： エリートの離合集散と社会ネットワークの動員」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『「民主化革命」とは何だったのか：グルジア、ウクライナ、クルグズスタン(21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集16)』		2006年	41-77

著 者 名	論 文 標 題		
宇山 智彦	「グルジア・ウクライナ・クルグズスタン三国「革命」の比較」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
『「民主化革命」とは何だったのか：グルジア、ウクライナ、クルグズスタン(21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集16)』		2006年	79-85

著 者 名	論 文 標 題		
Uyama Tomohiko	“A Particularist Empire: The Russian Policies of Christianization and Military Conscription in Central Asia”		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
<i>Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia (Sapporo: Slavic Research Center, March 2007)</i>		2007	23-63

著 者 名	論 文 標 題		
岡 奈津子	「カザフスタン：権威主義体制における民族的亀裂の統制」		
掲 載 誌 ・ 書 名	巻	発 行 年	ページ
間寧編『西・中央アジアにおける亀裂構造と政治体制(研究双書 No.555)』		2006年	211-248

著 者 名	論 文 標 題			
KOMATSU Hisao	"Bukhara and Kazan"			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ペ ー ジ
<i>Journal of Turkic Civilization Studies</i>		No.2	2006 年	101-115

著 者 名	論 文 標 題			
KOMATSU Hisao	"Muslim Intellectuals and Japan: a Pan-Islamist mediator, Abdurreshid Ibrahim"			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ペ ー ジ
<i>Intellectuals in the Modern Islamic World: Transmission, transformation, communication</i> (S.A.Dudoignon, H.Komatsu, and Y.Kosugi eds)			2006	273-288

著 者 名	論 文 標 題			
KOMATSU Hisao	"Khoqand and Istanbul: an Ottoman Document Relating to the Earliest Contacts between the Khan and Sultan"			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ペ ー ジ
<i>Asiatische Studies/Études Asiatiques</i>		LX-4	2006	963-986

著 者 名	論 文 標 題			
KOMATSU Hisao	"Dar al-Islam under Russian Rule As Understood by Turkestani Muslim Intellectuals"			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ペ ー ジ
<i>Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia</i> (UYAMA Tomohiko ed.)			2007 年	3-21

著 者 名	論 文 標 題			
清水 由里子	「カシュガルにおけるウイグル人の教育運動（1934-37）」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『内陸アジア史研究』		22 号	2007 年	未定

著 者 名	論 文 標 題			
新免康・河原弥生	「ブズルグ・ハーン・トラとカット・ケナガス村の墓廟」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『中央アジアのイスラーム聖地 - フェルガナ盆地とカシュガル地方 - 』			2007 年	未定

著 者 名	論 文 標 題			
Timur Dadabaev	"Political Cultures, Developmental Strategies and Public Support in Post-socialist Central Asian Societies: Analysis of Public Polls in Uzbekistan and Kazakhstan"			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
<i>Political Science in Asia</i>		Vol. 2, No.1	2006	71-100

著 者 名	論 文 標 題			
Timur Dadabaev	"Living Conditions, Intra-Societal Trust and Public Concerns in Post-Socialist Turkmenistan"			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
<i>Central Asia and the Caucasus</i>		No. 4 (40)	2007	122-132

著 者 名	論 文 標 題			
野田 仁	「カザフ・ハン国とトルキスタン—遊牧民の君主埋葬と墓廟 崇拝からの考察—」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『イスラム世界』		68 号	2007 年	1-24

著 者 名	論 文 標 題			
濱本 真実	「タタール商人の町カルガルの成立 - 18 世紀前半ロシアの 宗教政策と東方進出 - 」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『東洋史研究』		65-3 号	2006 年	550-582

〔図書〕計 (1) 件

著 者 名	出 版 社		
Uyama Tomohiko(ed.)	Slavic Research Center		
書 名		発 行 年	ページ
<i>Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia</i>		2006	ix + 376 pp

研究グループ2：「中東政治の構造変容」

【組織】

（研究グループ2メンバー）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 （担当研究テーマ）
長 沢 栄 治	東京大学東洋文化研究所・教授 センター流動教員	研究グループ2 代表者 （研究の総括）
臼 杵 陽	日本女子大学文学部・教授 センター客員教員	研究グループ2 研究分担者 （パレスチナ問題の総合的研究）
大 稔 哲 也	東京大学大学院人文社会系研究科・助教授 センター流動教員	研究グループ2 研究分担者 （中東における基層社会の変容）
松 本 弘	大東文化大学国際学部・助教授	研究グループ2 研究分担者（中東 の民主化と政治改革の展望）
Salim Tamari	Director, the Institute of Jerusalem Studies	研究グループ2 研究分担者 （パレスチナ問題の総合的研究）

（研究グループ2 研究協力者）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	担当研究テーマ
青 山 弘 之	アジア経済研究所・中東研究グループ研究員	中東の民主化と政治改革の展望
池田美佐子	光陵女子短期大学・助教授	中東における基層社会の変容
鈴 木 恵 美	東京大学東洋文化研究所・非常勤講師	中東の民主化と政治改革の展望
菅 瀬 晶 子	総合研究大学院大学葉山高等研究センター・上 級研究員	パレスチナ問題の総合的研究
間 寧	アジア経済研究所・中東研究グループ長	中東の民主化と政治改革の展望

【平成18年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

中東地域に安定した公正な政治秩序が形成されることは地域の人たちはもちろん世界全体の願いである。しかし、その道筋を見通すことは難しい。本研究グループは、中東政治の複雑な動態を考察するために、パレスチナ問題が代表する地域全体の安定に関わる問題、民主化のような地域各国の体制変革に関わる問題、そして以上の広域的、国家的レベルのはるか下方にあって政治変動の底流を形作る基層社会の変容の問題といった、中東政治の重層的な構造を総合的に把握することを目指す。

2006年度は、上記の課題に対して三つの研究班（1.パレスチナ問題、2.民主化、3.中東社会史）を編成し、それぞれの研究協力者を募り、研究計画を確定するとともに、研究情報の組織化の準備を進めた。パレスチナ班では、海外から招聘した専門家（Dr. Ahmad Sa'di, (Ben-Gurion University of the Negev, Israel)：中心拠点による招聘）による連続セミナーをはじめとする合計12回の研究会を開催して、将来のパレスチナ研究センターの設立に向けてのネットワーク作りに取りかかった。民主化班では、活動の第一段階として中東の民主化に関わる制度と運用の実態を国別に整理したデータベースを構築し、インターネット上で公開する体制を整えた。また比較政治学による理論研究を行なう研究会体制を準備した。中東社会史班では、海外調査を通じて伝統的諸産業に関する研究状況を把握するとともに、ポピュラー文化に関する研究会を開催し、研究情報の収集、社会史文書の共同研究の体制について検討を行なった。

2. 研究活動の記録

(1)研究会活動

グループ2第1回研究打ち合わせ会

日時：2006年10月8日

場所：東京大学法文1号館教室

概要：

東大拠点全体集会とともにグループ2合同研究打ち合わせ会を行ない、その後、パレスチナ班、中東民主化班、中東社会史班ごとに分科会を開き、年間の研究計画について話し合った。

「中東民主化班」第1回研究会

日時：2006年11月18日

場所：東京大学文学部アネックス

概要：

中東民主化研究班は、中東各国の民主化に関わるデータベース作成に関して、その枠組みをメン

バー間で協議した。

「中東社会史班」第1回研究会

日時：2006年12月2日

場所：東京大学・法文1号館216室

講演者・講演題目：

(1)保坂修司（近畿大学教授）「アラブ世界における日本のアニメ・マンガの影響」

(2)鈴木恵美（東京大学東洋文化研究所非常勤講師）「エジプトの漫画雑誌にみる児童教育」

概要：第一の発表者である保坂氏は、近年特にペルシア湾岸地域を中心に、インターネットの普及と相俟って、日本の「アニメ」が若者たちの間を席卷している様子を、画像も丁寧に添えて詳細に報告した。一方、鈴木氏の報告は、カイロ発刊の『フラッシュ』という雑誌に連載された「ムラーティン・マトフーン（ひらかれた国民）」という漫画を素材にして、「エジプト人論」やエジプトにおける漫画の受容などに光をあてようとした意欲的報告であった。

「パレスチナ研究班」第1回研究会

日時：2006年12月5日

場所：東京大学東洋文化研究所会議室

講演者・講演題目：

ヤン・デヨング（聖イーヴス法的資源開発センター研究顧問）

「占領地パレスチナの地理学的将来」

概要：占領地パレスチナにおいて長年地図作成に携わってきたデヨング氏から、地図作成の手法と問題点、分離壁建設設計を中心にしたイスエルの対占領地政策と地域分割の将来について、豊富な地理画像を用いた説明があり、活発な質疑が行われた。

「パレスチナ研究班」第2回研究会

日時：2006年12月12日

場所：東京大学東洋文化研究所会議室

講演者・講演題目：

(1)浜中新吾（山形大学助教授）

「比較政治学におけるパレスチナ研究 - 交渉ゲーム理論を中心に - 」

(2)臼杵陽（日本女子大学教授）「パレスチナ研究の現状とその課題」

概要：

第一の発表者である浜中氏は、比較政治学からいかに地域政治にアプローチできるかという課題

を解説し、比較政治学の関心トピックスを説明した上で、交渉のゲーム理論に基づいてつくられたモデルを現在のパレスチナにとって最重要課題の一つである連立政権に適用し、そのシミュレーションを検討した。第二の発表者である臼杵氏は、今後のパレスチナ研究班の研究活動の議論のために、パレスチナ研究を取り巻く困難と取り組む課題について問題提起を行った。

「パレスチナ研究班」第3回研究会

日時：2007年1月19日

場所：東京大学東洋文化研究所会議室

講演者・講演題目：王鎖芳（北京大学国際関係学院副教授）「中国の対パレスチナ政策」

概要：

中国の対中東政策におけるパレスチナ問題の位置づけとその歴史的変遷について、とくにイスラエルとの国交樹立前後の変化を中心とした解説があり、また現在の中国政府の中東和平問題に関する公式の政策についての分析がなされた。

～ 「パレスチナ研究班」第4～8回研究会

日時：2007年1月29日、2月5日、2月7日、2月14日、2月16日

場所：早稲田大学 41-31 号館 2 階会議室

講演者・講演題目：

アフマド・サアディー（ベングリオン大学上級講師）連続セミナー

「イスラエルによるパレスチナ社会の統治の歴史」

概要：

第一回（2007年1月29日）：イスラエルが国内のパレスチナ人住民をどのように統制・支配してきたかという問題を本講演のテーマとして掲げ、イスラエルの政策に影響を与えたオスマン帝国時代、英国委任統治時代に遡り、その変遷を追うという方向性を提示した。第二回（2007年2月5日）：英国委任統治時代のパレスチナにおけるユダヤ人組織に焦点を絞り、少数であったユダヤ人コミュニティがなぜパレスチナの「勝者」となったのかを論じた。第三回（2007年2月7日）：ユダヤ人組織による産業が発達する一方で、パレスチナにおけるアラブ人はその恩恵から疎外されていた。さらに、不在地主による農地売却が相次いだことによって、アラブ人たちは土地の喪失を痛感するようになる。1920年代から30年代にかけての、この厳しい時代に、パレスチナのアラブ人たちはパレスチナ人としてのアイデンティティを培っていった。第四回（2007年2月14日）：シオニストによるパレスチナ人社会への監視・管理システムの構造と歴史的変遷を考察した後、とくに宗教・氏族・居住地・職業など多様なカテゴリーによって個々人を分離し、協力者（コラボレーター）を創出するシステムについて具体例を用いて詳細な分析を行った。第五回（2007年2月16日）：パレスチナ

に関する参考文献が紹介された後、現在進行している分離壁建設計画についての概要説明があり、特に分地壁建設計画の背後にあるシオニズム政治思想の潮流について批判的な考察がなされた。また、分離壁建設がパレスチナ人社会に与える影響についても分析が行われた。

「パレスチナ研究班」第9回研究会

日時：2007年2月11日

場所：京都大学地域研究総合情報センター会議室

講演者・講演題目：

アフマド・サアディー（ベングリオン大学上級講師）

“The Impact of Globalization on the Palestinian Community in Israel”

概要：

グローバル化の定義とその矛盾をめぐる理論的考察を行った後、とくに local なものの持つ意味について、イスラエル国内におけるアラブ人の地方行政の問題を事例に分析を行った。グローバル化の進行にともなう国家の役割変化がとくにイスラエル国内における格差の拡大と結びついて展開している実態を批判的に考察した。

「アンワル・アブデルマルク氏を囲む会」

日時：2007年2月22日

場所：於早稲田大学 41-31 号館 2 階会議室

講演者・講演題目：

アンワル・アブデルマルク（アイン・シャムス大学名誉教授）

「アラブ・中東研究の 50 年、そしてこれから」

概要：

フリーディスカッションの形式をとり、講師から 9.11 後の国際政治力学の構造変化とそれに関わる諸問題の解説がなされた後、参加者からの質問に対して回答がなされた。とくに最近出版されたワタニーヤに関する大著をふまえた文明論的視点からの議論が多岐にわたってなされた。

「パレスチナ研究班」第10回研究会

日時：2007年2月23日

場所：広島市立大学会議室

講演者・講演題目：

アフマド・サアディー（ベングリオン大学上級講師）「シオニズム政治とパレスチナ政治」

概要：

シオニズム政治の歴史的変遷、とくにヘルツルとジャボティンスキーの思想、イエシブと英国委任統治政府の関係、シオニストの対パレスチナ人政策、イスラエルとパレスチナの平和交渉、分離壁建設計画などについて、豊富な資料を用いて批判的に考察を行った。また、パレスチナ人が将来取り得る戦略についても考察がなされた。

「パレスチナ研究班」第 11 回研究会

日時：2007 年 3 月 8 日

場所：東京大学東洋文化研究所会議室

講演者・講演題目：

イラン・パペ（ハイファ大学上級講師）

「イスラエルの歴史を見直す」

概要：

イスラエルにおける「新しい歴史家」についてパペ氏自身の経験談を交えて概説を行った後、シオニズムのイデオロギーおよびパレスチナ人に対する民族浄化政策について考察した。後半部では、歴史学における Virgin Narrative の可能性、イスラエルにおける自己検閲の流れ、第 2 次インティファダ後のイスラエルの歴史学界における変化、パレスチナ・イスラエル関係の展望などの多岐にわたる議論が行われた。

「パレスチナ研究班」第 12 回研究会

日時：2007 年 3 月 11 日

場所：東京大学東洋文化研究所会議室

講演者・講演題目：

アッザーム・タミーミー（イスラーム政治思想研究所所長）

「ハマースとこれからのパレスチナ政治」

概要：

パレスチナ評議員議会選挙におけるハマースの勝利およびハマースとファタハの間で交わされたマッカ合意について考察した後、とくに国際政治の中でのハマースの位置づけについて分析を行った。ハマース憲章を改正する必要があること、民族的目標を強調すべきこと、国際社会におけるイメージ向上を重視すべきことなどが提案された。

「中東民主化班」第 2 回研究会

日時：2007 年 3 月 24 日

場所：東京大学東洋文化研究所会議室

(1)データベース執筆者の打ち合わせ

(2)講演者・講演題目：

アシーヤ・ベンサラーム・アラウィー（モロッコ王国無任所大使）

「モロッコにおける民主主義について」

概要：

午後 2 時 30 分より 4 時まで、データベース執筆メンバーによりデータベース公開に向けた内容の最終調整が行われた。午後 4 時より一般に公開された研究会となり、モロッコより来日中のアシーヤ・ベンサラーム・アラウィー無任所大使を講師に迎え、「モロッコの民主主義」をテーマに報告と議論が行われた。

(2)海外派遣・調査

トルコのイスラーム復興女性運動の組織に関する調査

期間：2007 年 3 月 1 日～22 日

国名：トルコ共和国

参加者：澤江史子（日本学術振興会・特別研究員・研究協力者）

概要：

2007 年 3 月 1 日から 3 月 22 日まで、トルコの複数の都市でイスラーム復興女性運動について、組織やネットワークのリーダーを中心にインタビュー調査を行った。今回の調査では、アンカラ、イスタンブールという中心都市の運動とネットワーク化を進め、地方で改革運動の核となるべく活動を行う女性たちに対して、運動のネットワークの伝手をたどって接触した。調査内容は、地方都市の女性たちが中心都市の女性たちと、どのような問題や問題意識を共有し、どのように組織やネットワークを形成したのか、地方都市において彼女たちが抱える問題にはどのような特性があるのか、運動が女性自身の人生や家族・社会関係においてどのような意義を持ち、どのような変化をもたらしているかと本人が考えるのか、という点を中心に、半構造的インタビューを行った。

中東社会史に関する資料調査及び現地調査

期間：2007 年 3 月 2 日～18 日

国名：エジプト・アラブ共和国

参加者：大稔哲也（東京大学大学院人文社会系研究科助教授・研究分担者）

概要：

今回の調査の目的は、(1)中東社会史に関する資料の閲覧・蒐集、(2)中東社会史研究のフィールドワーク、(3)中東社会史班へ研究協力してくれる現地研究者との面談、に大別できる。(1) 中東社会史に関する資料の閲覧・蒐集については、本年も連日、エジプト国立文書館(Dar al-Watha'iq

al-Qawmiya)へ通い、オスマン朝期以降のシャリーア法廷台帳やワクフ文書を調査・閲覧し、必要部分を複写した。(2)エジプト最大の皮革鞣し業地区、オールド・カイロの同地区へ通った。同地 S 氏の工場における鞣し作業の諸工程、その副産物であるゼラチン生産、などについて調査と画像資料撮影を行った。(3)中東社会史班へ研究協力してくれる現地研究者として、アフマド・ザード氏(カイロ大学文学部長・社会学科教授)、カルマ・サーミー氏(アイン・シャムス大学教授)、イサーム・イーサーウィー氏(カイロ大学文学部講師)、他と懇談した。

エジプトの政治エリートに関する資料収集と政治活動家へのインタビュー調査

期間：2007 年 3 月 2 日～16 日

国名：エジプト・アラブ共和国

参加者：鈴木恵美（東京大学東洋文化研究所非常勤講師・研究協力者）

概要：

2007 年 3 月 2 日から 3 月 16 日まで、エジプトの政治エリートに関する資料収集と政治活動家へのインタビュー調査を目的にカイロに出張した。収集する資料は、エジプトの政権与党国民民主党の地方支部において発行している党活動に関する資料、そして国立図書館とアメリカン大学ではナセル時代から現在まで政権で要職にある政治家の家族データである。アメリカン大学の図書館では、1960 年代の紳士録の複写を収集した。国民民主党のマーディー支部へ赴き、提供できる範囲内での資料の提供を求めた。昨年未まで日刊紙マスリーアルヤウムで実質的な編集長を務めていたヒシャーム・カースィム氏へインタビューを行った。児童雑誌「フラッシュ」の著者のハーリド・スィフティー氏へのインタビューを実施した。現代の流動的なエジプトの政治状況の実情を知るためには、活字媒体だけでなく政治家や活動家など関係者への聞き取り調査は欠くことができない。今回の調査では、資料収集と聞き取り調査ともに偏りなく実施することができた。

(3)資料収集

タイトル	<i>Journal of Palestine Studies</i>
著者・编者	Institute of Palestine Studies
出版地	Washington DC
出版者	University of California Press
出版年	1971 年～1996 年 (No.1(Vol. , no.1-1971)-No.99(Vol.25, no.3-1996)
形態	
内 容	1 号～26 号、28 号～30 号、35 号、36 号、38 号、40 号～42 号、44 号～51 号、53 号～57 号、59 号～65 号、68 号、70 号、72 号、77 号、79 号、82 号～87 号、90 号～99 号

タイトル	Jerusalem & East Mission Archive 1842-1976
著者・编者	Private Paper Collection
出版地	Oxford
出版者	Middle East Center, St. Antony's College
出版年	1983 年
形態	電子データ (CD-ROM)
内 容	研究グループ 2 の活動として、オックスフォード大学セント・アントニー校中東研究センターが所蔵している英国教会によるエルサレム・東方ミッションの覚書、報告、通信、財務記録などのマイクロ資料を C D - R O M 化した。

(4)研究成果・発表(論文・図書)

〔論文〕計 (8) 件

著 者 名	論 文 標 題			
長沢 栄治	“Inventing the Geography of Egyptian Nationalism (Wataniya): A Review of Gamal Hamdan's The Personality of Egypt and His Personal History”			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
<i>Mediterranean World</i>		XVIII	2006 年	271-318

著 者 名	論 文 標 題			
臼杵 陽	パレスチナ / イスラエル紛争における「敵」イメージの形成			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
羽田功編『民族の表象—歴史・メディア・国家—』			2006 年	275 - 302

著 者 名	論 文 標 題			
臼杵 陽	“Jewish National Communist Movement in Iraq: A Case of Anti-Zionist League in 1946”,			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
<i>Mediterranean World</i>		XVIII	2006 年	211-225

著 者 名	論 文 標 題			
大稔哲也	<i>Tasawwuf</i> as Reflected in the Ziyara Books and Cairo Cemeteries			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
<i>Le développement du soufisme en Égypte à l'époque mamelouke</i> , ed. Richard McGregor et Adam Sabra, Institut français d'archéologie orientale, Cairo.			2006 年	299-330

著 者 名	論 文 標 題			
大稔 哲也	Cairene Cemeteries as Public Loci in Mamluk Egypt			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
<i>Mamluk Studies Review</i>		10 - 1	2006 年	83-116

著 者 名	論 文 標 題			
大稔 哲也	イスラームの巡礼・参詣---エジプトの聖墓参詣を中心に--			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
平成 17 年度愛媛大学公開シンポジウム・プロシーディングズ			2006 年	6-12

著 者 名	論 文 標 題			
松本 弘	イエメン：政党政治の成立と亀裂			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
間寧編『西・中央アジアにおける亀裂構造と政治体制』			2006 年	95-158 -

著 者 名	論 文 標 題			
松本 弘	イエメンの政治変化と経済変化			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
調査研究報告書（福田安志編）『湾岸、アラビア諸国における社会変容と国家・政治―イラン、GCC 諸国、イエメン―』			2007 年	173-201

〔図書〕計（ 1 ）件

著 者 名	出 版 社		
長沢 栄治(共編)	財団法人東洋文庫		
書 名		発 行 年	ページ
<i>A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt</i>		2007 年	179 pp

上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究拠点

代表：私市正年（上智大学外国語学部教授）

テーマ 『イスラームの社会と文化』

基本的な研究の枠組みは、従来の上智大学アジア文化研究所が培ってきた中東、東南アジア、南アジアの地域研究の方法と成果を、イスラーム研究の場に転移、発展させることである。その手法・目的は、第一に近現代イスラームの政治的側面に関心が集まりがちであった近年の研究動向に対し、政治運動の背景にある、より多様なあり方をも示す社会的・文化的側面に注目した研究を行うことである。第二に民衆性に着目したイスラーム研究に力点を置き、歴史的視点をふまえつつ、地域間、多様な学問分野間の比較と協働を推進することである。第三に、中東・北アフリカから東南アジア、さらに欧米・アフリカまでを結ぶ研究者ネットワークを創出することによって、グローバル化とイスラーム地域研究の関係性を追究することである。

三つの研究グループは以上の基本方針のもとに、国内研究会や国際シンポジウムなどの開催を通じて有機的な連携研究活動を行う。

【研究事業名】

研究グループ1「イスラーム主義と社会運動・民衆運動」

代表：私市正年（上智大学外国語学部教授）

研究グループ2「東南アジア・イスラームの展開」

代表：川島緑（上智大学外国語学部教授）

研究グループ3「スーフィズムと民衆イスラーム」

代表：赤堀雅幸（上智大学外国語学部助教授）

【拠点形成の目的と意義】

従来の上智大学アジア文化研究所におけるイスラーム研究の活動を土台に、近現代イスラームの政治的側面に関心が集まりがちであった近年の研究動向に対し、政治運動の背景をなし、同時にイスラーム主義に限られない、より多様なあり方をも示すイスラームの社会的文化的側面に注目したイスラーム地域研究のあり方を追求する研究拠点を形成する。

これによりイスラーム主義研究を相対化し、より総合的な近現代イスラーム理解を達成する。とくに民衆性に着目したイスラーム研究に力点を置き、歴史的視点をふまえつつ、多様な学問分野の協働を推進する。

また、平成9-13年度文部科学省科学研究費補助金学術創成研究「現代イスラーム世界の動態的研

究」において、本研究所を拠点として活発に活動し、顕著な成果を上げた共同研究を継承し、さらに発展させることに配慮する。まずは有望と思われる主題について、三つの研究単位を組織して活動する一方、全体としての国内・国際ワークショップやシンポジウムの開催なども検討する。

研究に加え、教育面での活動、すなわちイスラーム地域研究に従事する若手研究者の養成も、本拠点は最優先の課題として重視する。個々の研究単位の活動に若手研究者の参加を促し、また若手研究者自身による研究会の維持運営を支援する他、拠点全体としてTA、RA採用、ポスドク受け入れ、上智大学アジア文化研究所モノグラフ・シリーズによる成果公開等を進める。これらの推進にあたっては、現在、地域研究専攻主任でもある川島を中心に制度上の整備を行う。その際には、地域研究専攻が中心となり、研究所も深く関与して実施中の上智大学21世紀COE「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」（拠点リーダー：村井吉敬上智大学外国語学部教授）および「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「現代世界に貢献する地域研究—グローバルな市民社会とローカルの多様性を支える次世代地域研究者の育成」（取組代表者：寺田勇文上智大学外国語学部教授、取組実施担当者：赤堀）における若手研究者養成のための方策を十分に生かし、それらが2006年度に完了した後もイスラーム地域研究の分野において継続発展させる。

【組織】

(研究拠点構成員)

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 (担当研究テーマ)
私市 正年	上智大学外国語学部教授	部門代表者、研究グループ1代表者(総括)
川島 緑	上智大学外国語学部教授	研究グループ2代表者 (東南アジア・政治運動)
赤堀 雅幸	上智大学外国語学部助教授	研究グループ3代表者 (近現代聖者信仰研究)
高橋 圭	人間文化研究機構地域研究推進センターPD 研究員 / 上智大学アジア文化研究所客員研究員	研究グループ3分担者 (近現代タリカ研究)

【18年度事業の目的と活動内容】

1.今年度事業の目的

上智大学研究拠点として、5年間の目的を次のように設定した。第一に、上智大学研究機構内の常設研究所であるアジア文化研究所において、とくに重点をおく共同研究を担う部門の一つとして、上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究拠点を設置し、同研究所の活動と連動する外国語学部アジア文化研究室、大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻(平成17年度までの外国語学研究科地域研究専攻)における学部・大学院での教育活動への関与も含めて、研究教育活動を展開すること。第二に、かつてアジア文化研究所アンコール研修所が、研究の進展とともに上智大学アジア人材養成研究センターに改組され、研究所と密接に協力しながら独立して活動するようになったのと同様に、将来的には上智大学研究機構イスラーム地域研究部門として位置づけ直されることも視野に入れて活動を行うこと。第三に、創立100周年(A.D.2013)上智大学教育・研究・キャンパス再興計画の一環として進行しつつある研究機構全体の整備の状況をにらみつつ、鋭意検討すること。これら全体の目的に沿いつつ、上智大学が国際的カトリック研究機関ネットワークを有しているという利点を生かしつつ、レバノンのサンジョセフ大学等の研究機関・研究者との連絡調整をはかること。

以上の5年間の目的に沿いつつ、2006年度は以下の目標を掲げた。第一については、本プロジェクトをアジア文化研究所内の正式活動として位置づけ、定例所員会議等で報告を行うこと。第二については、大学公式サイトに本研究活動の内容を掲載すること。第三は、サンジョセフ大学等の研究機関との学術交流の推進を具体化すること。

2. 今年度事業の内容

(1) 拠点整備

2006 年度は以下のような拠点整備を行った。

- ・ 「イスラーム地域研究」プロジェクト室の開設
- ・ メーリングリスト開設（拠点全体、各グループごとの二種類）
- ・ 上智大学公報誌でのプロジェクト紹介
- ・ ホームページの開設
- ・ サンジョセフ大学との研究協力の推進（これは「魅力ある大学院教育」との連携のもとに実施）

(2) 研究会活動

（以下研究会の詳細は各グループの活動欄を参照）

グループ 1

第 1 回研究会

日時：2006 年 12 月 16 日（土）12：30～17：30

場所：京都産業大学 12 号館 12521 室

参加者：15 名

発表：

私市正年（上智大学）

「イスラーム主義運動の現状—ポスト・イスラーム主義論との関係からの検討」

コメンテーター：堀場明子（上智大学） 横田貴之（日本国際問題研究所）

Zoubir Arous（ズバイル・アルース）（アルジェ大学）

「アルジェリアのイスラーム主義運動—社会運動から見た FIS」

コメンテーター：高岡豊（中東調査会） 清水学（上智大学）

第 2 回研究会

日時：2007 年 1 月 20 日 13：00～18：00

場所：上智大学 2-630a 室

参加者：15 名

発表：

堀場明子（上智大学）「インドネシアのマルク紛争とラスカル・ジハード」

高岡豊（中東調査会）「ヒズボラー研究の現状」

鷹木恵子（桜美林大学）「マイクロクレジットの動向と中東」

第 3 回研究会

日時：2007 年 2 月 24 日（土）12：00～18：00

場所：上智大学 11-305 室

参加者：12 名

発表：

- 1) 横田貴之 (日本国際問題研究所) 「ムスリム同胞団研究の現状と課題」
- 2) 清水学 (上智大学) 「金融資本の現段階的特徴とイスラーム運動との接点」
- 3) Daho Djerbal (ダホ・ジェルバール) 氏 (アルジェ大学)

「The Struggle for Algerian National Liberation and Islam」

コメンテーター：小山田紀子氏 (新潟国際情報大学)

グループ 2

第 1 回研究会

日時：2007 年 1 月 12 日(金) 15:00 ~ 1 月 14 日(日) 11:00

会場：天理大学研究棟 (奈良県天理市)

参加者：13 人

プログラム：

1 月 12 日(金)

15:00 天理大学研究棟 3 階インドネシア語共同研究室集合

15:00-17:00 天理大学図書館見学、資料閲覧

17:00- 天理教神殿・礼拝場見学、懇談・研究打ち合わせ

1 月 13 日(土) : 天理大学 3 階第 3 会議室

午前の部：司会：青山亨

9:00-10:30 小林寧子「インドネシア・イスラーム研究と Martin Van Bruinessen」

10:45-12:30 国谷徹：「Azwardi Azra 著、The Origin of Islamic Reformism in Southeast Asia: Networks of Malay-Indonesian and Middle-Eastern 'Ulama' in the 17th and 18th Centuries の紹介とレビュー」

午後の部：司会：奥島美夏

14:00-16:00 菅原由美・服部美奈：「M. Van Bruinessen 著、Kitab Kuning: Pesantren dan Tarekat: Tradisi-Tradisi Islam di Indonesia の紹介とレビュー」

16:30-17:30 坪井祐司：「Mohd. Nor Bin Ngah 著、Kitab Jawi: Islamic Thought of the Malay Muslim Scholars の紹介とレビュー」

17:30- 総合討論：討論者：西尾寛治など

1 月 14 日(日) : 天理大学研究棟 3 階第 3 会議室

9:30-11:00 今後の研究活動に関する打ち合わせ

11:00 現地解散

第2回研究会国際ワークショップ「海域東南アジアにおける奴隷交易と社会変容」

Slave Trade and the Transformation of Societies in the Maritime Southeast Asia

日時：2007年3月26日(月) 13:30-17:00

会場：上智大学四谷キャンパス 7号館 12階第2会議室

参加者：約15名

プログラム：

James Warren(ジェームズ・ウォレン)(マードック大学、東南アジア社会史): The Port of Jolo and the Sulu Zone Slave Trade: An 1845 Report.

奥島美夏(神田外国語大学、文化人類学): Destruction and Reorganization of "Tanah Tidung", or Northeast Borneo: The Natives' Response towards the Sulu Sultanate and the Establishment of the Bulungan Sultanate

グループ3

第1回研究会

日時：2007年1月6日(土) 13:00~17:00

場所：上智大学 2-630a 室

参加者：20名

発表：

森本一夫(東京大学)「サイイド/シャリーフー基礎的事実とアプローチ」

新井和広(東京外国語大学)「ハドラミー・サイイド一家系氏再構築の問題点」

コメンテーター：小牧幸代(高崎経済大学)

研究合宿

日時：2007年2月27日(火)~2月28日(水)

場所：KKR 宮ノ下

参加者：18名

発表：

藤井千晶(京都大学)「タリーカ像の再検討—ザンジバル北部の事例から」

コメンテーター：高橋圭(人間文化研究機構/上智大学)

高尾賢一郎(同志社大学)「現代シリアの聖者、アフマド・クフターロー研究—そのスーフィズム理解を中心に」

コメンテーター：赤堀雅幸(上智大学)

二宮文子(京都大学)「中世北インドにおける14のハーンワダー」

コメンテーター：小牧幸代（高崎経済大学）

書評発表：(Jong, F. de & B. Radtke (eds.), *Islamic Mysticism Contested: Thirteen Centuries of Controversies and Polemics*, Leiden: Brill, 1999 所収論文より)

丸山大介(京都大学)Josef van Ess, “Sufism and Its Opponents : Reflections on Topoi, Tribulations, and Transformations”

加藤瑞絵（東京大学）Gerhard Böwering, “Early Sufism between Persecution and Heresy”

茂木明石（上智大学）Th. Emil Homerin, “Sufis and Their Detractors in Mamluk Egypt : A Survey of Protagonists and Institutional Settings”

(3)海外派遣・調査

（以下海外派遣・調査の詳細は各グループの活動欄を参照）

グループ 1

カイロにおけるイスラーム運動関連の調査

期間：2007 年 2 月 25 日～3 月 4 日（8 日間）

国名：エジプト

参加者：横田貴之（日本国際問題研究所）

アルジェリアにおけるイスラーム主義運動組織の調査

期間：2007 年 3 月 10 日～3 月 20 日（11 日間）

国名：アルジェリア

参加者：私市正年（上智大学）

ヨルダンにおけるイスラーム政治運動の調査、文献・情報収集

期間：2007 年 3 月 14 日～3 月 28 日（15 日間）

国名：ヨルダン

参加者：北澤義之（京都産業大学）

グループ 2

インドネシアにおける文献調査

期間：2007 年 2 月 19 日 ～ 2007 年 2 月 26 日（8 日間）

国名：インドネシア

参加者：西芳実（東京大学）

マレーシアにおける文献調査

期間：2007 年 2 月 21 日～3 月 22 日（30 日間）

国名：マレーシア

参加者：西尾寛治（東洋文庫）

フィリピンにおけるイスラーム関連資料収集

期間：2007 年 3 月 10 日～3 月 21 日（12 日間）

国名：フィリピン

参加者：川島緑（上智大学）

インドネシアにおけるジャウィ文書調査

期間：2007 年 3 月 12 日～2007 年 3 月 21 日（10 日間）

国名：インドネシア

参加者：山本博之（京都大学）

グループ 3

トルコにおける聖者信仰・スーフィズム実践の調査

期間：2007 年 3 月 14 日～2007 年 3 月 25 日（12 日間）

国名：トルコ

参加者：今松泰（同志社大学） 森山央朗（日本学術振興会・東洋文庫）

高橋圭（人間文化研究機構／上智大学） 加藤瑞絵（東京大学）

(4)外国人研究者の招聘

（以下招聘の詳細は各グループの活動欄を参照）

グループ 1

Zoubir Arous（ズバイル・アルース）氏招聘

所属：アルジェ大学教授（アルジェリア）

期間：2006 年 12 月 14 日～12 月 20 日（7 日間）

用務：研究会における発表

グループ 2

James Warren（ジェームズ・ウォレン）氏招聘

所属：マードック大学教授（オーストラリア）

招聘期間：2007 年 3 月 24～3 月 29 日

用務：研究会における発表・講演

グループ 3

なし

(5)資料収集

タイトル	Political Islam
著者・编者	Joel Beinin & Joe Stork
出版地	Berkeley
出版者	University of California Press
出版年	1997
形態	論集、395 頁
内 容	イスラーム主義運動研究の基本文献（論集）。 この他に、イスラーム主義運動に関する資料を 78 点購入した。
収集期間 ・ 収集方法	2006 年 12 月 20 日 ナガラ図書より購入

タイトル	Ensiklopedi Islam, 8 vols
著者・编者	Nina M. Armando, et al. (eds.)
出版地	Jakarta
出版者	Ichtiar Baru Van Hoeve
出版年	2005
形態	書籍、8 巻
内 容	東南アジアのイスラームに関する百科事典。 この他に百科事典・基本文献を 8 点、キターブを中心とするイスラーム文献合計 1700 点以上を購入した。
収集期間 ・ 収集方法	2007 年 2 月 28 日 穂高書店から購入

タイトル	Index Islamicus on CD-ROM, 8th edition (network license, 5 and more users)
著者・编者	
出版地	Leiden
出版者	Brill
出版年	2006
形態	CD-ROM
内 容	研究グループ 3 の活動基盤整備のため、中東・イスラーム研究の基本文献目録である Index Islamicus の最新版（ネットワーク版）を購入した。 また、このほか基本文献、スーフィズム・聖者信仰関係書籍 4 点を購入した。
収集期間 ・ 収集方法	2007 年 1 月 15 日 穂高書店から購入

(6)研究成果・発表（論文・図書）

〔図書〕計（ 1 ）件

著 者 名	出 版 社		
溝渕 正季			
書 名		発 行 年	ページ
イスラーム主義運動文献目録		2007 年 4 月 刊行予定	

研究グループ1：「イスラーム主義と社会運動・民衆運動」

【組織】

（研究グループ1メンバー）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 （担当研究テーマ）
私市 正年	上智大学外国語学部教授	研究グループ1 代表者
北澤 義之	京都産業大学外国語学部助教授	研究分担者 （アラブ世界・近現代政治史）
清水 学	上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科 非常勤講師	研究分担者 （中央アジア・経済研究）
鷹木 恵子	桜美林大学国際学部教授	研究分担者 （アラブ世界・人類学）
横田 貴之	日本国際問題研究所研究員	研究分担者（アラブ世界・近現代 政治思想研究）
ズバイル・ アルース	CREAD (Universite d'Alger), Professor	Islamist Movement of Algeria

（研究グループ1 研究協力者）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	担当研究テーマ
シリル・ ヴェリヤト	上智大学外国語学部教授	インドにおける宗教の共存と対立
小林 寧子	南山大学外国語学部教授	インドネシアのイスラーム法
小山田紀子	新潟国際情報大学情報文化学部教授	植民地期フランス・アルジェリア 関係とイスラーム
粕谷 元	日本大学非常勤講師	トルコ現代史
高岡 豊	財団法人中東調査会研究員	地域研究（東地中海）

吉田 敦	明治大学軍縮平和研究所研究員	北アフリカ（マグリブ）地域研究
見市 建	在シンガポール日本国大使館	東南アジアのイスラーム運動
吉川 卓郎	在カタール日本大使館専門調査員	中東政治
石黒 大岳		クウェートの同胞団研究
木村 友香	桜美林大学大学院国際学研究科博士後期課程	社会開発
渡邊 祥子	東京大学大学院総合文化研究科博士課程	アルジェリア近現代史
堀場 明子	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	インドネシア・マルク州における ムスリムとキリスト教徒による地 域紛争
岩坂 将充	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	トルコ政治
三代川寛子	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	現代エジプトのコプト
溝渕 正季	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	政治学、レバノン、シリア、ヒズ ブッラー
清水 理恵	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	ムスリム・マイノリティ（ポルト ガル、欧州）
相川 洋介	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	エジプトにおける貧困削減
小村 明子	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	日本のムスリム・コミュニティの 諸問題について
飛内悠子	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	北部スーダンの教育人類学
登利谷正人	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究 専攻博士後期課程	アフガニスタン近現代史

アガスティン・サリ	上智大学博士後期課程外国語学研究科地域研究専攻博士後期課程	南アジアエスニック政治学
-----------	-------------------------------	--------------

【平成18年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

今年度は、5年間の研究を見通しつつ、主に三つの活動を実施した。

第一は、イスラーム運動の現状について共通理解を得ること。これについては、2006年12月16日に実施した研究会(京都産業大学)で、グループ代表の私市が報告をし、議論と意見交換を行った。

第二は、個別のイスラーム運動組織について、研究状況の把握と今後の研究の課題等をメンバー全員で意見調整を行った。具体的には、アルジェリア、レバノン、シリア、エジプト、中央アジア、チュニジアである。

第三は、若手の研究者育成を目的として、大学院生を中心に研究会への参加奨励と研究報告書(レポート)の作成を要請し、これを実施した。研究報告書はホームページに掲載してある。

第三は、アルジェ大学ズバイル・アルース(Zoubir Arous)教授に分担者として加わっていただき、アラブ・イスラーム諸国の研究者との連絡調整の準備・促進をはかった。アルース氏の招聘(2006年12月)もこのような目的に沿ったものであった。

2. 研究活動の記録

(1)研究会活動

第1回研究会

日時：2006年12月16日(土)12:30~17:30

場所：京都産業大学12号館12521室

参加者：15名

発表：

私市正年(上智大学)

「イスラーム主義運動の現状—ポスト・イスラーム主義議論との関係からの検討」

コメンテーター：堀場明子(上智大学) 横田貴之(日本国際問題研究所)

Zoubir Arous(ズバイル・アルース)(アルジェ大学)

「アルジェリアのイスラーム主義運動—社会運動から見たFIS」

コメンテーター：高岡豊(中東調査会) 清水学(上智大学)

概要：

グループ1の課題は「イスラーム主義運動を、社会運動・民衆運動の視点から再検討すること」

であるが、その実質的なスタートにあたる本研究会では、今後 5 年間の研究を推進するための「共通の問題枠組み」を議論することが目的であった。私市・Arous 両氏の発表内容はそれぞれ以下の通りである。

1. 私市正年（上智大学）

「イスラーム主義運動の現状—ポスト・イスラーム主義議論との関係からの検討」

本発表では、「イスラーム主義運動は現在岐路に差し掛かっている」という問題意識から出発して、「ポスト・イスラーム主義」を鍵概念とし、20 世紀後半から 21 世紀にかけてのイスラーム主義運動の歴史と変遷が検討された。

発表者はまず、1980 年代初めからムスリム世界全体に広がっていったイスラーム主義運動の波において、1989 年がその絶頂期であったと位置づける。この年には、パレスチナにおいてハマースが PLO に代わりヘゲモニーを掌握、アルジェリアでの FIS の結党、アフガニスタンでのソ連軍に対するムジャーヒディーンの勝利、「悪魔の詩事件」など、世界の耳目を集める出来事が多く起きた。

しかし発表者は、1990 年代に入り、イスラーム主義運動は激しい暴力と組織の自己崩壊に向かっていった、と指摘する。アフガニスタン帰りのムジャーヒディーンが各紛争地帯で暴力的な闘争を開始し、暴力とテロリズムがイスラーム主義運動を支配するようになる。そして、最終的には 2001 年の 9. 11 テロに辿り着くのである。この過程において、イスラーム主義運動は徐々に大衆的な支持と基盤を喪失していき、政治的願望と現実とのギャップは埋め難いものとなっていった。発表者はこれを「イスラーム主義運動の挫折」とした。

最後に発表者は、以上のような前提を踏まえ、21 世紀のイスラーム主義はポスト・イスラーム主義なのか、という問題提起を行う。ポスト・イスラーム主義の二本柱としては、ナショナル・レベルでのイスラーム主義運動の政治的合法化志向、グローバル・レベルでのネオ・ファンダリズムのグローバル・ウンマ（想像の共同体）への志向、が挙げられた。

コメンテーターやフロアからは、各々の専門の事例に引きつけたコメントがなされた。その中で繰り返し指摘されたのが、ポスト・イスラーム主義という概念の精緻化の必要性和個別事例にあてはめた実証作業の必要性である。これらの点は今後の研究を進めていく上での課題となろう。

2. Zoubir Arous（アルジェ大学）

「アルジェリアのイスラーム主義運動—社会運動から見た FIS」

本発表はアルジェリアにおけるイスラーム運動（Islamic movement）について、社会史の視点からの分析を提起するものであった。

まず前半部では、独立後の FLN 政権による弾圧や政策変更に対応してイスラーム運動が発展し、1980 年代末の FIS の躍進と 1992 年の軍部クーデター以降の組織の分裂、内戦状態を経て現在に至

る過程について解説された。そして、現在は 5 つのイスラーム主義政党が議会を通じて政治参加していることが紹介された。

後半部では、FIS がさまざまなイデオロギー・グループを包含する組織集合体であったことに関連し、FIS および分裂後の各政党や運動組織のイデオロギーや内部構造について述べられた。その中で、全ての組織がイスラーム国家樹立を主張しているにも拘らず、各々の描くイスラーム国家のイメージは異なっており、その実現への具体的なプロセスも明らかではないこと、組織化・組織運営の構想力がないため、アメリカのマネジメント手法を模倣したり、ユネスコからの指導を受けたりしていることが明らかにされた。また、調査において、内部情報にアクセスできない組織の秘密性の壁をどう乗り越えるかという研究上の課題も指摘された。

最後に、コメント・質疑応答に答えるかたちで、アルース氏はフランス植民地支配制度の影響、とりわけフランス語話者とアラビア語話者で社会層が分断されており、後者が社会の下層部を占めていることに対する不満がイスラーム運動として現れていることを指摘され、アルジェリア社会の孕む諸問題に、使用言語の違いが大きく影響していることを強調された。また、人々のアラブ・アイデンティティーについては、1950-60 年代のアラブ主義の影響というよりは、アルジェリアの歴史・伝統に根ざしたものであるとされた。

その他、同胞団に関しては、古くからのエジプトとの結びつきが強いこと、イデオロギーが現在のイスラーム主義諸政党に取り入れられていること、慈善・社会活動を通じた影響力を持つこと、教育のアラブ化を担いエリート養成を進めていること等が示された。スーフィーに関してはイスラーム運動を担うというよりは政権側によって体制内に取り込まれ、利用されていたこと、武装過激派に関しては、アフガニスタンの影響だけでなく、対仏独立闘争経験者がリーダーとして関わっていること等も示された。

本発表は、アルジェリア特有の背景があるとはいえ、他地域と比較する際に有効な視点が示されており、今後の研究の枠組みを構想する上で、意義深いものであったといえる。

第 2 回研究会

日時：2007 年 1 月 20 日 13：00～18：00

場所：上智大学 2-630a 室

参加者：15 名

発表：

堀場明子（上智大学）「インドネシアのマルク紛争とラスカル・ジハード」

高岡豊（中東調査会）「ヒズボッラー研究の現状」

鷹木恵子（桜美林大学）「マイクロクレジットの動向と中東」

概要：

本研究会では、個別のイスラーム主義運動の事例に関する発表・議論を行った。各発表の内容は以下の通りである。

1. 堀場明子（上智大学）

「インドネシアのマルク紛争とラスカル・ジハード」

堀場氏は、1999年インドネシアで発生し、ムスリムとキリスト教徒の住民同士が衝突したマルク紛争について、その要因と経緯について概説し、紛争中にムスリム住民を支援する為に現れた軍事組織「ラスカル・ジハード」について報告された。

まず筆者が興味を惹かれたのは、紛争の実態に関する説明の中で度々言及された「陰謀の噂」であった。これは、ラマダン明けの祝日での喧嘩が紛争の発端にあったこと、ムスリムにとって重要な日にたびたびムスリムが攻撃を受けたことから、紛争はキリスト教徒による陰謀ではないかという噂が、怒りとともにムスリム住民の間に広がったという。氏は、この背後に、国軍が暗躍し対立を煽っていたことを指摘したが、情報の出所、伝達経路やメディアの状況などに着目して、国軍の関与も絡めながら、なぜ紛争がかように凄惨な結果を招いたのかを解明していくのも面白そうである。また、社会心理学的な視点からのアプローチも有効であろう。

ところで、紛争が凄惨な結果を招いたにもかかわらず、現在のところ、住民にさほどのトラウマがみられないという（無論、避難民は別であろうが）。また、紛争中はムスリム、キリスト教徒とも、それぞれ宗教を旗印に纏まりながら、互いに敵愾心を顕にしながらも、それぞれの信仰内容には厳格ではなかったとのことである。こうした、ある意味頓着の無さは、中東と大きく異なっている。これはマルクの風土や気質によるものかと、他の参加者も関心を示していた。

イスラーム主義との関連からいえば、改めて資金力を背景にしたサウジの影響力の大きさを認識させられた。ラスカル・ジハードおよびその母体である FKAJW の指導者ジャアファル・ウマル・ターリブ氏の経歴をみると、彼自身ハドラーミーでもあるが、サウジの資金援助を受けた学校で学び、パキスタンへ留学、アフガンでムジャーヒディーンのボランティアに参加している。明らかにワッハーブ派・サラフィー主義の影響を受けている一方で、スハルト政権崩壊による民主化の流れの中で設立した FKAJW では、パンナーの段階論を採用しており、その軍事部門であるラスカル・ジハードについても、主たる活動が社会活動であること、同胞団との類似性も見られる。この点について、参加者から彼の思想経歴を精査する必要があるとの指摘がなされた。

2. 高岡豊（中東調査会）

「ヒズボッラー研究の現状」

本発表の目的は、現時点におけるヒズボッラー研究の現状を、一次資料、二次資料を用いてレ

ビューすることであった。

発表者ははじめに、ヒズボッラーの政治的・社会的重要さを強調し、ヒズボッラーの多様な側面を概観した。発表者は、同党は米国・西洋諸国や地域の諸国の政治的争点であり、米国主導の「対テロ戦争」の文脈においては「テロ組織」としてその武装解除が問題となり、また、レバノン国内では合法政党としても顔も持ち合わせており、その成功は、また、レバノンの国内情勢とも大いにリンクしている、と指摘している。

さらに発表者は、代表的なヒズボッラーの出版物と二次資料を簡単に紹介し、そのレビューを行なった。その際、ヒズボッラー自身の出版物は、結党の経緯解説、思想や目標の注釈、活動の内情について内部情報を含む点で優れるが、同党にとって不都合な情報は発表されないという短所がある、と指摘された。また、二次資料は、ヒズボッラーの性質として「レバノンの内発的な運動」としての性質を重視する立場の研究と、イランやシリアのような外部勢力の代理者としての性質を重視した「外部決定論」的な研究に大別されるが、ヒズボッラーの個々の活動や時事問題についての考察に特化するなどして、ヒズボッラーの性質について特段見解を表明しない研究も多い、と指摘された。

最後に、ヒズボッラー研究における今後の課題として、同党の秘密性と性質のあいまいさ、ポスト・イスラミズムとの関連についての言及があった。

コメンテーターやフロアからは、各々の専門の事例に引きつけた、興味深いコメントがなされた。

3. 鷹木恵子（桜美林大学）

「マイクロクレジットの動向と中東」

2006年にムハンマド・ユヌスがノーベル平和賞受賞をきっかけに、再び注目され始めたマイクロクレジット、いわゆる超小規模金融（貸付）に関して鷹木恵子氏は「マイクロクレジットの動向と中東」という題で発表を行った。参加者の間ではあまりなじみのないものであったため、まずマイクロクレジットの一般的な考え方を確認し、次いで中東、特に鷹木氏が取り組んでいるチュニジア、アルジェリア、モロッコのマグリブ3国におけるマイクロクレジットの実施状況を時系列的に追った。

マイクロクレジットは自助努力による貧困削減を究極的な目標として掲げており、そのためには労働参加が困難な一般女性のエンパワーメントによる間接的な効果が期待されている。誕生当時とは異なり、現在ではサービスの多様化により徐々に形態が複雑になってきている。しかし、中東諸国での実施形態は、石油依存経済による格差是正を見据えた失業対策、若年層の雇用創出、起業訓練に目的が集中している。また、融資の多くは莫大な政府援助に基づいた超低金利によるものであり、自助努力による貧困からの脱出というよりは、形を変えただけの補助金プログラム

という感は否めない状況にある。参加者の中からも懐疑的な声が多数あげられたが、マイクロレジットこそ貧困削減に対する絶対的な万能薬であるという美化されたイメージが定着してしまっていることに原因がある、という共通認識を得られたのではないだろうか。

第3回研究会

日時：2007年2月24日（土）12：00～18：00

場所：上智大学 11-305 室

参加者：12 名

発表

横田貴之（日本国際問題研究所）「ムスリム同胞団研究の現状と課題」

清水学（上智大学）「金融資本の現段階的特徴とイスラーム運動との接点」

Daho Djerbal(ダホ・ジェルパール)氏(アルジェ大学)「The Struggle for Algerian National Liberation and Islam」

コメンテーター：小山田紀子氏（新潟国際情報大学）

概要：

本研究会では、前回に続いて、個別のイスラーム主義運動研究の現状理解、イスラーム主義運動と非イスラーム主義運動の比較、イスラーム主義運動の歴史的背景について議論を行った。各発表の内容は以下の通りである。

1. 横田貴之（日本国際問題研究所）

「ムスリム同胞団研究の現状と課題」

横田氏からは、エジプトのムスリム同胞団に関し、主に(1)同胞団運動の概略、(2)同胞団の思想、(3)同胞団研究の現状、(4)今後の研究上の課題、についての報告があった。

まず(1)の同胞団運動の概略について、ムスリム同胞団の創設から現在までの活動が、創設・発展期 - 停滞期 - 復活・再興期 - ムバーラク政権下の活動の、4つの時期区分から説明された。特に、近年ではエジプト人民議会で躍進する同胞団の動向について、同国における民主化の問題や多様な政治運動と関連づけた詳細な報告が行われた。

続いて、(2)同胞団の思想に関し、同胞団創設者ハサン・バンナーと、同胞団停滞期の著名イデオログであったサイイド・クトゥブの思想についての説明が行われた。特に後者については、イスラーム急進派に受容された「クトゥブ主義」とクトゥブ自身の思想に乖離があった点など、詳細な説明があった。さらに同胞団から派生した政党「ワサト党（政府非公認）」の唱えるイスラーム民主主義の理念や、同党の最近の動向について、興味深い考察が行われた。

(3)の同胞団研究の現状については、横田氏によれば、同胞団運動の変遷に先行研究が連動した結果、研究の動向は第1期(1960年代まで)、第2期(1970-90年代)、第3期(1990年代以降)に大別される。最近の傾向としては、エジプト政治と関連付けた研究や、特に我が国では同胞団の思想に関する研究が増加する傾向にあるという。

最後に、今後の同胞団研究の課題が提示された。横田氏は、1970年代の同胞団復活以降の研究が量的に不足しており、特に現地調査に基づく実態把握の必要性が高く、また初期の運動についても、同胞団機関紙や出版物から再検討する必要があると説いた。さらに、社会運動としての同胞団研究、様々な同胞団関係者の思想分析、各国の同胞団・同胞団系運動との比較研究等、様々な研究の可能性が提示された。

参加者からの質疑応答においては、同胞団の抱える合法性の問題と最新の動向、イスラーム国家に関する同胞団の視座、同胞団における他の思想(スーフィー、マウドゥディーなど)の影響力等について、活発な議論が展開された。

2. 清水学(上智大学)

「金融資本の現段階的特徴とイスラーム運動との接点」

清水氏は、昨今注目を集めているイスラーム銀行、イスラーム金融、イスラーム経済等について、世界金融システムの変容と関連づける巨視的な視座からの発表を行った。

まず清水氏は、上述したイスラーム経済等は現在の金融システムの中で市民権を獲得しつつあるが、現実には金利(利子)を重視する非イスラーム経済システムが主流である以上、イスラーム経済もそれらとのインターフェースを持たざるを得ないとし、その実例として、産油国のオイルマネー等が世界の主要国の金融市場や投資ファンドを通じて資産を運用してきたことなど、非イスラーム的な経済システムに運用先を見出してきた事情を挙げる。

しかし、清水氏によれば、経済におけるイスラーム的理念と非イスラーム的理念の相互関係は必ずしも調和的ではなく、例えば1997年にはじまるアジア通貨危機は、非イスラーム的な経済システムがイスラーム的な経済システムを危機に陥れた。他方、イスラーム経済の成長時期は、現代資本主義が新段階に入った1970年代と時期を同じくしており、清水氏はこれを偶然と見ることはできないのではないかと説く。

さらに、ここ数十年のマクロ経済、特に金融システムの変容について丹念な説明がなされた。1971年以降の世界金融システムを支える制度インフラは大きく変質し、これに伴い米国におけるケインズ派の後退と新古典派・マネタリズム台頭に見られるイデオロギー的構造転換が生じた。一連の変化の結果、昨今の世界金融システムは、米銀ネットワークの世界的拡大、投機対象としてのデリバティブの隆盛、ヘッジファンドの増大、大型M&Aの展開によって特徴づけられるようになり、中でもヘッジファンドの存在が大きくなった。

清水氏によれば、上記の傾向をイスラーム世界との接点から見ると、アジア通貨危機におけるイスラーム世界の政治経済危機のようにヘッジファンドの役割について警戒心が強いこと、デリバティブがイスラーム世界で受容されるのかについて見解が統一されていないこと、米主導の経済的グローバリズムへの異議申し立てとしてのイスラーム金融という見方など、様々な論点が存在するという。

質疑応答では、イスラーム金融・銀行システムとグローバリゼーションの関係、イスラーム経済の倫理的枠組などに関する質問が多く寄せられ、参加者の関心の高さがうかがわれた。

3. Daho Djerbal (アルジェ大学)

「The Struggle for Algerian National Liberation and Islam」

Djerbal 氏はフランス植民地期から内戦に至るまでのアルジェリアにおける宗教勢力と政治との関係について概観したのち、次のような結論付けを行った。すなわち、アルジェリアにおいて、宗教的なものが歴史の長期持続において持ち続けてきた重要性に比べれば、1930-40 年代に始まり、独立戦争を頂点とする政治運動の歴史はごく新しいものである。20 世紀前半を通じて、あらゆる政治的イデオロギーは、大衆の歡心を買うために、改革主義ないし伝統主義の宗教的勢力と折り合いをつけ、宗教的言辞を用いざるを得なかった。

1954 年の 11 月 1 日蜂起を率いた勢力は、こうした平和的な競合の伝統を初めて打ち破り、武力によって彼らの意志を示した。しかし、戦争が全国に拡大し、FLN/ALN の創設者たちが投獄・亡命といった困難な状況に陥るにつれて、政治・宗教的な旧勢力が FLN 内部を昇進し、彼らの思考を次第に浸透させていったのである。FLN/ALN 司令部を揺さぶった数多くの危機は、政治的なものと宗教的なものとの、こうしたせめぎあう関係の満ち引きという観点から見直すことが出来る。しかしながら、独立後、少なくとも 20 年間の間は、時代は 11 月 1 日蜂起の指導者たちの味方であり、宗教人たちは、武装闘争に真っ先に賛同しなかったことへの付けを払わされることになった。

(2)海外派遣・調査

カイロにおけるイスラーム運動関連の調査

期間：2007 年 2 月 25 日～3 月 4 日（8 日間）

国名：エジプト

参加者：横田貴之（日本国際問題研究所）

概要：

今回の出張の主たる目的は、カイロにおいてムスリム同胞団に関する調査を実施することであった。具体的な調査内容とその成果は次のとおりである。第 1 に、同胞団メンバーへの聞き取り調査を行い、その活動実態を把握すること。出張者は同胞団最高指導者顧問アブドゥルハミード・ガザ

ーリーなど指導者層とのインタビューを行い、最近の政府弾圧に対して従来どおり民主化を求め続けるとする基本方針を確認した。第 2 に、ワサト党メンバーへの聞き取り調査を実施すること。党首アブー・アラー・マーディーは国外滞在中のため会うことができなかったが、党本部に居合わせた党员とキファーヤ運動など民主化運動や同胞団との関係についてインタビューを行った。エジプトでは民主化が依然として重要争点であり、その実現のためにあらゆる勢力と協力の下で政府に圧力をかけていることが明らかとなった。第 3 に、同胞団関連の文献を収集すること。政府による弾圧のため同胞団書店は閉鎖されていたが、古書店から 1940-50 年代に刊行された同胞団雑誌『ムスリム同胞団』と『ダアワ』を約 20 部入手することに成功した。当該古書店には文献収集の継続を依頼した。

アルジェリアにおけるイスラーム主義運動組織の調査

期間：2007 年 3 月 10 日～3 月 20 日（11 日間）

国名：アルジェリア

参加者：私市正年（上智大学）

概要：

本出張は、上智拠点第 1 グループ「イスラーム主義と社会運動・民衆運動」の活動目的に沿って実施されたものである。アルジェリアでは、アルジェとガルダイヤにおいて、1990 年代のイスラーム主義運動高揚期における、活動の実態、とくに運動に関わった者からのインタビュー取材を行った。その結果、地域によっては（とくにイバード派のガルダイヤ）では必ずしも F I S が草の根まで浸透していなかったことが判明した。また、アルジェでは研究分担者の Zoubir Arous 氏とともに、アラウィー教団のシャイフと面会し、「イスラーム主義運動とスーフイズム」の関係について意見交換を行った。その結果、両者の関係が表にでない部分で深い関係があることがわかったが、なおより実証的研究が必要であることも判明した。

なお、その他の活動としては CREAD 訪問、グリシン・カトリックセンター訪問などを実施した。

成果としては、第一に、アルジェリアのイスラーム主義運動の原点にあたる、アルジェリア・ウラマー協会の資料入手、および元生徒からのインタビュー取材ができたことは、大きな成果であった。第二に、CREAD 所長との間で相互理解を得たことで、第 1 グループの活動を推進する上で必要な人脈、組織的協力関係を強めることができた。

ヨルダンにおけるイスラーム政治運動の調査、文献・情報収集

期間：2007 年 3 月 14 日～3 月 28 日（15 日間）

国名：ヨルダン

参加者：北澤義之（京都産業大学）

概要：

主な目的

今回は、ヨルダンにおける有識者（学者、ジャーナリスト、政治家・活動家）との意見交換により、ヨルダンとパレスチナにおける中心的イスラーム組織の現状に関する基本的情報を整理し、人的ネットワークを構築するとともに、基本資料の収集に当たることを主な目的とした。

面会した主な識者

(1) イスラーム政治運動活動家

ヨルダン・ムスリム同胞団副総監ジャミール・アブー・バクル、イスラーム行動戦線シュラー会議議長ハムザ・マンスール、イスラーム行動戦線事務局長ズケイ・バニー・アルシード、ヨルダンエンジニア協会議長（ムスリム同胞団）ワエル・アクラム・サカ等

(2) 学者

ヨルダン大学政治学科長サアド・アブー・ダイエ教授、ヨルダン大学戦略問題研究所ムスタファ・ハマルネ教授、同研究所マハジュブ・ズウェイディ教授、バルカ科学技術大学シャリーア学部ハムディー・ムラド教授、地中海国際問題センター・ムスタファ・エイエダート教授等

(3) ジャーナリスト

ムハンマド・アブー・ルマーン（アルガド紙）、サミーフ・アルマアイタ（アルガド紙）、ガーズィ・アルサアディ（独立）、ファハド・ヘイターン（アルヤウム・アルアラビー紙）、ナビール・シャリーフ（ドストール紙）、フセイン・アブー・ルマーン（独立）等

主な成果

以上の識者とのインタビューから、イスラーム活動家の見解としては、ほぼ集約的に、腐敗防止や民主化推進で実効的に活動しているのは、イスラーム運動のみであるため大衆のイスラーム運動への支持は更に拡大していること、歴史的に維持されてきた政府との良好な関係は94年のヨルダンのイスラエル承認以来、対立に転じており、近年は特に厳しくなっている。ただし、議会における左派を含めた野党の協調行動を取りまとめることは、同運動の戦略の範囲内に入っていることを確認できた。また、一部で関係断絶が伝えられるハマスとヨルダンのムスリム同胞団の関係は依然協力関係にあるという認識は共通していた。

これに対し、学者・ジャーナリストの見解は多様であった。イスラーム系組織への支持が、減少しているとの意見は少なかったが、せいぜい横ばいであるという意見と拡大しているという意見が分かれた。政府との関係は、悪化しているとする意見が多い一方、結果的にヨルダンのイスラーム運動は、政府と妥協する道を選ぶであろうという考えと、対立がこのまま拡大していくとの意見、或いは政府との対立はあっても国王との対立は避けるであろうとの指摘もあった。識者の意見でほぼ共通して見られた指摘として、ヨルダンやパレスチナのイスラーム運動は民族解放の観点からパレスチナ問題と交錯して展開されており、ヨルダンのイスラーム運動は近年のパレスチナとヨルダ

ンとの関係に大きな影響を受けているという点である。

資料的には、ハマースに関する出版物はヨルダンでは限定されているものの、ヨルダン大学戦略問題研究所はヨルダンや西岸・ガザの大衆とイスラーム運動に関する独自調査を継続していることを確認し、またダール・アルジャリール出版などの独立系研究所が西岸やガザのイスラーム運動資料のファイリングを行っており、資料面での研究協力が可能との言質を得る事ができたのは収穫であった。

(3)外国人研究者の招聘

Zoubir Arous (ズバイル・アルース) 氏招聘

所属：アルジェ大学 (アルジェリア)

期間：2006 年 12 月 14 日～12 月 20 日 (7 日間)

活動：

2006 年 12 月 16 日 (土) のグループ 1 第 1 回研究会においてアルジェリアのイスラーム主義運動に関する発表を行った。詳細は (1) 研究会活動 第 1 回研究会の該当箇所を参照。

研究グループ2：「東南アジア・イスラームの展開」

【組織】

（研究グループ2メンバー）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 （担当研究テーマ）
川島 緑	上智大学外国語学部教授	研究グループ2代表者 （東南アジア・政治運動研究）
菅原 由美	天理大学国際文化学部講師	研究分担者 （東南アジア・宗教運動研究）
服部 美奈	名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授	研究分担者 （東南アジア・教育研究）
山本 博之	京都大学地域研究統合情報センター助教授	研究分担者 （東南アジア・民族運動研究）
新井 和広	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手	研究分担者 （東南アジア・中東交流史）

（研究グループ2研究協力者）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	担当研究テーマ
青山 亨	東京外国語大学外国語学部教授	イスラームとジャワ土着文化のインターフェース
篠崎 香織	ルクセンブルク欧亜大学客員研究員	イスラム圏東南アジア及びマレー世界における華人コミュニティ
富田 暁	岡山大学大学院文学研究科修士課程	ボルネオにおけるアラブ人
奥島 美夏	神田外語大学専任講師	社会人類学（カリマンタン少数民族の移住史、民族間関係など）
黒田 景子	鹿児島大学法文学部教授	南タイ、北部マレーシアにおけるタイ語話者ムスリム居住地域の歴史研究

山口 裕子	吉備国際大学社会学部非常勤講師	インドネシア東南スラウェシ、ブトン社会におけるイスラーム関連のジャウィ・ウォリオ文書の研究
西 芳実	東京大学大学院総合文化研究科助手	アチェ近現代史（イスラーム圏東南アジアにおける災害対応過程）
坪井 祐司	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員	マレーシア近代史
國谷 徹	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程	オランダ領東インドにおけるイスラーム政策、インドネシアからのメッカ巡礼
西尾 寛治	東洋文庫（研究部）研究員	マレーシア・インドネシア近世史

【平成18年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

初年度にあたる本年度は、今後の研究活動の基礎固めを目的として、研究の基本方針、具体的な活動内容・計画の策定、研究体制の確立に力を注いだ。具体的には、ジャウィ文書を含む東南アジア現地語資料の収集と資料研究、および、それらを利用した東南アジア各地のイスラーム思想や運動の比較研究を中心として活動を行うことにし、以下の3つを柱として研究を進めることにした。

東南アジア各地のキターブの収集・整理・目録作成・公開、キターブの内容、および、出版・流通状況に関する研究

ジャウィ文書を含む現地語資料を利用した東南アジア・イスラーム地域の研究：人間集団の分類概念の比較研究など

東南アジア・イスラーム研究の再検討とジャウィ文書研究の意義と課題

そして、これらのテーマに関連する他の研究プロジェクトや研究会（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「マレー世界における地方文化」、京都大学地域研究統合情報センター共同研究会「イスラーム教圏東南アジアにおける社会秩序の構築と変容」、ジャウィ文書研究会：事務局：青山亨(東京外国語大学)など）と連携して研究を行うことにした。

また、マレーシア、インドネシア、フィリピンでキターブ収集を行うとともに、2007年度5月開催予定の国際シンポジウム「バンサとウンマ：東南アジア・イスラーム地域における人間集団の分類概念の比較研究」の企画を練り、準備を行った。ニューズレターの発行は準備が整わず実現できなかったため、2007年度の課題とする。

2. 研究活動の記録

(1) 研究会活動

第1回研究会

日時：2007年1月12日(金) 15:00～1月14日(日) 11:00

会場：天理大学研究棟（奈良県天理市）

参加者：13人

プログラム：

1月12日(金)

15:00 天理大学研究棟3階インドネシア語共同研究室集合

15:00-17:00 天理大学図書館見学、資料閲覧

17:00- 天理教神殿・礼拝場見学、懇談・研究打ち合わせ

1月13日(土)：天理大学3階第3会議室

午前の部：司会：青山亨

9:00-10:30 小林寧子「インドネシア・イスラーム研究と Martin Van Bruinessen」

10:45-12:30 国谷徹：「Azwardi Azra 著、The Origin of Islamic Reformism in Southeast Asia: Networks of Malay-Indonesian and Middle-Eastern 'Ulama' in the 17th and 18th Centuries の紹介とレビュー」

午後の部：司会：奥島美夏

14:00-16:00 菅原由美・服部美奈：「M. Van Bruinessen 著、Kitab Kuning: Pesantren dan Tarekat: Tradisi-Tradisi Islam di Indonesia の紹介とレビュー」

16:30-17:30 坪井祐司：「Mohd. Nor Bin Ngah 著、Kitab Jawi: Islamic Thought of the Malay Muslim Scholars の紹介とレビュー」

17:30- 総合討論：討論者：西尾寛治など

1月14日(日)：天理大学研究棟3階第3会議室

9:30-11:00 今後の研究活動に関する打ち合わせ

11:00 現地解散

概要：

東南アジアのキターブに関する研究状況を把握し、基礎的知識を共有し、それを踏まえて今後の研究の方向性を定めることを目的とし、合宿研究会を行なった。参加者が分担して以下の基本文献について報告し、議論を行った。

- 1) Van Bruinessen. 1995. *Kitab Kuning: Pesantren dan Tarekat: Tradisi-Tradisi Islam di Indonesia*. Bandung: Mizan.
- 2) M. Van Bruinessen. 1990. "Kitab Kuning: Books in Arabic Script Used in the Pesantren Millieu:

Comments on a New Collection in KITLV Library BKI", *Bijdragen tot de Taal-,Land-en Volkenkunde van het Nederlandsch-Indie*. 146(2) (3): 226-269.

3) Azmardi Azra. 2004. *The Origin of Islamic Reformism in Southeast Asia: Networks of Malay-Indonesian and Middle-Eastern 'Ulama' in the 17th and 18th Centuries*. Allen & Unwin, Hawaii Univ.Press.

4) Mohd.Nor Bin Ngah. 1982. *Kitab Jawi: Islamic Thought of the Malay Muslim Scholars*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

議論では、キターブ・ジャウィ、キターブ・クニン(クニンは黄色を意味するマレー語)、キターブということばが意味するものや概念が必ずしも一様ではなく、地域や時代によって異なること、研究者によっても用法が異なることが指摘され、これらの概念の明確化が必要であることが確認された。研究会後もメーリングリストで議論が継続され、インドネシアのプサントレン(イスラーム寄宿塾)で学ぶ人々の間では、キターブ・クニンは「アラビア語の宗教書古典」と認識されていたことが紹介された(小林寧子)。キターブの概念や用法については、今後さらに検討を続けることになった。

また、以下のキターブを東南アジア各地で分担して収集することにした。 東南アジアで作成・出版されたアラビア文字現地語(ジャウィ)イスラーム書、 東南アジアで作成・出版されたアラビア語イスラーム書、 東南アジア以外で出版された東南アジア諸言語アラビア文字表記(ジャウィ)イスラーム書、 東南アジア以外で作成・出版されたが東南アジアで流通していたアラビア語イスラーム書。

第2回研究会

国際ワークショップ「海域東南アジアにおける奴隷交易と社会変容」Slave Trade and the Transformation of Societies in the Maritime Southeast Asia

日時：2007年3月26日(月) 13:30-17:00

会場：上智大学四谷キャンパス 7号館 12階第2会議室

参加者：約15名

プログラム：

James Warren(ジェームズ・ウォレン)(マードック大学、東南アジア社会史): The Port of Jolo and the Sulu Zone Slave Trade: An 1845 Report.

奥島美夏(神田外国語大学、文化人類学): Destruction and Reorganization of "Tanah Tidung", or Northeast Borneo: The Natives' Response towards the Sulu Sultanate and the Establishment of the Bulungan Sultanate.

概要：

Warren氏は、19世紀の東南アジア海域世界、その東部に位置するスルー諸島一帯とボルネオ

島東北部、フィリピン諸島において、奴隷交易が地域社会とその住民に与えた影響について、スペイン海軍の記録に基づいて詳細な報告を行った。この報告は、『上智アジア学』25号（2007年12月刊行予定）に収録の予定である。奥島氏は、ボルネオ島東北部のティドゥン人のエスノヒストリーについて、フィールドワークや現地語文書に基づいて報告を行った。二つの報告をつなげる議論を行う時間がなかったことが残念であった。

(2)海外派遣・調査

インドネシアにおける文献調査

期間：2007年2月19日～2007年2月26日（8日間）

国名：インドネシア

参加者：西芳実（東京大学）

概要：

ジャカルタの国立国会図書館においてオランダ領東インド／インドネシアで発行されたイスラム関係の定期刊行物（主としてローマ字表記のインドネシア語雑誌）の所蔵状況を確認した。ジャウィ表記の定期刊行物については、2006年から刊行を開始し「インドネシアで初めてのジャウィ誌」を名乗る『チャハヤ・ヌサンタラ』誌の編集部を訪問して刊行の経緯や意図、編集方針などについて聞き取り調査を行なった。

2月24日からはバンダアチェのスイスベル・ホテルで開催された第一回アチェ・インド洋研究国際会議にオブザーバーとして参加した。紛争地や大規模自然災害の被災地として注目を集めてきたアチェについては実践的な提言をめざす調査・研究の進展が著しいが、本国際会議ではそうした調査・研究の成果とともに従来からの考古学や歴史学、文化人類学の成果が報告され、TSUNAMI後のアチェが研究者の取り組み方という点においても緊急段階を終え、新たな段階に入ったことを感じさせた。アチェ住民も多く出席し、特にアチェにおけるイスラム法の施行に関するセッションでは積極的な発言が見られ、イスラム法のあり方をめぐってはアチェ社会内部に多様な考え方が確認された。

マレーシアにおける文献調査

期間：2007年2月21日～3月22日（30日間）

国名：マレーシア

参加者：西尾寛治（東洋文庫）

概要：

マレーシア国立図書館、スルタン・イドリス教育大学、マレーシア科学大学などの研究機関・大学所属の研究者を訪問し、マレーシアにおけるキターブ・クニンやキターブ・ジャウィに関す

る研究動向及び出版状況を調査した。

また、上記の研究者から得た情報も参考にしながら、クアラ・ルンプール（マラヤ大学書籍部、デワン・バハサ・ダン・プスタカ書籍部、プスタカ・アンタラ書店など）、カジャン（マレーシア国民大学出版部・書籍部）、マラッカ（ババルディンジョハ出版社）などの書店その他を訪問し、キターブ・クニン、キターブ・ジャウィをはじめとするイスラーム関係文献の収集並びに日本への発送作業を行った。

フィリピンにおけるイスラーム関連資料収集

期間：2007年3月10日～3月21日

国名：フィリピン

参加者：川島緑（上智大学）

概要：

南ラナオ州マラウィ市のミンダナオ国立大学マミトゥア・サベル研究センター図書館、ダンサラン学院ピーター・ガウィン記念研究センター図書館などで資料調査・文献収集を行うとともに、公設市場の店舗でイスラーム書を購入した。イスラーム指導者の個人宅を訪ね、蔵書の閲覧、デジタル・カメラでの撮影も行った。マニラ市では、キアボ地区のイスラーム・コミュニティ内の書店でイスラーム書を購入した。これにより、マラナオ語・マギンダナオ語・タガログ語・英語・アラビア語などのイスラーム書 100 点以上を収集することができた。

インドネシアにおけるジャウィ文書調査

期間：2007年3月12日～2007年3月21日（10日間）

国名：インドネシア

参加者：山本博之（京都大学）

概要：

インドネシアの出版におけるジャウィ文字の使用について調査するため、(1)ヒダヤトゥラ大学を訪問してインドネシアのイスラム系出版物に関する歴史的経緯について情報・意見の交換を行った。1950年代まではマラヤ・シンガポールとインドネシアの間で出版物を通じた交流が見られるが、1960年代に入るとマレーシアとインドネシアの出版物どうしの交流が限定的になってきたことなどを確認した。(2)ジャカルタ市内のチャハヤ・ヌサントラ出版社を訪問し、近年のジャウィ文字による出版について調査を行った。マレーシアにおけるジャウィ出版の影響を受けてインドネシアでも2006年にジャウィによる定期刊行物である『チャハヤ・ヌサントラ』が創刊されたこと、ただし発行部数と流通は限られており、読者の対象は主にイスラム寄宿塾が想定されていることなどの情報を得た。(3)国立図書館を訪問し、現地語定期刊行物の資料収集を行った。国立

図書館に所蔵されている雑誌の一覧を確認したうえで、『ヒダヤトゥッラー』や『サビリ』など、現在のインドネシアにおけるイスラム系定期刊行物のうち主要なものの過去数年分の記事を手に入れた。

(3)外国人研究者の招聘

James Warren (ジェームズ・ウォレン) 氏招聘

所属：Professor, Murdoch University (マードック大学教授)

招聘期間：2007年3月24～3月29日

講演会・研究会の内容：

3月25日の国際ワークショップ「海域東南アジアにおける奴隷交易と社会変容」で報告を行った(詳細は上記研究会参照)。Warren氏訪日の機会を利用して、上智大学アジア文化研究所では以下の講演会・ビデオ上映会も実施した。

() 講演会(共催：東南アジア学会関東部会)

日時：2007年3月27日(火) 17:30 - 19:00

会場：上智大学四谷キャンパス 図書館9階 L-911号室

参加者：約30名

講演題目：台風：フィリピンの気候・歴史・社会

Typhoon: Climate, History and Society in the Philippines.

() ビデオ上映会：

日時：2007年3月28日(水) 10:30-12:00

会場：上智大学四谷キャンパス 11号館209号室

参加者：6名

19世紀末から20世紀初期のシンガポールを舞台とし、Warren氏の著書 Ah KU and Karayuki-san にもとづいて制作された音楽劇、Broken Birds: An Epic Longing(製作：Theatreworks Singapore, 監督：Ong Keng Sen) の上映とディスカッション。

研究グループ3：「スーフィズムと民衆イスラーム」

【組織】

（研究グループ3メンバー）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 （担当研究テーマ）
赤堀 雅幸	上智大学外国語学部助教授	研究グループ3代表者 （近現代聖者信仰研究）
後藤 明	東洋大学文学部教授	研究分担者 （前近代聖者信仰研究）
東長 靖	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究 科助教授	研究分担者（＊2006年12月まで） （スーフィズム思想研究）
三沢 伸生	東洋大学社会学部助教授	研究分担者 （タリーカ研究）
森本 一夫	東京大学東洋文化研究所助教授	研究分担者 （預言者一族崇敬研究）
高橋 圭	人間文化研究機構地域研究推進センターPD 研究 員 / 上智大学アジア文化研究所客員研究員	研究分担者 （近現代タリーカ研究）

（研究グループ3研究協力者）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	担当研究テーマ
朝田 郁	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究 科一貫博士課程	東アフリカにおけるハドラミーお よびアラウィー教団
新井 一寛	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究 科一貫博士課程	地域研究・宗教学・宗教社会学・ 映像人類学
今松 泰	同志社大学神学部非常勤講師、神戸大学大学院 文化学研究科非常勤講師	オスマン朝史（宗教史・文化史）
大塚 和夫	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 所教授	社会人類学、中東民族誌学
加藤 瑞絵	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程	イスラーム思想史

鎌田 繁	東京大学東洋文化研究所教授	シーア派イスラーム思想
河原 弥生	日本学術振興会特別研究員（東洋文庫）	中央アジア史
小林 寧子	南山大学外国語学部教授	インドネシア近現代史
小牧 幸代	高崎経済大学地域政策学部講師	社会人類学（南アジア・ムスリム社会）
坂井 信三	南山大学人文学部教授	西アフリカのイスラーム
篠田 知暁	京都大学文学研究科博士後期課程	シャリーフ王朝期モロッコにおける諸社会集団の形成と変容
高尾賢一郎	同志社大学大学院神学研究科歴史神学専攻一神教学際研究コース博士後期課程・	現代シリアにおけるシャイフ・アフマド・クフターローのイスラーム理解、スーフィズム思想
ダニシマズ・イディリス	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫博士課程	トルコにおけるスーフィズム、スーフィーによるクルアーン解釈
東長 靖	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授	スーフィズム思想研究（＊2006年12月以降 KIAS 研究分担者、SIAS グループ3 研究協力者）
外川 昌彦	広島大学大学院国際協力研究科助教授	文化人類学（南アジアのイスラーム研究）
飛内 悠子	上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻博士前期課程	北部スーダンの教育人類学
中西 竜也	京都学園大学非常勤講師（京都大学大学院文学研究科・大学院聴講生）	中国イスラーム史
二宮 文子	京都大学西南アジア史学研究室博士後期課程	中世インド文化史
平野久仁子	上智大学大学院外国語学研究科地域研究専攻博士後期課程	インド思想、宗教社会学（スワミー・ヴィヴェーカーナンダの思想と実践）

藤井 千晶	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫博士課程	東アフリカにおけるイスラーム知識人
堀川 徹	京都外国語大学外国語学部教授	イスラーム期の中央アジア史
丸山 大介	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫博士課程	イスラームの聖者論と聖者信仰
茂木 明石	上智大学大学院外国語学研究科地域研究専攻博士後期課程	歴史学、中世エジプトの聖者信仰
守川 知子	北海道大学大学院文学研究科助教授	イラン・イスラーム史
森山 央朗	独立行政法人日本学術振興会・特別研究員（PD） （受入機関：財団法人東洋文庫研究部）	歴史（10～12世紀マシュリク地域におけるハディース学者の社会的・文化的活動）
矢島 洋一	京都外国語大学国際言語平和研究所嘱託研究員	スーフィズム史
吉田 京子	駒沢大学非常勤講師	初期シーア派思想

【平成18年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

今年度は、今後5年間の活動基盤の整備として、以下の5つの活動を行った。

今後5年間の活動計画の確定

まず今後の研究計画として、「タリーカ」「預言者一族崇敬」「スーフィズムとサラフィズム」という3つのテーマを中心にして共同研究を進めてゆくことが確認された。また、2010年度開催予定の第3回中東研究世界大会（WOCMES-3）においてスーフィズムとサラフィズムに関するパネルを組むことも決定し、その準備に取り掛かった。

研究分担者・研究協力者間のネットワークの構築

研究分担者・研究協力者間の連絡には現有のメーリングリスト（i-saint、wali、sufi）を維持しながら、SIAS、IASのメーリングリストも随時活用した。また京大拠点（KIAS）の設置に伴い、そのユニット4「広域タリーカ」と連携して活動を進めた。

基本資料の購入

まず、中東イスラーム研究の基本文献カタログである Index Islamicus (ネットワーク版、使用者制限なし) を購入した。この他、Encyclopaedia of Islam (ネットワーク版、使用者制限なし) など今後の文献調査・収集に必要不可欠な資料を数点購入した。

研究会および研究合宿の開催

1 月に上智大学において「預言者一族崇敬」をテーマとした第 1 回研究会を開催し、2 月には宮の下の合宿施設において「タリーカ」をテーマとした研究合宿を開催した。いずれもグループ 3 の主要研究テーマであり、研究会・合宿を通して、分担者・協力者の間に今後の研究活動に向けた共通理解を得ることができた。

海外出張

グループ 3 においては文献調査だけでなく、フィールド調査による各地の聖者信仰・スーフィズム実践の実態の調査も同時並行で進めてゆく予定である。今年度は、トルコのイスタンブールを中心に、聖者廟、テッケ、アレヴィー・センターの調査を行い、そこでの聖者信仰・スーフィズム実践の実態を調査した。

2. 研究活動の記録

(1) 研究会活動

第 1 回研究会

日時：2007 年 1 月 6 日 (土) 13:00 ~ 17:00

場所：上智大学 2-630a 室

参加者：20 名

発表：

森本一夫 (東京大学) 「サイイド/シャリーフ - 基礎的事実とアプローチ」

新井和広 (東京外国語大学) 「ハドラミー・サイイド一家系氏再構築の問題点」

コメンテーター：小牧幸代 (高崎経済大学)

概要：

グループ 3 第 1 回研究会においては、「預言者一族」をテーマとして森本・新井両氏による研究発表が行われた。それぞれの発表内容は以下の通りである。

1. 森本一夫 (東京大学) 「サイイド/シャリーフ - 基礎的事実とアプローチ」

森本氏は、預言者一族研究の 3 つの方向性として、系譜学、「美德物」、サイイド・シャリーフ論があることを示した上で、「サイイド/シャリーフ論について押さえておきたい要素」、および「アプローチの道筋の提案」について述べた。前者については、レジュメの 1 章「サイイド/シャリーフとは誰か」で、後者については 3 章の「サイイド/シャリーフへのアプローチ」でそれぞれ説明がなさ

れた。

前者について、サイド/シャリーフとは、第1に、クルアーンの33章33節と42章23節における言葉によって規定される権利を有するものたちである。また、それに該当するものとして、クライシュ族やアブドマナーフ族、ハーシム家(アッバース家+ターリブ家)、ターリブ家、アリー家、ファーティマ家などが挙げられた。第2に、サイド、シャリーフ、ミール、ハビーブ、トラなど、慣習的な尊称によって呼ばれる人々である。しかし、森本氏はファーティマ家を中心とするアリー家、ターリブ家くらいで考えるのがまずは適当であるとした。第3に、男系・女系についてである。男系での血統の継承が基本原則である。しかし、森本氏はファーティマの存在、系譜とシャラフ(シャリーフとしての地位)の相関の微妙さ、女系を認めた社会の広範な存在などの問題があると指摘した。

後者について、4つのアプローチが提起された。第1に、歴史の中のサイド・シャリーフである。ここでは中世モロッコにおける諸王朝下で Charifisme が持った意義などについて、他地域との比較を通じた研究を行うことが挙げられた。第2に、同時代に生きるサイド/シャリーフである。ここでは、エジプトのナキーブ事務所(タリーカとの関わり)、モロッコのシャリーフ連盟、ナキーブ連盟などの事例が挙げられた。第3に、言説の中のサイド/シャリーフである。ここでは「美德物」を中心とする一連の言説の展開、言説の広がり具合の検討(「中世的イスラーム」「近現代的イスラーム」(東長)の相違にも注意して)が挙げられた。第4に、解釈の対象としてのサイド/シャリーフである。ここでは「聖遺物」としてのサイド/シャリーフや「内なる異人」としてのサイド/シャリーフが挙げられた。

また、この他にも、レジュメの2章「いくつかの逸話」において、預言者一族にまつわる逸話が紹介された。それには、スンナ派の親サイド/シャリーフ文献(美德物)に見られる逸話(粉屋アブー・ハサンの逸話)、聖なる先祖による特別な保護(夢を通じて権限、それを喚起するサイド/シャリーフの祈願)などがあった。

質疑応答では、大塚和夫氏が社会集団論的観点から集団概念の精緻化の必要性や男系・女系の分析上の区別、メンバーシップの問題などについて述べた。

2. 新井和広「ハドラミー・サイド一家系再構築の問題点」

イエメンのハドラマウト地方からインド洋周辺地域へのアラブ(ハドラミー)移民の歴史を研究してきた新井氏は、ハドラミーの家系そのものを扱った研究が少ないことに着目し、有力家系の一つであるアッタース家を事例として、家系史の再構築を試みた。

まず、ハドラミー・サイドの概要が述べられた。ここでは、ハドラミー・サイドのハドラマウト社会内での役割、サイド移住前にその役割を担っていたマシャーイフ層との関係、サイド・非サイドの階層分化などが論じられた。

次に、新井氏はアッターズ家に焦点を当て、その歴史を論じた。アッターズ家は大統領や大臣、議員、学者を輩出するなど、有力家系の一つである。このアッターズ家の家系は、17世紀後半に成立した。その詳細な家系の存在により、男子成員の大半の血統を追うことができ、メンバーがある程度厳密に決まることが指摘された。

続いて、家系「史」の問題点が検討された。新井氏は、アッターズに関して書かれたもののほとんどが聖者伝であることから、聖者とみなされなかった人々の生活が見えてこないという問題点を挙げた。また情報源が少ないことも問題点として挙げている。

その後、議論はハドラーミー・サイド全体の系図に移る。新井氏は、系図には出版されるものと出版されないものがあることに着眼する。そして、出版される系図に関しては、生成された歴史を公開することで、預言者の子孫であるという「事実」と祖先の偉業を宣伝していること。他方、系図を出版しないことについては、オリジナルの文書を外部に出さないことで家系メンバーや他のサイド内の結束を強化する機能があると論じた。

まとめとして、アッターズ家の成功、つまり著名な人物を輩出する理由を以下の3点が挙げられ。つまり、(1)アッターズ家のメンバーが多様であること、(2)高い教育水準と教育を重視する姿勢に起因する異なる社会への適応力、(3)親戚にウラマーや学者、政治家がいるという利点をもつ家庭環境の3点である。最後に自分の家系がウラマーや大臣、学者を輩出していることを文書で追えることから、家系を「血統資本」という括り方で論じることは可能か、という問題提起をして発表を終えた。

質疑応答では、「血統資本」の妥当性や、アッターズ家の成功とサイド・シャリーフの関係性、系図と系譜の用語法について、活発な議論が行われた。

研究合宿

日時：2007年2月27日（火）～2月28日（水）

場所：KKR 宮ノ下

参加者：18名

発表：

藤井千晶（京都大学）「タリーカ像の再検討—ザンジバル北部の事例から」

コメンテーター：高橋圭（人間文化研究機構）

高尾賢一郎（同志社大学）「現代シリアの聖者、アフマド・クフターロー研究—そのスーフィズム理解を中心に」

コメンテーター：赤堀雅幸（上智大学）

二宮文子（京都大学）「中世北インドにおける14のハーンワダー」

コメンテーター：小牧幸代（高崎経済大学）

書評発表：(Jong, F. de & B. Radtke (eds.), *Islamic Mysticism Contested: Thirteen Centuries of Controversies and Polemics*, Leiden: Brill, 1999 所収論文より)

丸山大介(京都大学)Josef van Ess, “Sufism and Its Opponents : Reflections on Topoi, Tribulations, and Transformations”

加藤瑞絵(東京大学) Gerhard Böwering, “Early Sufism between Persecution and Heresy”

茂木明石(上智大学) Th. Emil Homerin, “Sufis and Their Detractors in Mamluk Egypt : A Survey of Protagonists and Institutional Settings”

概要：

本研究合宿においては、研究発表 3 本と書評発表 3 本がなされた。研究発表はそれぞれザンジバル、シリア、インドにおけるタリーカと聖者信仰についての事例が発表された。書評発表では、1999 年に出版されたスーフィズム批判に関する論集の中から、3 つの論文が選ばれた。研究発表の内容はそれぞれ以下の通りである。

1. 藤井千晶(京都大学)「タリーカ像の再検討—ザンジバル北部の事例から」

藤井氏の発表は、ザンジバル北部のマウリディ(マウリド)におけるズィクリ(ズィクル)グループの活動状況の分析を通して、タリーカ像の再検討を行なうものであった。はじめに氏は、19 世紀オマーンの首都が遷都されると、ザンジバルはインド洋海域世界や東アフリカでの中心地になり、東アフリカの内陸部へ向かう玄関口ともなったことを述べ、ザンジバルが東アフリカのイスラーム化にとって最も重要な拠点となった歴史的・地理的な概要を説明した。特に 19 世紀以降のこの地域のイスラーム化はタリーカによる布教活動が中心となっており、ザンジバルにおけるタリーカの展開を検討することは東アフリカのイスラームを理解するうえでも欠かせないことを指摘した。この地域のタリーカ研究については、研究者によってそれに関する評価が分かれること、その報告数が少ないこと、現在のタリーカの実態は不明であること、タリーカの日常的実践について体系的な研究がなされていないことなどが指摘された。まず氏は、5 つのタリーカ(すなわち、1 カーディリー教団、2 シャーズィリー系やシュルティー教団、3 リファーイー教団、4 アラウィー教団、5 アフマディー・イドリスィー・ダングラーウィー教団)に関する文献資料のなかの記述を整理し、先行研究による既存のタリーカのイメージに対して、マウリディへの参与観察と指導者へのインタビューから「ズィクリグループ」という暫定的な集団概念を設定することで本発表の出発点とした。氏の現地調査から抽出されるタリーカの実態としては、全てのグループにズィクリ実践が観察されたという共通点と、グループ名の由来が名祖名かズィクリ名かという相違点が見出された。例えば、カーディリーやシャーズィリーなどはシルスィラを持ち名祖名をグループ名としているが、一方でその他殆どのグループはシルスィラを持たず、名祖名ではなくズィクリ名をグループ名の由来としている実態が明らかにされた。また、例えばエジプトのマウリドは預言者生誕祭と聖

者祭を指すが、ザンジバルのマウリディは犠牲祭、断食明けの祭、結婚式や出産（通過儀礼）をも含む拡張した意味で捉えられており、このような儀礼においてズィクリは欠かせない要素となっている実態が指摘された。総括として氏は、スィルスィラが存在するシャーズィリーやカーディリーといった従来のタリーカ像とは異なり、ザンジバルにおけるタリーカとはズィクリを行なう集団であること。ザンジバルにおけるマウリディは単に生誕祭のみではなく祭一般や通過儀礼をも含むこと。頻繁に行なわれるマウリディに関わっているものこそがタリーカであり、ザンジバルにおける日常生活の中で、タリーカは重要な役割を担っていることを結論とした。質疑応答では、ズィクリグループ（＝タリーカ）の指導者と教団員とで交わされる入門儀礼とイジャーザが実践者たちの間でどのように解釈され実践されているのかという問題関心にそって、ザンジバル革命前後のズィクリグループの連続性、儀礼の継承はいかになされるのかなどの議論が進められた。藤井氏の発表は、儀礼を行なう集団をひとつのキーワードとして現地の人々が認識し実践する「組織」の在り方という実態から、従来の研究によるタリーカのイメージを反省的に再検討するものであり、今後のタリーカ研究を行なう上で重要な手がかりとなるであろう。

2. 高尾賢一郎（同志社大学）

「現代シリアの聖者、アフマド・クフターロー研究 – そのスーフィズム理解を中心に」

発表は、その生涯において宣教活動が続け、今なお多くの弟子に聖者として慕われている現代シリアのアフマド・クフターロー（1912/15-2004）について、そのスーフィーとしての側面を考察するものであった。彼に関する先行研究はその功績を讃える内部資料と、彼をシリア政権に擦り寄った策略家と見る外部資料の二つに大別できる。発表では、前者を通して見る彼のライフ・ヒストリーに注目して、彼のスーフィズム理解や彼を擁したナクシュバンディー支教団（カフターリーヤ）について述べた。

クフターローはグランド・ムフティーや宗教間対話に従事する国際的宗教家というような政治的な公人のイメージが強い。しかし彼のスーフィーの側面が目立たない背景には、彼が生まれ育った歴史背景と教育環境を通して構築された、党派主義に対する姿勢がある。彼はその幼少期に父や多くの同胞による対仏抵抗運動を目の当たりにし、学派や宗派に拘らないイスラームの統一をその強い教育理念とした。結果として彼はナクシュバンディー教団のスーフィーであったが、スーフィーと法学者や法学派間の連帯を強く呼びかけ、自身のスーフィー的資質を周辺化することに努めた。

スーフィズムに関するクフターローの言及を見てみると、イスラーム諸学の中でスーフィズムに特別な地位を与え、そこに不可欠な性質を見出しているのは明らかである。しかし一方で彼はスーフィズムを一般的で、特別な儀礼や方法を伴うものとはしなかった。自身のタリーカにおいても彼は儀礼性を伴ったバイアやズィクルを忌避し、またスーフィズムに特化した専門用語の使用も避けた。またサラフィー主義者との対話において、自身を「サラフィー・スーフィー」と称し、その調

和を計った。

コメントおよび質疑応答では、情報整理と方法論に関する議論を行なった他、サラフィー主義や他の改革主義的スーフィーとの比較を通じた意見が出された。

3. 二宮文子（京都大学）「中世北インドにおける14のハーンワダ」

二宮氏の発表は、14 - 15 世紀にかけて、インドのスーフィーたちによる文献に頻出する「14 ハーンワダ」という語について、その内容や概念を文献史料に依って考察する、というものであった。

発表に際しては、レジュメ、史料リストの他、文献を基に各ハーンワダの内容やそれらの相互関係等をまとめた表が四つ配布された。

発表内容は以下の通りである。まず、「ハーンワダ」という語は、原則として、「タリーカ」と同じくスーフィー教団のグループ分けの一種である。その上で、この「14 ハーンワダ」について書かれた様々な文献に引用されている“Risala dar dikh-i cahar pir wa cahardah khanwada” という史料について見てみる。この史料は 20 程写本が現存するが、作者不明（明らかに虚偽の作者を挙げるものもあるが）で、成立年代については、扱われているスーフィー教団の成立年代等から 14 世紀後半と推測される。但し、扱われる教団にはいくつかバリエーションがあるため、「14 ハーンワダ」という存在がまず想定され、その上で内容が成立していったと考えられる。また、内容としてはチシュティーヤの伝承が入っており、文献伝播の担い手は、原著者についてのアナクロニズムがあることから、教養が低い層と思われる。後世の利用状況としては、写本分布から北インドを中心に 16・17 世紀以降も参照されていた可能性が高い、とする。

次に、「ハーンワダ」とは如何なる概念か、考察する。文献中の用法では、各教団の修行方法を指す際には「タリーカ」の語が使われており、一方「ハーンワダ」の方はバラカを指すのに用いられている。よって、「ハーンワダ」はバラカを重視した概念である。そしてそのことからすると、ハーンワダへの帰属にはバラカの所有が実践よりもウェイトを占めたと考えられ、故にハーンワダへ入るハードルは低くなり、このことが教団の大衆化を促すことになった、と考えられる。更に、この語の原義は「族」という意味であり、教団同士は師弟関係という形でスィルスィラの連なりとして表象されることから、「14 ハーンワダ」全体が「一つの族」・個別化しない連なった諸スーフィー教団という形を持っている。これは多数のバラカ所持をよしとする風潮の反映と考えられる。

最後に、「偽作」である文献が早い段階で流布していたインドの現実にあって、今の目からすると「怪しい」それらの文献を如何に歴史学の枠の中で扱うか、といった将来的かつ根本的課題を提示する形にて、発表は締めくくられた。

質疑応答の際には、以下のような指摘がなされた。「14」や「4」といった数字の象徴性がありうる、ということや、アナクロニズムの存在から伝播主体の教養が低いと決め付けることはできない、ということである。

(2)海外派遣・調査

トルコにおける聖者信仰・スーフィズム実践の調査

期間：2007年3月14日～2007年3月25日（12日間）

国名：トルコ

参加者：今松泰（同志社大学）、森山央朗（日本学術振興会・東洋文庫）、高橋圭（人間文化研究機構／上智大学）、加藤瑞絵（東京大学）

概要：

今回の調査ではイスタンブールを中心にして、聖者廟・テッケなどを巡り、適宜インタビューや儀礼の観察などを行った。イスタンブールおよびその周辺での観察報告は以下の通りである。

はじめに、ベイコズ方面の聖者廟及び対岸のテッリ・ババ廟を見学した。まず訪れたユーシャー廟では、前回調査のときよりも露店や人出が増え、賑やかな様子であった。景観を楽しむ人々の姿も多く見られた。運転手の話によると、この地がテレビ番組で紹介されたことで、参詣者が増加したらしい。次のアク・ババ廟は、前回調査時と変わらぬ閑散とした様子であった。ただ、廟に関する説明プレート設置など、環境整備は進められているようである。クルクルル・スルタン廟では、表で農作物などを売る女性たちがおり、彼女らの話によると「40人と戦った聖者」であることのこと。説明のプレートには、サイドで、深奥の知識（ilm al-ladunī）を持ち、枢軸（qutb）であった人物と紹介されていた。ウズン・アヴリヤー廟は、すぐ脇にジャーミイが建ち、人々が集まっているようであった。見学中、祈願に立ち寄る人もあった。当初この地域で予定していた廟は以上の4つであったが、タクシー運転手に教えてもらい、テズ・ベレン・ババ（「すぐに与える聖者」の意）廟に案内してもらった。彼は日々この廟に祈願に来るという。路傍の、建築物や標識すらない小さな墓であった（別にもう1つ、彼が教えてくれた廟は、駐車スペースがないということで通過）。その後、船で対岸へ渡り、テッリ・ババ廟を見学した。結婚の報告にやってきたカップル2組、また、割礼の衣装を纏った男児の姿があった。入り口近くの売店の男性は、テッリ・ババは戦士で、アブドゥッラー・エフェンディという名だったと説明してくれた。銀の糸を伝って海を渡った聖者という逸話とは別ものであるのか、謎である。

続いてエユップ・スルタン・ジャーミイを見学した。狭い廟の中では、座って祈願をしている女性の姿が多く見られた。夜はジェッラーヒーのセマーに参加した。イラーヒーを唱えている間、ビデオ撮影は禁止された。外国人席から手前の広間でセマー、奥の部屋で教団員がズィクル及びドゥアーを行っていた。セマーとズィクル及びドゥアーとの関連性はあまり感じられなかった。セマーの実施は、文化保護協会としての立場からか、ジェッラーヒーの儀礼をカモフラージュするためであるのかもしれない。ドゥアーの内容は、病気の治癒、試験合格など具体的なものが多かった。外国人席には、ヨーロッパ系と思われる人が多かった。感極まり涙する女性の姿もあった。儀礼の参加者には少年の姿も見られたが、このように関心を寄せるヨーロッパ系の人々もまた、教団拡大の標的となっているのであろうか。

次に、カーディリーのズィクルを見学した。前回調査時とは異なり、女性は立ち入り禁止となってい

た。撮影も禁止になり、教団の方針が外部に対して厳しくなっているのかと推測したが、儀礼に参加した今松・高橋両氏の話によると、儀礼自体の雰囲気は前回同様穏やかであったという。同教団も、若者の参加が増加しているようであった。

続いて、ナクシュバンディー系のシャイフ廟を見学した。イスケンデル・パシャ・ジャーミイにおいては、ジャーミイのすぐ脇に、ワクフの資金で建てられたという私立学校があった。次にアフメト・エミール・ブハーリー廟を見学した。その後、アフメト・イッゼト・エフェンディ廟を観察し、イスマール・アー・ジャーミイへ向かった。前回調査時には中に立ち入ることができなかったが、今回入り口を入ることはでき、歴代の師の墓などを観察した。奥にサダカ受付窓口があり、学校や宿舍も備わっているとのことである。帰りがけに、セイイド・アリー・エフェンディ廟を観察した。説明のプレートによると、元々ハルヴェティー系の施設があり、後にジェッラーヒーが使用していたという。現在は墓のみが残されている。

調査終盤ではアレヴィーのセンターめぐりを行った。シャー・クル・スルタンでは、集会に使う部屋を見学したり、アレヴィーに関する話や同センターの由来を聞いた。話を聞いている間に、昼食のために人々が集まってきていた。アレヴィーのメンバー以外にも、近隣住民が無料の食事を求めて多く集まってきているようであった。その後カラジャ・アフメト・スルタンへ移動。こちらで昼食を頂いてから、集会に参加した。男女別に着席するが、中央での踊りや儀礼は男女混ざって行なわれた。神や預言者、アリーらへの呼び掛け、水を汲むような動作やメヴラーナー教団のセマーのような仕草を含む踊り、トルコ語の詩歌など、多様な要素が混在し、一度見学しただけでは捉えられないと感じた。陶酔した様子の男性もいれば、ただ集会を楽しんでいるという風の穏やかな老婆がおり、ここに集う人々の動機にも様々相違があるのかもしれない。より多くの聞き取り調査が必要であろう。

最後に、マフムード・ヒュダーイー・エフェンディ・ジャーミイを訪れた。前回調査時にあったお礼参りの品（adak）受付場が、今はなくなっていた。男性が集団礼拝をする間も、廟には多くの女性が訪れていた。前回調査で動物の犠牲を捧げていたセラーミー・アリー廟では、現在鶏の犠牲が規制されたこともあり（鳥インフルエンザの影響か）犠牲の奉納は行なっていないとこのことを同廟の管理関係の男性から聞く。ヒュダーイーでは現在も行なっているとの情報を得て再びヒュダーイーへ戻り、羊を屠る場所を見学。この羊を捧げた弁護士が、丁度我々が滞在するカドキョイに事務所を持つとのことで、親切にも車で送ってくれ、昼食もご厄介となった。彼は旅の安全祈願のお礼として、羊を捧げたいらしい。羊は鶏よりも高価であり、庶民にはなかなか手がでないであろう。セラーミー・アリーで犠牲の奉納を中止した背景には、そのような事情もあるのかもしれない。事務所に勤務する女性弁護士からも、礼拝や廟の参詣に関する見解や彼女が知っている聖者廟について話を聞くことができた。

(3)外国人研究者の招聘

なし

イスラーム地域研究資料室

代表：三浦 徹（東洋文庫研究員、お茶の水女子大学教授）

テーマ 『イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓』

【研究事業名】

イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓 代表者 三浦徹

【拠点形成の目的と意義】

イスラーム地域の政治・社会・文化を、その内側に立ち入って理解し研究するためには、現地語で書かれた史資料が必要となる。東洋文庫は、いち早く 1960 年代より中東の現地語史資料の本格的な収集に着手した。現地日本では、大学や研究所などの 90 を越える図書館が 11 万点をこえるイスラーム地域の現地語史資料を所蔵するが（1997 年の調査による）、東洋文庫は質量ともに最大の所蔵機関である（アラビア語 11000 点、ペルシア語 7500 点、トルコ語 11000 点、2003 年調査）。しかし、欧米の大学では単独で 10 万点をこえる現地語史資料を所蔵するところもあり、現地語史資料の体系的な収集は急務である。

現在は、東京大学、京都大学、上智大学、東京外国語大学、アジア経済研究所など、現地語史資料を大量に収集する機関が増加しており、これらの機関が連携し、体系的な収集と相互利用を進めていく必要がある。「イスラーム地域研究」プロジェクトにおいて東洋文庫班は、アラビア文字による書誌データ検索システムを国立情報学研究所と連携して完成し、これによって現地語史資料の書誌データの統一的な検索・利用が可能となっている。

（財）東洋文庫研究部に「イスラーム地域研究資料室 Documentation Center for Islamic Area Studies」を設置し、ここを中心として、研究資料所蔵機関のネットワークをつくり、現地語史資料の体系的な収集と利用を進める。また、これまでの体系的な研究がなされていなかった史料学・文献情報学の分野を開拓することによって、研究者とライブラリアンの双方をサポートする。この意味で、東洋文庫の拠点形成は、ネットワーク型のイスラーム地域研究全体をサポートする役割を果たし、次世代のイスラーム地域研究の飛躍を準備する基盤となる。

【組織】

(研究拠点構成員)

氏 名	所 属 研 究 機 関 ・ 職 名	役割分担等
三浦 徹	お茶の水女子大学文教育学部教授、 東洋文庫研究部研究員	研究代表者
堀川 徹	京都外国語大学外国語学部教授	文書史料の比較制度研究
磯貝 健一	東洋文庫研究部研究員	中央アジア史資料の収集・研究
近藤 信彰	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化 研究所助教授	イラン史資料の収集・研究
大河原知樹	東北大学大学院国際文化研究科助教授、 東洋文庫研究部研究員	アラブ史資料の収集・研究
秋葉 淳	千葉大学・文学部・助教授、 東洋文庫・研究部・研究員	トルコ史資料の収集・研究
渡辺 浩一	人間文化研究機構国文学研究資料館助教授	史資料学の研究
Stefan KNOST	日本学術振興会外国人特別研究員東洋文庫研究部 研究員	文書史料の比較制度研究
Randi DEGUILHEM	CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique) 教授	文書史料の比較制度研究
柳谷あゆみ	人間文化研究機構地域研究推進センター研究員、 東洋文庫研究部研究員	アラブ史資料の収集・文献情報ネ ットワーク形成

【18年度事業の目的と活動内容】

1.今年度事業の目的

イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築することを目的とする。

具体的には、史料群を地域社会全体を表す縮図と捉えこれを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラーム地域の重層的な像を解明するべく、次の3つを柱として研究活動を行う。

1. 現地語史資料の体系的収集
2. 文献情報ネットワークの構築
3. 文書史料による比較制度研究

なお、今年度は今後 5 年間の活動の基盤整備の年と位置づけ、作業としては以下を実施するものとした。

1. サーバ設計（ホームページ及びデータベース構築）
2. アラビア文字資料 DB 連絡会形成準備
3. 文書史料による比較制度研究における連携体制を整備
4. 収書方針の決定

2. 今年度事業の内容

(1) 拠点整備

事務機能の基盤整備：パソコン、プロジェクタなど、研究会開催・書誌整理など拠点での研究活動に必要とされる機器を揃えた。

ホームページ及びデータベース：収集資料検索データベース搭載のホームページを構築すべく、入札形式で業者を決定し設計を終えた。

(2) 研究会活動

東洋文庫拠点研究会

日時：2007 年 1 月 27 日（土）15：00 - 17：00

場所：早稲田大学 41 - 31 号館 2 階会議室

発表：「宗教施設の法的地位と社会的役割：オスマン朝期アレppoのモスクから」

Legal status and social role of religious institutions: The mosque in Ottoman Aleppo.

発表者：シュテファン・クノスト Stefan KNOST

（日本学術振興会外国人特別研究員、東洋文庫研究員）

使用言語：英語

概要：

英語を使用言語とする研究会ではあったが、若手研究者を中心に 20 名余の出席者を集めた。クノスト氏はオスマン朝期アレppoのモスクの社会的性質について、理論・実例の両面から詳細な検討を行った。アレppoで（街区の管下にある）街区モスクが（オスマン朝管下に置かれる）金曜モスクに転化されたあとも、当該街区がモスクでの役職の任免において権威を有していた事実を挙げたうえで、当時のアレppoにおいて自治的機能をもつ街区社会が成立していた可能性を提示した。

発表者のクノスト氏は、法廷台帳および写真、地図など画像資料を多用し、アレppoという都市を実際に感じ取ることが出来る視覚的かつ具体的な発表を行った。英語での研究発表だったが、レジュメと資料の充実も手伝って、聴衆の理解が促進され、活発な質疑が行われた。研究会では、発表内容に加え、使用した文書史料や地図資料にも関心が集まり質問が寄せられた。

東洋文庫拠点研究会

日時：3月15日（木）15:00-17:00

場所：東洋文庫3階会議室

発表：「ワクフ研究の歴史をたどる：規範から拡散へ」

From the Normative to the Discursive: Historiography of World Waqf Studies

発表者：ランディ・ドゥギエム Randi DEGUILHEM（IREMAM 研究員）

使用言語：英語

概要：

前回と引き続き英語を使用言語とする研究会ではあったものの、大学院生を中心に20余名の出席者を集めた。ドゥギエム氏はまず「ワクフ寄進者」「ワクフ財産」（寄進者が任命した）「ワクフ」による利益の受益者の三者の相互関係を図式化し、ムスリム社会におけるワクフの多機能性を指摘した。次いで研究史の見地から、19世紀～20世紀前半のワクフ研究の手法は主として年代記や地誌などの叙述史料を用いていたため「規範的な」枠組みに沿ったものであったが、20世紀後半以降のオスマン朝期の文書史料の使用状況の改善（ひいては使用史料の「拡大」）に伴い、ワクフ運営に関する実際のプロセスやワクフの多様な社会的機能の解明が可能になったことを挙げ、ワクフとその研究が、社会全体を映し出す鏡としての役割を果たすという展望を述べた。

本研究会の出席者は、オスマン朝期以外を専攻する大学院生からオスマン朝期を専門とする若手研究者までと、レベルのばらつきがやや懸念されたものの、ドゥギエム氏は図式を用いた平明な解説にオスマン朝期の文書史料を随所に織り交ぜ、概説的要素と専門的要素をバランスよく組み合わせることで、幅広い層の関心に応えた。

アラビア文字図書DB連絡会準備会議

日時：2007年3月12日（月）

場所：東洋文庫3階会議室

参加機関：アジア経済研究所図書館、大阪外国語大学附属図書館、九州大学文系合同図書室、京都大学アジア・アフリカ研究科図書室、慶應義塾大学メディアセンター、国立国会図書館関西館アジア情報課、国立情報学研究所、東京外国語大学附属図書館、東京大学文学部図書館、同志社大学総合情報センター、東北大学附属図書館、東洋文庫、早稲田大学中央図書館

概要：

第一期IASから、国立情報学研究所のNACSIS-CATとの連動を視野に入れたアラビア文字文献総合データベース計画を進めてきた当拠点は、引き続きアラビア文字書誌データベースの普及を図るとともに、中東関係の専門知識を有するライブラリアンの育成と研究の基礎となる文献情報学の構

築を企図している。

本準備会議は、情報・意見交流の場であるアラビア文字図書 DB 連絡会形成の準備段階として、まずはイスラーム地域資料を所蔵する機関でのアラビア文字図書の整理の現状と問題点を話し合い、情報を共有することを目的としたもので、13 機関より 19 名の参加者を集めた。

会議ではまず国立情報学研究所が NACSIS-CAT におけるアラビア文字資料登録状況について報告を行い、続いて各機関が現状及び問題点の報告を行った。

NACSIS-CAT へのアラビア文字資料登録数は平成 15 年末から平成 19 年 3 月にかけてほぼ 3 倍（23247 件→69977 件）の増加を見せており、平成 16 年度から開始されたアラビア文字資料遡及入力事業でもこれまで 3 万件以上が登録された。アラビア文字資料登録数からいえば文献総合データベース化は順調に進行しているといえるが、各機関の報告からは、アラビア文字書誌の入力作業確保における困難さや、ルールセッティングの不備など、データの質の維持・向上におけるさまざまな問題点が浮上してきた。機関によっても自館入力を行っている機関と外注入力の機関とでは問題の性質が異なるため、対応の難しさを実感する一幕もあったが、参加機関の当拠点の取り組みに対する期待の大きさが感じられた。この会議での成果を踏まえ、まずは現在構築中のホームページ上に情報共有のためのスペースを設置するなど、ライブラリアンのネットワークの構築にむけて、今後積極的に対応を進めていきたい。

東洋文庫合同研究会（中央アジア古文書セミナー）

日時：2007 年 3 月 17 日(土)～ 3 月 18 日(日)

会場：京都外国語大学 9 号館（国際交流会館）4 階会議室

【プログラム】

3/17(土)

<報告>

科研費・トヨタ財団助成金によるヒヴァの法廷文書研究について 堀川徹（京都外国語大学・東洋文庫）

<古文書講読> 「ロシア支配期中央アジアの法廷台帳」 矢島洋一（京都外国語大学）

3/18(日)

<古文書講読> 「中央アジアのファトワー文書」 磯貝健一（京都外国語大学・東洋文庫）

<講演> 「革新的流行：オスマン朝の最終世紀における公立学校」 ランディ・ドゥギエム

A Revolutionary Mode: The Ottoman Public Civil Schools in the Last Ottoman Century - Examples from Damascus and Tripoli, Libya -

概要：

本研究会は、中央アジア古文書セミナーとの合同で二日間にわたって行われ、のべ 50 名の出席者

を集めた。中央アジア古文書セミナーは科学研究費補助金による「中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究」の一環として毎年開催されている。

堀川氏はトヨタ財団助成プロジェクト及び上記研究の概要と進行・成果を紹介し、会場では『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究』『新疆およびフェルガナのマザール文書（影印）』が配布された。

古文書講読一日目担当の矢島氏は、新規に収集した法廷台帳をまず紹介し、その形式の解説と新収史料を用いた研究の可能性を提示した。二日目の古文書講読はワークショップ形式で行われ、収集史料を用い担当・磯貝氏の解説・指導のもと出席者も一緒に読解を進めていった。出席者には事前に資料が配布されており、ほぼ全員が予習済みの状況で当たるため、解説・議論ともハイレベルで充実したセミナーとなった。ドゥギエム氏は講演においてオスマン朝末期（19世紀後半～20世紀初頭）の中東アフリカにおける世俗学校（maktab madani）設立を、タンズイマートに端を発する近代化の潮流を顕著に表す道標と位置づけ、ダマスカスとリビアのトリポリの例から、豊富な画像資料を用いその概容を紹介し考察を述べた。

中央アジア古文書セミナーは今回で五回目の開催となるが、休憩時間や終了後にも参加者同士が情報交換を盛んに行っており、参加者のレベル・意識の高さに継続の強みを感じさせた。講演前にセミナーに出席したドゥギエム氏も、ペルシア語とアラビア語が混在する法廷文書を読み解く本セミナーの活況には強い関心を示し、積極的に質疑に加わったほか、終了後もワクフ研究における研究協力の可能性について触れるなど、今後の研究交流において意義深いと思われる場面が散見される会となった。

(3)海外派遣・調査

中央アジアの古文書調査

期間：2006年8月22日～9月8日（16泊18日）

国名：ウズベキスタン共和国（タシュケント市東洋学研究所、ブハラ市アルク博物館、フェルガナ市郷土博物館、ヒヴァ市イチャン・カラ博物館、サマルカンド王立博物館）

参加者：磯貝健一（京都外国語大学 / 東洋文庫）

概要：

ウズベキスタン共和国内の上記各施設を訪問し、現地研究者との協力のもと、上記各施設に新規に収蔵されたイスラーム法廷文書の整理、撮影に従事するとともに、現地研究者と意見交換をおこなった。

Bilad al-Sham (歴史的シリア) 国際会議参加及び史料調査

期間：2006 年 9 月 1 日～9 月 13 日

国名：シリア (ダマスкас歴史文書館、国立アサド図書館)、ヨルダン (ヨルダン大学)

参加者：大河原知樹 (東北大学/東洋文庫)

概要：

2006 年 9 月 1 日～9 月 13 日の日程で、シリア及びヨルダンへの出張を行った。出張の目的は、Bilad al-Sham (歴史的シリア) 国際会議参加、及び史料調査であった。以下、出張の成果を国別に簡単に記載する。

シリアでは、フランス近東研究所、ダマスкас歴史文書館、及び国立アサド図書館を訪問した。フランス近東研究所は、シリア所在の外国系研究所としては、長い歴史と規模を誇り、特に貴重なイスラーム地域研究史料を所蔵するほか、イスラーム史料学に関する研究蓄積がある。図書館に収蔵されている刊本、雑誌を調査し、研究所所属の研究者からレビューを行った。ダマスкас歴史文書館では、イスラーム法廷史料のコレクションを閲覧し、その活動について館長にインタビューを行った。国立アサド図書館でも、同様に史料調査を実施した。

ヨルダンでは、9 月 10 日から 14 日にかけて開催された Bilad al-Sham (歴史的シリア) 国際会議に出席した。これは 1974 年以来ヨルダン、シリア共催で実施されている歴史ある国際会議であり、今回で第 7 回となる。「アラブ・イスラームによる征服から 20 世紀終了時までの歴史的シリアにおけるワクフ」の題で、ヨルダン、シリアはもとより、レバノン、パレスチナ、エジプト、イラク、サウジアラビアなどのアラブ諸国、トルコ、アメリカ、フランス、ドイツ、スイスからのワクフ研究者、総勢 90 余名が一同に会して行われた。中東関係では最大規模に数えられるであろうこの国際会議では、ワクフというイスラーム特有の寄進制度が歴史的シリアに果たした、あるいは現に果たしている役割を、さまざまな時代、地域の研究者がさまざまな角度から検討し、セッション毎に活発な討論が実施された。ただし、発表者の報告、出席者の関心が多岐にわたるため、意見のかみ合った討論に必ずしもならないセッションも存在し、全体としてやや大味な会議となった印象は拭えなかった。また、開催地がヨルダンという点で、イスラエルの研究者が一人も参加していなかった。とは言うものの、良質の発表も多く、例えば、ワクフ文書等の史料の精読・調査だけではなく、実際のワクフ対象物件の現状をフィールド調査し、スライドや図面を用いて国の政策などマクロの観点からワクフを論じた良質の発表やワクフに関する法理論や用語を実際の文書から批判的に検討する発表などがあった。また現地の研究者を中心に研究の問題点などを具体的に伺うことができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。印象的だったのは、年々劣化していく文書や施設の補修・維持についてのエルサレム・イスラーム博物館研究者の発言である。このような分野では、紙の補修の技術に優れる日本が貢献できる余地があるのではないかと、との感想も抱いた。この会議で意見交換をした研究者と連絡をとりあい、イスラーム地域研究プロジェクトを進めることが次の課題となろう。

「歴史的アーカイブズの多国間比較」に関わるトルコでの研究会と史料調査

期間：2006年9月17日～9月23日

国名：トルコ（アンカラ大学、内閣府オスマン文書館）

参加者：三浦徹（お茶の水女子大学/東洋文庫）

概要：

今回の出張は、歴史的アーカイブズの多国間比較プロジェクト（国文学研究資料館）との連携によるもので、日本史、朝鮮史、中国史、ヨーロッパ史の研究者と合同で、アンカラにおいて国際シンポジウム「オスマン朝と中近世日本における国家文書と社会動態」を開催するとともに、オスマン朝時代から現代までの文書資料を所蔵する総理府オスマン文書館（イスタンブル）、トプカプ宮殿文書館（イスタンブル）、地券・地籍簿総局文書館（アンカラ）を訪問し、文書資料の閲覧と資料整理・保存・閲覧の仕組みについて、実地に説明をうけ、意見交換を行った。出張者（三浦）は、ワークショップの司会など運営を統括するとともに、本ワークショップをもとにした出版計画の打合せ、現地研究者との学術情報交換をおこなった。

参考：国際シンポジウム プログラム 2006年9月19日

『国際シンポジウム オスマン朝と中近世日本における国家文書と社会動態』

開会：ジャン・エルキン（アンカラ大学）

挨拶：アイシェヌール・テクメン（アンカラ大学言語地理歴史学部日本語学科長）

趣旨説明：渡辺浩一（国文学研究資料館）

記念講演：イルベル・オルタイル（トプカプ宮殿博物館長）

「多国間アーカイブズとオスマン文書」

司会：渡辺浩一、ジャン・エルキン、林佳世子（東京外国語大学） 三浦徹（お茶の水女子大学）

通訳：ジャン・エルキン、高松洋一（東京外国語大学 COE 研究員） 澤井一彰（東京大学大学院）

発表：

・ユルマズ・クルト（アンカラ大学） 「オスマン朝の地方行政と文書」

・高橋一樹（国立歴史民俗博物館） 「日本中世における裁判文書の作成・保管

—武家文書を中心に—」

昼休み

・ヒュルヤ・タシュ（アンカラ大学） 「オスマン朝の中央体制と文書史料

・大友一雄（国文学研究資料館） 「江戸幕府の組織構造と情報管理

—奏者番職を中心に—」

・オゼル・エルゲンチ（ビルケント大学） 「社会史研究におけるオスマン朝

文書史料利用の可能性」

休憩

コメント：熊遠報（早稲田大学）

金炫栄（韓国国史編纂委員会）

バハエッディン・イエディコルドゥズ（TOBB 経済工科大学）

まとめ：オゼル・エルゲンチ、渡辺浩一

閉会：ジャン・エルキン

会場：アンカラ大学言語歴史地理学部教授会会場

主催：トルコ アンカラ大学言語歴史地理学部

日本 人間文化研究機構 国文学研究資料館 アーカイブズ研究系

協力：財団法人東洋文庫（研究部西アジア班、イスラーム地域研究資料室）

シリアにおける資料収集および調査

期間：2006 年 12 月 30 日～1 月 10 日

国名：シリア

参加者：柳谷あゆみ（人間文化研究機構/東洋文庫）

概要：

本出張では、2006 年 12 月 30 日から 2007 年 1 月 10 日にかけて、ダマスカスのフランス近東研究所(IFPO)を訪問し、また市内で今後の入手困難が予想されるイラクの出版物を中心に調査・収集を行った。

フランス近東研究所（IFPO）は、同研究所は研究機関と研究者及び外交官養成を目的とするアラビア語学習機関、図書室、出版部から成る。アラビア語学習機関は、少人数制と実践的な授業内容で人気が高く、定員 40 名前後に対して近年は 150 人以上が入学を志願するため厳しい選抜状況となっているが、日本人もここ数年は毎年 1 名程度が在籍している。同研究所の出版部は、精力的に歴史・文学・考古学分野における成果を出版しており、近年の出版状況を調査し、歴史分野のアラビア語図書新刊を収集するとともに、研究員及び教員に「イスラーム地域研究」プロジェクトの開始とその概要を紹介した。

また、今回の出張期間中に、折よくダマスカスの自宅に滞在されていたウィリアム・メアリ大学アブドゥルカリーム・ラーフェク教授を訪問した。ラーフェク教授はイスラーム地域研究の招へいで 2006 年 11 月に来日し、文献講読集中講義及び講演会を行われたが、オスマン朝期法廷文書について明晰な英語とアラビア語で丁寧に読解法を説いた同教授の集中講義は、専門外である出張者にもわかりやすく、法廷文書の史料としての有用性と傾向、可能性を改めて実感させるものであった。ラーフェク教授もまた今回の来日によるわが国研究者及び大学院生との交流を非常に喜び、今後の

協力に向けて努力を惜しまないと約束くださった。

イラクの出版物については、イラク戦争後の混乱で入手が困難になり、エジプトではすでに価格高騰の報を仄聞している。隣接国であるシリア、ヨルダンでもイラクの出版物の価格は湾岸戦争以来上昇しているが、入手状況は比較的良好と思われるため、ダマスカスでの入手状況を調査し、早期の分散が予想される逐次刊行物の収集を開始した。今回は、イラクの歴史・考古学雑誌「マウリド」及びバグダード大学文学部紀要、そしてモスル大学文学部紀要「アーダーブ・アッラーフィ・ダイン」の創刊号から最新号までを一括購入した。殊に「マウリド」はその有益性が一部研究者の間で知られていたものの国内ではごく限られた所蔵に留まっていたので、今回の購入についてすでに数件の照会を受けている。これら逐次刊行物については、近日公開予定の HP にコンテンツ（目次）を公開し、利用者の用に応えていく予定である。イラクの混乱はただ心を痛めるばかりであるが、学術資料の散逸、不正流出を防ぐために、あくまで正当な取引による、これらの資料の収集は今後も精力的に継続すべきであろう。

(4)外国人研究者の招聘

シュテファン・クノスト氏 Dr. Stefan KNOST

（日本学術振興会特別研究員・東洋文庫研究員）

招聘期間：2006 年 11 月～2008 年 11 月（2 年間）

活動：

クノスト氏は、タンズィマート以前のオスマン朝期シリアの都市を専門とする気鋭の研究者である。クノスト氏は、シリアのみならずトルコ国内の文書館をも網羅し法廷台帳・寄進文書を活用しながらワクフなどの宗教施設の社会的役割を通して街区の自治的機能を明らかにしつつあり、当拠点の比較制度研究においてその豊富な研究実績から助力し、またわが国の研究者及び大学院生との交流を通して精力的に研究活動を展開することが、相互に資するところ大と考えた。今年度は 2007 年 1 月 27 日に研究会を開催した。研究会の詳細については研究会活動の項を参照いただきたい。

ランディ・ドゥギエム氏 Dr. Randi DEGUILHEM

（フランス国立科学研究所教授・フランス国立アラブ・イスラーム世界研究所）

招聘期間：2007 年 3 月 13 日～2007 年 3 月 24 日（12 日間）

活動：

ランディ・ドゥギエム氏は、文書史料を用いたオスマン朝期ワクフ研究及び環地中海の社会史研究において多数の業績を有する女性研究者である。一研究者としての業績もさることながら、多くの研究叢書の編纂に携わり、フランス中東学会の事務局長としてその活動の中枢を担う同氏は、研究・運営両面でフランスの中東研究全体をリードする存在であり、今回の招聘は、氏の研究実績が

ら知見を得、若手研究者の成長の糧とすると同時に、実際の交流を通して、フランスにおける中東研究の現況をうかがい、研究交流の可能性を探ることをも目的として実現した。約二週間の滞在中、ドゥギエム氏は 2 回の研究発表を行い、またわが国の研究者たちとの個別の交流を深めるなど、リーディング・パーソンにふさわしい学識、人柄、アクティヴさが印象に残った。研究会の詳細については研究会活動の項を参照いただきたい。

(5)資料収集

東洋文庫拠点の 2006 年度の収集資料は以下の通り。

■アラビア語資料

図書：719 冊（付録 CD-ROM1 点を含む）

エジプトを中心とする中東アフリカ地域で 2005-2007 年に出版された人文・歴史・宗教学関連の研究書を購入し、加えて東洋文庫所蔵資料の欠本を補充した。今後も主としてエジプトのライラ書店を通しブランケット・オーダー方式での収集を継続的に行う。

収集期間：2006 年 10 月～2007 年 3 月

収集方法：エジプトのライラ書店に発注（ブランケット・オーダー方式）。また一部はダマスカスのフランス近東研究所から購入した。

雑誌：171 冊（3 タイトル）

雑誌については、従前より 他館での所蔵が少なく ローカルなアラビア語学術雑誌を収集する方針を採っており、今年度は上記条件に合致し、今後の入手困難が予想されるイラクの逐次刊行物 3 タイトルを購入した。

「バグダード大学文学部紀要」

「アーダーブ・アッラーフィダイン」(モスル大学文学部紀要)

「マウリド」(歴史・考古学学術雑誌)

収集期間：2007 年 1 月～3 月

■ペルシア語資料

図書 65 冊

マイクロフィッシュ 109 枚 内訳は以下の通り。

British Intelligence on Persia, Who's Who. 26 枚

British Intelligence on Persia, Military Reports. 34 枚

British Intelligence on Persia, Routes. 49 枚

収集期間：2007 年 1 月～3 月

■オスマントルコ語

文学・法学分野のオスマントルコ語図書(フランス語からの翻訳を含む)を中心に 245 冊を購入。

収集期間：2006 年 12 月

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・附属イスラーム地域研究センター

代表：小杉 泰（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授）

テーマ 『イスラーム世界における国際組織の基礎研究』

中東・南アジアを中心として、イスラーム世界に広がるさまざまな形態の国際組織について、その史的形成、思想潮流、組織間の関係やネットワーク、指導者などについて、基礎研究と実証的な動向研究を合わせておこなうことを目的とする。また、これらの国際組織の背景となっているウンマ論などの基本的な研究をおこなうとともに、現在進行形の動向を把握し、諸地域間の比較も視野に入れて、現代イスラーム世界の理解を総合的に深めることをめざす。

【研究事業名】

研究総括

ユニット1「国際関係における国際組織研究」

責任者：末近 浩太（立命館大学・助教授）

ユニット2「中道派の国際組織」

責任者：山根 聡（大阪外国語大学・助教授／イスラーム地域研究センター拠点研究員）

ユニット3「急進派の国際組織」

責任者：保坂 修司（近畿大学・教授）

ユニット4「広域タリカ」

責任者：東長 靖（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・助教授／同附属イスラーム地域研究センター・副センター長）

ユニット5「イスラーム経済の国際組織」

責任者：小杉 泰（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授／同附属イスラーム地域研究センター・センター長）

【拠点形成の目的と意義】

本研究科は、これまで研究領域の一つとして「イスラーム世界論」を設定し、西アジア、中東、北アフリカ、中央アジア地域の政治・経済・社会・思想・文化をめぐる研究・教育をおこない、2004年からは修士を新世代の研究者として世に送り出し始めた。博士論文、学術ジャーナル掲載の論文、学術書の刊行も順次なされて、研究成果も蓄積されつつある。また、種々の研究プロジェクトの実施により、1998年以來きわめて精力的に資料収集をおこない、アラビア語文献については国内最大の蔵書を有している。また、京都大学における地域研究は、本研究科、東南アジア研究所、地域研究統合情報センター、その他の部局において100名におよぶ専門家を擁し、文理融合による総

合的地域研究を発展させ、地域間比較の方法を開拓してきた。

今回の拠点形成は、このような実績に立脚して、総合的地域研究の理論と手法を用いたイスラーム地域研究の深化と発展をはかることを目的としている。理論・原典研究・臨地研究（フィールドワーク）の結合による地域研究によって、イスラーム地域に関する理解の飛躍的発展をめざすと共に、地域研究の方法論一般についても貢献するべく努めたい。

また、大学院では若手研究者の育成は本来の責務であるが、さらに、拠点形成によって研究プロジェクトと教育プロジェクトの緊密な展開をおこない、有意な研究者を輩出することをめざす。

【組織】

(研究拠点構成員 = 研究科附属イスラーム地域研究センター・拠点研究員)

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 (担当研究テーマ)
小杉 泰	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授 / 同附属イスラーム地域研究センター長	研究総括・中東コーディネーター・ユニット 5「イスラーム経済」責任者
東長 靖	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・助教授 / 同附属イスラーム地域研究センター・副センター長	ユニット 4「広域タリカ」責任者
足立 明	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授	南アジア・コーディネーター
山根 聡	大阪外国語大学・助教授	ユニット 2「中道派」責任者
末近 浩太	立命館大学・助教授	ユニット 1「国際関係」責任者
澤江 史子	国立民族学博物館・外来研究員	ユニット 2「中道派」の研究分担

【 18 年度事業の目的と活動内容】

1. 今年度事業の目的

本拠点は、2006 年 12 月に設置されたばかりのため、年度末までの 4 ヶ月間は、次のような基礎的な研究活動を集中的におこなうことにつとめた。

・研究会：ユニット 1 (国際関係)、ユニット 2 (中道派)、ユニット 4 (広域タリカ) などの研究会の始動

- ・国際ワークショップの開催
- ・資料収集体制およびデータ解析体制の確立、収集の開始
- ・データベース構築のための設備の準備
- ・アラビア語、欧文献などの資料収集
- ・ホームページの開設
- ・来年度へ向けて、年報の編集作業

2 年目以降の事業の本格化に向けて、準備態勢をほぼ構築しえたといっておく。

2.今年度事業の内容

(1)拠点整備

19 年 3 月に、AA 研究科の東に隣接する旧・高分子東棟 2 階に拠点独自のスペースを確保して、事務局を開設した。データ解析室および編集制作室のスペースも確保し、コンピュータを設置し次年度に向けて整備を行なった。電話および F A X 回線を 3 月末に敷設した。人間文化研究機構地域研究推進センターから派遣される研究員の研究室、ワークショップ・研究会等の会場については、研究科が保有する諸設備を適宜使用し、また連携する諸部局の設備について利用の便宜を得ることにつとめている。加えて、新たに設置された AA 研究科のアジア地域研究専攻図書室とも、緊密に連携する態勢を整えつつある。

ホームページについてはすでに開設し、さらに発信の充実化を図りつつある。

(2)研究会活動

ユニット 2「中道派」研究会

(「現代アジア・アフリカにおけるトランスナショナルな政治社会運動の比較」研究会

(科研基盤研究 A：研究代表 酒井啓子・東京外国語大学教授) との共催)

日時：2006 年 12 月 18 日 (月) 16：00～18：00

場所：京都大学中央総合研究棟 (旧工学部 4 号館) 4 階 AA401 (第 1 講義室)

講演者・講演題目：

ファーレフ・アブドゥルジャッパール 氏 (イラク戦略研究所)

「イラクの現状とイラクにおけるシーア派イスラーム運動」

概要：

レバノンから、イラクのシーア派研究の第一人者であるファーレフ・アブドゥルジャッパール氏に報告をいただき、シーア派のイスラーム運動や国際ネットワークなどをめぐって、研究会を行なった。

ユニット 2・3「中道派」「急進派」合同研究会

(「現代アジア・アフリカにおけるトランスナショナルな政治社会運動の比較」研究会

(科研基盤研究 A：研究代表 酒井啓子・東京外国語大学教授) との共催)

日時：2006 年 1 月 31 日 (水) 16：00～18：00

場所：京都大学中央総合研究棟 (旧工学部 4 号館) 4 階 AA401 (第 1 講義室)

講演者・講演題目：

酒井啓子 (東京外国語大学大学院教授)

「イラクはどこへ向かっているのか：現状分析と展望」

概要：

イラク研究の第一人者である酒井啓子氏にご報告をいただき、もっとも最新のイラク情勢の分析に基づき、スンナ派およびシーア派のイスラーム運動の動向を含めて、総合的な討議をおこなった。

設立記念講演会

日時：2006年2月2日（金）15：00～18：00

場所：京都大学中央総合研究棟（旧工学部4号館）4階 大会議室（AA447号室）

講演者・講演題目：

小杉 泰（京都大学イスラーム地域研究センター・センター長）

「新時代のイスラーム地域研究とその魅力」

東長 靖（京都大学イスラーム地域研究センター・副センター長）

「タリーカ／スーフィズム研究の課題と展望」

山根 聡（大阪外国語大学・助教授）

「南アジア・イスラーム研究の意義と眺望」

概要：

本拠点の設立を記念して、イスラーム地域研究の現状と課題について鳥瞰するとともに、本拠点の研究内容と密接にリンクするいくつかの視点から、今後の研究の方向性を提示する講演が行われた。

ユニット4「広域タリーカ」第1回研究会

日時：2006年2月4日（日）14：00～18：00

場所：京都大学中央総合研究棟（旧工学部4号館）4階 大会議室（AA447号室）

講演者・講演題目：

藤井千晶（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

「預言者の医学：ザンジバルの事例から」

新井一寛（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

「タリーカ組織論の射程：共同性と単独性、ミクロからネットワークまで」

概要：

広域タリーカを論じる際の基礎となる「タリーカ論」をめぐって、東アフリカおよびエジプトの事例が報告され、通説の見直しが提起された。

国際ワークショップ

日時：2006年3月10日（土）14：00～18：00

場所：京都大学中央総合研究棟（旧工学部4号館）4階 AA401（第1講義室）

講演者・講演題目：

第一部 基調講演：Dr. Azzam Tamimi（イスラーム政治思想研究所・所長）

「パレスチナ問題とイスラーム運動：ハマースの同胞団的な起源」

第二部 パネルディスカッション

報告1：小杉 泰

「イスラーム連帯の焦点としてのパレスチナ問題：その眺望と研究課題」

報告2：臼杵 陽（日本女子大学・教授）

「日本におけるパレスチナ研究：イスラーム地域研究の観点から」

報告3：飛奈裕美（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

「東エルサレムにおける非暴力的抵抗」

コメンテーター：Dr. Azzam Tamimi

総合司会：末近 浩太（立命館大学国際関係学部・助教授）

概要：

「イスラーム世界における国際組織の基礎的研究」のための国際研究会として、中東地域のみならず国際関係において大きな焦点となり続けてきたパレスチナ問題について、総合的なワークショップを開催した。本ワークショップでは、パレスチナ現地におけるハマースの形成と発展、ムスリム同胞団を中心とするイスラーム国際連帯の流れなどを実証的に検討するとともに、イスラーム地域研究における研究視座についても提起、討論を行なった。

(3)海外派遣・調査

トルコ共和国およびオスマン帝国における広域タリーカの活動に関する調査。

期間：2007年3月10日～2007年3月25日

国名：トルコ共和国・イスタンブル、スレイマニエ図書館・イスラーム研究センター・在イスタンブル修道場など

参加者：東長靖

概要：

今回の調査は、次の2つの目的をもって行われた。

第一に、広域タリーカ研究の基礎的作業として、タリーカの背後にある思想潮流としてのスーフィズムの前近代における状況を調査すること。このために、アラビア語・ペルシア語・オスマントルコ語等の文献調査を行った。

第二に、トルコ共和国をケーススタディとして、現代におけるタリーカの実態を調査すること。

このために、上智大学拠点グループ3より派遣された調査隊と協力しつつ、イスタンブルに存在する修道場における宗教実践の参与観察などを行った。

(4)外国人研究者の招聘

アッザーム・タミーミー氏招聘

所属：イスラーム政治思想研究所・所長

期間：3月7日～3月14日

活動：以下のとおり

(1)日時：2006年3月10日(土)14:00～18:00

国際ワークショップ「パレスチナ問題とイスラーム世界の連帯」

基調講演「パレスチナ問題とイスラーム運動：ハマースの同胞団的な起源」

(2)日時：2006年3月11日(日)16:00～18:00

東大拠点の「パレスチナ研究班」研究会にて講演(東大拠点・京大拠点の共催)

タイトル：「ハマースとこれからのパレスチナ問題」

(3)日時：2006年3月12日(月)14:00～18:00

ユニット1・2・3合同・原典研究会にて講演

タイトル：「世俗主義とイスラーム主義における現代アラビア語の言説比較」

(4)日時：2006年3月13日(火)13:30～17:30

拠点セミナーにて、院生の研究報告に対する指導

(5)資料収集

ユニット1、4、5の活動の一環として、基本的な欧文図書の収集を行った。平成19年2月から3月にかけて、国内書店から、「国際関係における国際組織関係欧文書籍」「広域タリーカ関係欧文書籍」「イスラーム経済の国際組織関係欧文書籍」を収集した。

また、ユニット2、3の活動の一環として、アラビア語現地資料の収集を行った。「中道派の国際組織関係アラビア語書籍」「急進派の国際組織関係アラビア語書籍」を、同じく平成19年2月から3月にかけて、現地買付け・現地書店からの送本などによって収集した。

(6)研究成果・発表（論文・図書）

〔論文〕計（ 5 ）件

著 者 名	論 文 標 題			
東長 靖	「『叡智の台座』註釈と『台座の刻印』」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『アジア文化研究所研究年報』		41	2007	168-179

著 者 名	論 文 標 題			
保坂 修司	「サウジアラビアの新しい王位継承制度」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『中東情勢報告（2007年版） ——混迷する中東情勢と国際社会の対応——』			2007	51-57

著 者 名	論 文 標 題			
保坂 修司	「なぜアメリカ人を殺さねばならないのか ——1998年のアル・カーイダのファトワー分析」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『述』		1	2007	76-91

著 者 名	論 文 標 題			
保坂 修司	「日本人には理解しにくい中東の”複雑怪奇”をひもとく」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『週刊エコノミスト』		3879	2007	60-62

著 者 名	論 文 標 題			
末近 浩太	「『レバノン』をめぐる闘争： ナショナリズム、民主化、国際関係」			
掲 載 誌 ・ 書 名		巻	発 行 年	ページ
『中東研究』		494	2006	56-67

〔図書〕計（ 1 ）件

著 者 名	出 版 社		
青山弘之、 <u>末近浩太</u>	日本貿易振興機構アジア経済研究所		
書 名		発 行 年	ページ
『現代レヴァント諸国の政治構造とその相関関係』		2007	161

研究グループ：「イスラーム世界の国際組織の基礎研究」

【組織】

（研究グループメンバー）

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	役 割 分 担 等 （担当研究テーマ）
小杉 泰	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授 / 同附属イスラーム地域研究センター長	研究総括・中東コーディネーター・ユニット5「イスラーム経済」責任者
東長 靖	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・助教授 / 同附属イスラーム地域研究センター・副センター長	ユニット4「広域タリカ」責任者
足立 明	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授	南アジア・コーディネーター
濱田 正美	京都大学大学院文学研究科・教授	ユニット4「広域タリカ」の研究分担
山根 聡	大阪外国語大学・助教授	ユニット2「中道派」責任者
保坂 修司	近畿大学・教授	ユニット3「急進派」責任者
末近 浩太	立命館大学・助教授	ユニット1「国際関係」責任者
澤江 史子	国立民族学博物館・外来研究員	ユニット2「中道派」の研究分担
ムハンマド・セリム	カイロ大学・教授	海外協力者、ユニット1「国際関係」国際組織の研究分担
アッザーム・タミーミー	イスラーム政治思想研究所・所長	海外協力者、ユニット2「中道派」の研究分担

(研究グループ研究協力者)

氏 名	所 属 機 関 ・ 職 名	担当研究テーマ
竹田 敏之	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	全体：アラビア語文学、現代アラブ文化論
宗野ふもと	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	全体：中央アジア地域研究
堀抜 功二	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	全体：中東地域研究 湾岸アラブ諸国の政治と社会
飛奈 裕美	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 1：パレスチナ研究
平野 淳一	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 1：近代イスラーム政治思想
山尾 大	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 2：現代イラク政治、中東地域研究
黒田 賢治	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 2：シーア派（イスラーム地域研究）
新井 一寛	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 4：地域研究・宗教学・宗教社会学・映像人類学(現代エジプトのスーフィー教団)
ダニシマズ イディリス	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 4：スーフィズム、スーフィーによるクルアーン解釈
藤井 千晶	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 4：東アフリカにおけるイスラーム知識人
丸山 大介	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 4：イスラームの聖者論と聖者信仰
今松 泰	同志社大学神学部・非常勤講師、神戸大学大学院文化科学研究科・非常勤講師	ユニット 4：オスマン朝史（宗教史・文化史）
大塚 和夫	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	ユニット 4：社会人類学、中東民族誌学
加藤 瑞絵	東京大学大学院人文社会系研究科・博士課程	ユニット 4：イスラーム思想史

鎌田 繁	東京大学東洋文化研究所・教授	ユニット 4：シーア派イスラーム思想
河原 弥生	日本学術振興会・特別研究員（東洋文庫）	ユニット 4：中央アジア史
小林 寧子	南山大学外国語学部・教授	ユニット 4：インドネシア近現代史
小牧 幸代	高崎経済大学地域政策学部・講師	ユニット 4：社会人類学（南アジア・ムスリム社会）
坂井 信三	南山大学人文学部・教授	ユニット 4：西アフリカのイスラーム
高尾賢一郎	同志社大学大学院神学研究科・博士後期課程・歴史神学専攻・一神教学際研究コース	ユニット 4：現代シリアにおけるシャイフ・アフマド・クフターローのイスラーム理解、スーフィズム思想
外川 昌彦	広島大学・大学院国際協力研究科・助教授	ユニット 4：文化人類学（南アジアのイスラーム研究）
中西 竜也	京都学園大学・非常勤講師	ユニット 4：中国イスラーム史
二宮 文子	京都大学西南アジア史学研究室・博士後期課程	ユニット 4：中世インド文化史
堀川 徹	京都外国語大学外国語学部・教授	ユニット 4：イスラーム期の中央アジア史
茂木 明石	上智大学大学院外国語学研究科地域研究専攻・博士後期課程	ユニット 4：歴史学、中世エジプトの聖者信仰
守川 知子	北海道大学大学院文学研究科・助教授	ユニット 4：イラン・イスラーム史
森山 央朗	独立行政法人日本学術振興会・特別研究員（PD）（受入機関：財団法人東洋文庫研究部）	ユニット 4：歴史（10～12 世紀マシュリク地域におけるハディース学者の社会的・文化的活動）
矢島 洋一	京都外国語大学国際言語平和研究所・嘱託研究員	ユニット 4：スーフィズム史

吉田 京子	立教大学・非常勤講師	ユニット 4：初期シーア派思想
長岡 慎介	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程	ユニット 5：イスラーム金融論、イスラーム経済学

【平成 18 年度の研究・教育活動】

1. 今年度の研究・教育活動の概要

上掲の拠点報告「1. 今年度事業の目的」で述べたとおり、設置後まもないが、すでにユニット 1、2、4 において研究会を実施するとともに、国際ワークショップも開催するなど、活発な研究活動を展開しつつある。また、研究のためのインフラとなるべき資料の収集・データベースの構築などにもすでに着手している。

また本拠点は、大学院に附属していることが特徴であり、研究プロジェクトは教育プロジェクト「イスラーム世界の国際組織をめぐる大学院教育」と直接的に結びついた形で展開され、両者の有機的な結合によって、若手研究者の育成を強力に推し進めつつある。この目的と密接に結びつく教育活動として、「イスラーム世界論（イスラーム世界の国際組織）」「南アジアのイスラーム」の 2 科目を来年度開設することになっているが、本年度はその開設準備につとめた。また、大学院生を中心とする拠点セミナーを開始し、活発に開催している。

2. 研究活動の記録

(1) 研究会活動

上掲の拠点報告「2. 今年度事業の内容、(2)研究会活動」に掲げた活動以外に、研究と教育を有機的に関連させるため、大学院生を主体として、下記のような研究会活動を行った。

第 1 回拠点セミナー

日時：2006 年 12 月 6 日

現代標準アラビア語の成立を通じて、いかに現在のアラブ世界が形成されたかをめぐって討議。

第 2 回拠点セミナー

日時：2006 年 12 月 13 日

「現代イランにおける法学権威」、「アラブ世界におけるアフガーニー研究概観」などの報告。

第3回拠点セミナー

日時：2006年12月20日

「『ガラル』とは何か：経済学における『リスク／不確実性』概念からの問い」、「アラブ首長国連邦における国家統合力学の解析」、「スンナ派神学の聖者論」などの報告。

第4回拠点セミナー

日時：2007年1月24日

「現代中央アジアにおける絨毯制作と女性：ウズベキスタン、ホラズム州ヒヴァ市の事例から」、「現代イラクにおける政治変動とイスラーム政党：シーア派革命思想とサドル指導下のダワワ党をめぐって」などの報告。

連携研究会

日時：2007年1月27日

「アラビア語文法書をめぐって」(新妻仁一 亜細亜大学教授)などの報告。(科研基盤B「地域言語としてのアラビア語」研究会との連携研究会。)

第5回拠点セミナー

日時：2007年3月13日

「現代標準アラビア語の成立と現代アラブ世界の形成」、「アフガーニー研究をめぐり方法論的考察」、「現代世界におけるイスラーム金融の理論と実践」、「東エルサレムにおける非暴力的抵抗をめぐり研究展望」、「スンナ派およびシーア派における宗教的権威のあり方」、「初期スンナ派神学における聖者論」、「イスマイル・ハッキーの啓典解釈学」、「現代イラクにおける政治変動とイスラーム運動」、「東アフリカ沿岸部における預言者医学」などの報告。

(2)海外派遣・調査

上掲の拠点報告「2. 今年度事業の内容、(3)海外派遣・調査」に記載の通り。

(3)外国人研究者の招聘

上掲の拠点報告「2. 今年度事業の内容、(4)外国人研究者の招聘」に記載の通り。